愛知県の縄文遺跡（１）

尾張北部地域について

川添和暁

愛知県内の縄文時代遺跡について、尾張地域・西三河地域・東三河地域の三地域に分けてみていきたい。その第一回目として尾張地域を取り上げる。この地域は、周辺地域に比べて縄文時代の遺跡が決して多い方ではない。しかし、近年、沖積平野上の縄文遺跡の発見がいくつかあり、また洪積台地上でも新たに縄文時代の遺跡の調査がなされている。ここでは、最近報告書が刊行された一宮市三ツ井遺跡と、発掘調査がなされた名古屋市牛牧遺跡を中心に、特に尾張北部地域について遺跡の様相を観察し、若干の考察を加えていく。

１．はじめに

愛知県内には、県北西部に広大な沖積地である濃尾平野、県東部には丘陵から山地、その中間に洪積台地が広がっている。また県南部は丘陵部の多い知多半島・渥美半島が海に張り出して、伊勢湾・三河湾を形成している。このような様々な立地条件にて発見される遺跡の理解は、一筋縄でいくものではない。ここでは（１）尾張地域・（２）西三河地域・（３）東三河地域に分けて、それぞれの地域で最近発掘された資料に基づいてみていこうと思う。

今回はその第一回として尾張地域を取り上げてみたい。この地域は、西三河地域と東三河地域と比較すると、発見されている縄文時代の遺跡数としては少なめである。また、縄文時代の遺物や遺構が発見されたとしても、断片的である場合が多く見られる。それでも最近の発掘調査によって、縄文時代の遺構・遺物の存在が明らかになった遺跡がいくつか報告されている。特に、遺物の表面採集などでは捉えきることが難しい濃尾平野や河川付近などの沖積地にておいて注目されるべき成果がみられる。今回は尾張地域のなかでも、特に尾張北部地域の遺跡について検討をしていきたい。そこで、最近発掘報告書が刊行された一宮市三ツ井遺跡と、発掘がなされた名古屋市牛牧遺跡を中心に見ていくこととする。

２．三ツ井遺跡の概要

三ツ井遺跡は、平成８・９年度に調査が行われ、平成11年度に本報告がなされている（田中編1999）。ここでは報告に沿って遺跡の概略を見ていく。

遺跡は、濃尾平野北部、青木川と五条川に挟まれた標高7～8mの自然堤防と後背湿地上に立地している(第１図)。学史的に著明な馬見塚遺跡からは南東2.5kmの位置に、最近後期の竪穴住居が検出された権現山遺跡(大崎・早野1998)からは北北西１kmの位置に、晩期の竪穴住居が検出された岩倉城遺跡(松原編1992)からは西へ３kmの位置に立地する。

縄文時代から中世にかけて、多少の断絶はあるもののほぼ継続して営まれていたようである。中世の島畑・古墳時代の包含層・弥生時代の包含層など、幾重にもシルトの互層が見られる下に、縄文時代の包含層である黒色粘土質シルト層が表土下120cmから200cmのレベルに存在していた。縄文時代の遺構・遺物は、後期前葉から晩期中葉までの時期に収まるようである。遺跡内のあり方から、それは後期前葉と後期中葉から晩

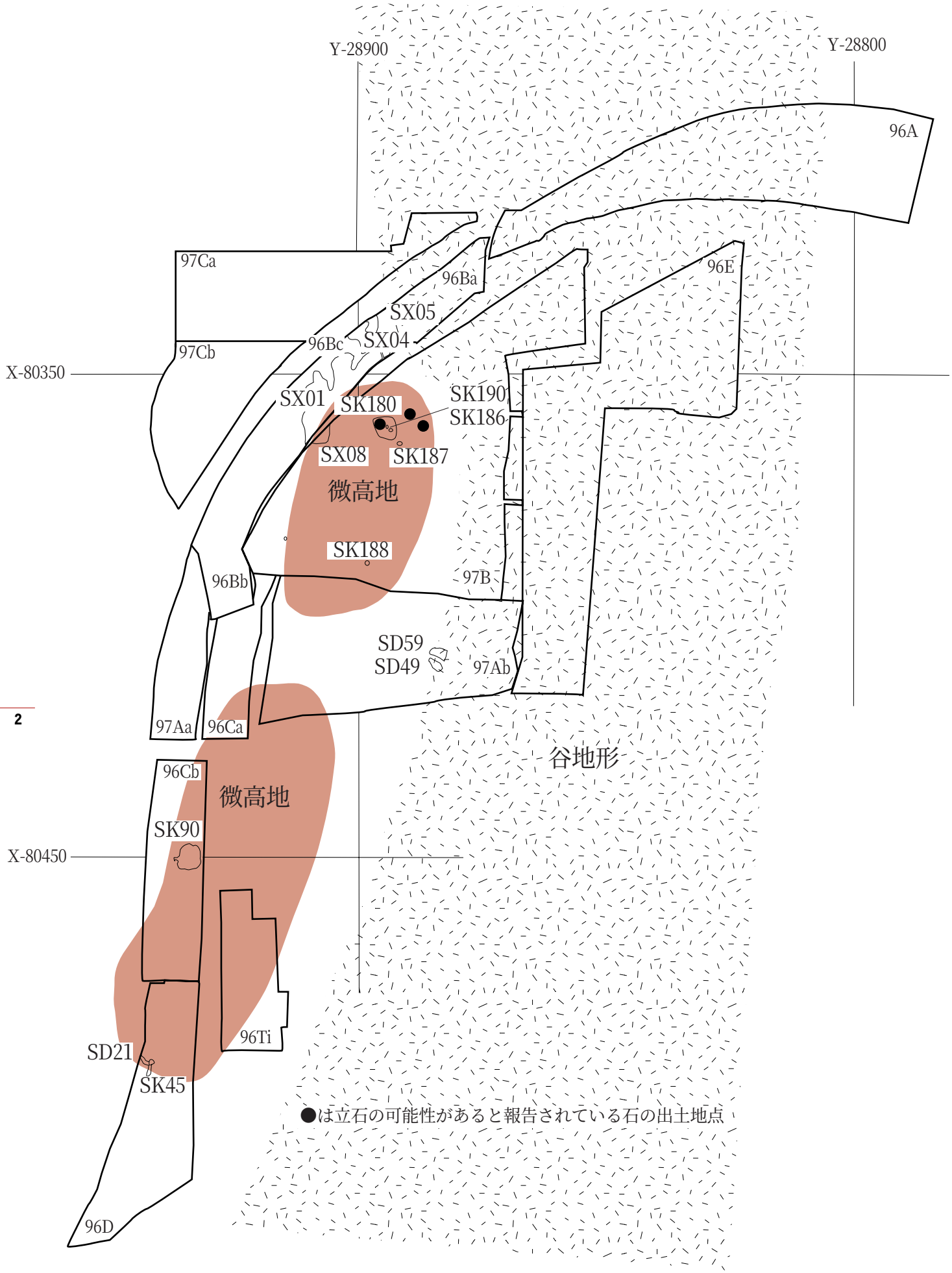


図１　三ツ井遺跡縄文時代遺構配置図（1：1,000）※田中 1999 より加筆作成

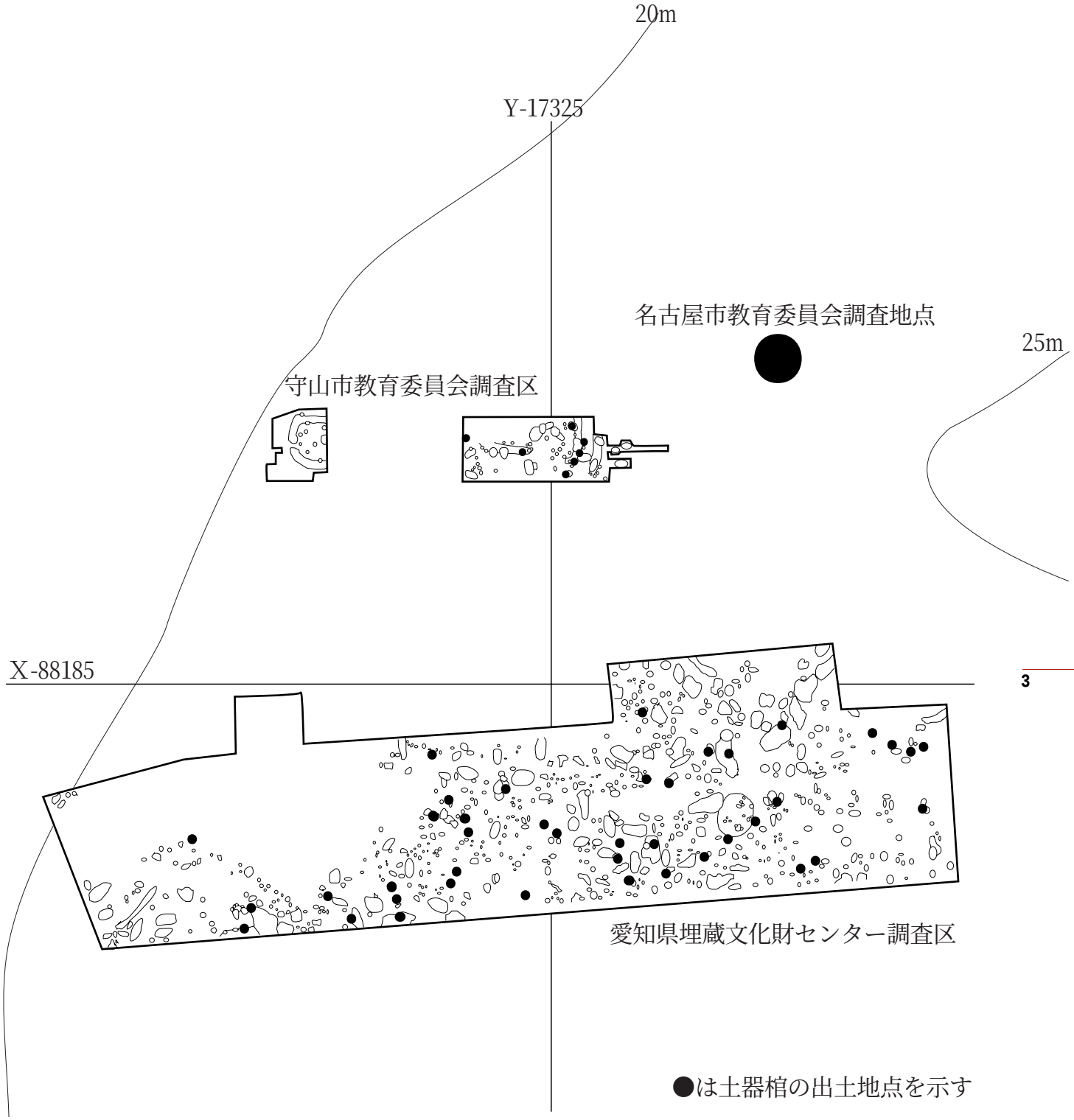


図２　牛牧遺跡縄文時代遺構配置図（1：500）

期中葉との二時期に分けられている。後期前葉の遺構・遺物は97B区の微高地上およびその周辺という、ごく限られた場所で見られたようである（第１図）。遺構は土坑群が検出されているが、人為的に運ばれてきたとされる細長い大きな自然石が４点出土しており、立石であった可能性が報告されている。一方、後期中葉から晩期中葉の遺構・遺物も97B区の微高地上を中心としているようである。確実にこの時期とされているものは溝状遺構や小土坑群などである。

以上が報告書からの要約である。第１図のように、縄文時代の遺構は主に北の微高地上から検出されている。それが弥生前期になると南の微高地上に遺構の中心が移ってくるようである。もしかしたら南の微高地上にももうすこし縄文時代の遺構がかつては存在していたのかもしれない。

３．牛牧遺跡の概要

牛牧遺跡は、庄内川と矢田川とに挟まれた、熱田層相当の守山面上に立地している。標高は21～22mで、庄内川に向かって傾斜する、台地の縁辺部に位置している。

この遺跡は、1950年代末に守山市教育委員会によって２度（伊藤ほか1961）、1961年に名古屋市教育委員会（内山1969）、1999年に愛知県埋蔵文化財センターによって調査が行われている※1。

遺跡は、台地縁辺部に沿って、北東から南西方向にわたって広がっている表土および旧耕作土の下は、黒色土（縄文時代晩期の遺物包含層・約30cm）・茶褐色土（約10cm）・明黄褐色礫層（守山面）である。台地の縁辺部に近くなればなるほど、茶褐色土がなくなり、明黄褐色礫層のうえに直接黒色土がのる場合があるようである。弥生時代・古墳時代などの遺構もみられるものの、縄文時代後期末から晩期後葉にかけてが時期の中心であり、この間は、継続して営まれたようである。遺構の中心は土器棺墓群であり、守山市教育委員会調査時の７基、名古屋市教育委員会調査時の１基、愛知県埋蔵文化財センター調査時の41基を合わせて、計49基が確認されている。それ以外にもこの時期の遺構として、住居跡や土坑群、ピットなどが数多く検出されており、縄文時代の集落の調査例として、注目される（第２図）。

４．二遺跡からみえる、尾張北部の縄文遺跡について

次に、この地域の縄文時代遺跡の分布を見ていきたい（第３図）。この地域の縄文遺跡の分布については、名古屋市内に関して、伊藤正人氏によって遺跡の立地する土地条件より３つに分類されている（伊藤・川合1993）。それによると、名古屋市の地形は、（１）東部の丘陵地、（２）中央部の洪積台地、（３）その周辺の沖積平野に分けられ、遺跡のほとんどは（２）および（１）に位置しており、（１）に位置している遺跡はごくわずかである、と述べられている。この地形分類は、ほぼそのまま尾張北部について当てはめることができる。ただし、（２）に関して、名古屋市の場合は熱田層台地もしくはそれに相当する中位段丘上がほとんどであるが、名古屋以北では北替地遺跡や織田井戸遺跡などのように下位段丘上に立地する場合が多い。また、（３）にも遺跡の立地がみられ、自然堤防上か、その付近に立地している。特に岩倉市から一宮市南部にかけての青木川水系から五条川水系にかけて多くみられ、三ツ井遺跡や権現山遺跡などから、本格的に遺跡が形成されはじめたのは後期に入ってからである。また、朝日遺跡から後期堀之内Ⅱ式の貯蔵穴が検出されたり、松河戸遺跡にて中期後半から後期前葉の遺構群がみられるなど名古屋台地の北側沖積地でも遺構の検出がみられる（神谷編1989）。

この地域にて、縄文時代を主体とする遺跡は、極めて少ない。それでも遺構がわずかでも検出されている遺跡を縄文時代の遺跡として列挙すると第１表のようになる。現在、遺構の検出が確認できている遺跡は36遺跡あり、貝層が最も多い(2)。それも半数以上の25遺跡が名古屋市内の遺跡である。名古屋市内の縄文遺跡は、（２）の

※１　1999年愛知県埋蔵文化財センターの調査概要については、『年報平成11年度』に掲載予定である。

※２　貝塚の貝層部分は、何かの人為的な作用が働いた結果、形成されたものである。従って、ここでは遺構の一つとして貝層を考えていきたい。

1下り松遺跡　2馬見塚遺跡　3佐野遺跡　4池ノ上遺跡　5三ツ井遺跡　6八劔遺跡　7権現山遺跡　8大地遺跡
9ノンベ遺跡　10岩倉城遺跡　11東薮山遺跡　12北替地遺跡　13総濠遺跡　14織田井戸遺跡　15朝日遺跡
16貴生町遺跡　17月縄手遺跡　18勝川遺跡　19町田遺跡　20松河戸遺跡　21神領遺跡　22牛牧遺跡　23名古屋
城天守閣貝塚　24片山神社遺跡　25長久寺貝塚　26堅三蔵遺跡　27旧紫川遺跡　28岩井通貝塚　29古沢町遺跡
30新宮坂貝塚　31阿由知通遺跡　32長戸町遺跡　33大喜町６丁目遺跡　34欠上貝塚　35東屋敷貝塚　36下内田貝塚
37大曲輪貝塚　38新屋敷貝塚　39曽根遺跡　40春日野町遺跡　41見晴台遺跡　42下新町遺跡　43市場遺跡
44粕畑貝塚　45本城町遺跡　46上ノ山貝塚　47上ノ山遺跡　48上ノ山第二貝塚49大根貝塚　50新海池遺跡
51上ノ山南貝塚　52鉾ノ木貝塚　53清水寺・森下遺跡　54光正寺遺跡　54雷貝塚　55東山公園遺跡

図３　尾張北部の主要縄文時代遺跡分布図（1：100,000）

洪積台地に立地しているものがほとんどである。

この地域の縄文遺跡は、1.沖積地の自然堤防などの微高地上に立地している遺跡、2.洪積台地上に立地している遺跡にほぼ分けられる。1に関して、現在のところ庄内川水系と五条川・青木川水系にて遺構の確認がなされている。沖積地に立地している遺跡に関しては縄文海進・海退と、河川の氾濫・洪水などの土砂の堆積とによって分かりにくいものになっている。濃尾平野の縄文海進・海退に関しては、海津正倫氏が次のようにまとめている（海津1994）。縄文海進によって内湾が最も拡大したのが縄文早期末から前期にかけてである。その後中期に若干の海水準低下があったものの、後期頃に再度の海進があった。そして、後期後半以降、また若干の海水準低下がみられる。1の遺跡群は中期の海水準低下の後、後期の再海進にて海水が侵入してきたか否かによって、遺跡の形成に違いが生じているのではないのだろうか。2に関しては、名古屋市内の遺跡とそれ以北とで違いが見られる。前者は、ほぼ熱田層もしくはそれに相当する中位段丘に遺跡が立地している。一方、後者は、下位段丘上にも遺跡が形成されている。これは、1と同様に後期以降の再海進の影響であろう。1の後期の再海進を受けていない遺跡の例として三ツ井遺跡を、2の中位段丘上に立地している遺跡の例として牛牧遺跡をあげることができる。

5．今後の課題

西日本の縄文遺跡の立地条件として、沖積平野を取り上げ、遺跡形成の要因を考察されたのは、渡辺　誠氏や泉　拓良・亀井節夫両氏である（渡辺1975、泉・亀井1985）。そして、尾張北部地域にては、春日井市町田遺跡にて、春日井市の沖積地遺跡に関して、考察がなされている（神谷編1989）。この地域の縄文遺跡の立地条件は、端的には「西日本的」ということになるのだろう。しかし、それらの遺跡のなかには、縄文海進・海退というプロセスにより、遺跡の形成前・後に影響を受けているのかどうかをも検証する必要もあるだろう。また名古屋市内の場合は、熱田層、もしくはそれ相当の中位段丘上に立地している場合がほとんどであり、今後その中で、遺跡間相互の関係を構造的に説明できてくるかもしれない。

また今回は取り上げなかったが、この地域は濃尾平野北部周辺部、岐阜県側とも関連して考察されなければならないであろう。現在発見されている遺跡は、岐阜市側から各務原台地方向へかけての下位段丘以上など、低地部周辺の段丘上がほとんどである。沖積地に遺跡が知られている例はあまり多くないようであるが、岐阜市の西野々遺跡や龍門寺遺跡のように丘陵部ふもとの自然堤防・扇状地上に立地している場合もわずかながらみられる。これらの遺跡では縄文中期および晩期の土器が出土しているとのことから、尾張北部の自然堤防上の遺跡との状況に類似している可能性がある。

いずれにしてもこの地域は、縄文時代の遺跡としては、他地域と比べても、決して資料が豊富にあるとは言えない。その中で、特に最近調査がなされた、三ツ井遺跡・権現山遺跡・岩倉城遺跡は、資料的な空白を埋める意味でも重要であり、牛牧遺跡は、同時期の遺跡である馬見塚遺跡や雷遺跡・大曲輪貝塚などとの関係をも考慮して、それらにより縄文時代晩期の集落様相の解明に近づけられるであろう。

遺跡名	遺構の種類（時期）	特記事項	文献
馬見塚遺跡	ピット・炉跡・土器棺（晩期）	ピットからは焼けた人骨片	岩野1970
三ツ井遺跡	土坑（後期・晩期）		田中編1999
西山神Ｂ遺跡	炉跡（中期後葉）	土器が埋設されている石囲い炉	宮川1981
権現山遺跡	竪穴住居跡（後期）		大崎・早野1998
岩倉城遺跡	竪穴住居跡（晩期）		松原1992
西北出遺跡	溝状遺構、貯蔵穴（後期中葉）	貯蔵穴からカシ・シイの実、	大参1978
織田井戸遺跡	住居跡（早期）		中嶋1983
朝日遺跡	ピット（後期前葉）		渡辺1989 石黒編1991
神領遺跡	竪穴住居跡・土坑(中期後葉)	竪穴住居跡から石囲い炉	浅田・高橋1998
松河戸遺跡	土坑(前期)・中期後半から後期前葉の遺構群		赤塚1994
大六遺跡	土器棺（晩期前葉）		宮石ほか1963
二之輪遺跡	土器棺（晩期）		名古屋市博物館1984
牛牧遺跡	土器棺・住居跡・土坑など（晩期前葉から後葉）		伊藤ほか1961 内田1963
長久寺貝塚	貝層（中期後半）		安達1997
名古屋城天守閣貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
岩井通貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
片山神社遺跡	炉跡（中期末）	屋外炉	伊藤・川合1993
古沢町遺跡	溝状遺構		吉田・和田1971
欠上貝塚	貝層・炉跡	埋設土器の存在	小栗1941 伊藤・川合1993
下内田貝塚	住居跡（前期・晩期）・炉跡・ 貝層（前期）・埋葬人骨・土器棺（晩期）		安達1997
大曲輪貝塚	貝層・人骨・住居跡（早期後葉）		伊藤・川合1993
瑞穂遺跡	住居跡（中期末）		服部1987
田光遺跡	竪穴遺構（晩期）		伊藤・川合1993
東屋敷貝塚	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
新宮坂貝塚	貝層（早期後葉・前期）		伊藤・川合1993
上の山貝塚	貝層・ケルン状の焼礫遺構（早期後葉）		伊藤・川合1993
大根貝塚	貝層（前期前半）		森1978
鉾ノ木貝塚	貝層（前期前葉）		増子1976
光正寺貝塚	貝層（前期末）		増子1976
雷貝塚	貝層・埋葬人骨		安達1997
氷上貝塚群	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
斎山貝塚群	貝層（晩期）		伊藤・川合1993
新屋敷貝塚	貝層（早期末から前期初頭）		伊藤・川合1993
見晴台遺跡	貯蔵穴（晩期）	堅果類	伊藤・川合1993
粕畑貝塚	貝層（早期後葉）		吉田・杉原1937
清水寺・ 森下遺跡	住居跡（中期後葉）		伊藤・川合1993

表１　尾張北部地域縄文時代遺構一覧表

参考文献

赤塚次郎編　1994『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
浅田博造・高橋健太郎　1998『平成９年度　神領遺跡発掘調査概要報告書』春日井市教育委員会
泉　拓良・亀井節夫　1985「北白河追分町縄文遺跡の調査と意義」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』207～208 頁京都大学
安達厚三　1997「縄文時代」『新修　名古屋市史１』45～165 頁名古屋市
石黒立人編　1991『朝日遺跡Ⅰ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
伊藤敬行・内山邦夫ほか　1961『牛牧遺跡』守山市教育委員会
伊藤正人・川合　剛　1993『特別展　名古屋の縄文時代　資料集』名古屋市見晴台考古資料館
岩野見司　1970『新編　一宮市史　資料編一』一宮市
内山邦夫　1969「牛牧遺跡の第三次調査」『守山の古墳』調査報告第二．129～132 頁名古屋市教育委員会
海津正倫　1994『沖積低地の古環境学』東京
大崎正敬・早野浩二　1998「権現山遺跡」『年報　平成９年度』70～73 頁（財）愛知県埋蔵文化財センター
大参義一　1978「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について」『名古屋大学文学部研究論集 74』1～20 頁名古屋
小栗鉄次郎　1941「名古屋市昭和区大曲輪貝塚及下向井貝塚」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告 19』9～39 頁愛知県
神谷友和編　1989『町田遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
田中伸明編　1999『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
中嶋　隆　1983『織田井戸遺跡発掘調査報告書』小牧市教育委員会
名古屋市博物館　1984『守山の遺跡と遺物』名古屋市博物館
服部哲也　1987『瑞穂遺跡 - 第４次発掘調査概報 -』名古屋市教育委員会
松原隆治編　1992『岩倉城遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
増子康真　1976「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究」『古代人』32. １～30 頁名古屋考古学会
宮石宗弘・水野　収ほか　1963『大六遺跡』瀬戸市教育委員会
宮川芳照　1981「下林遺跡付近の縄文遺跡」『下林遺跡』23～28 頁大口町教育委員会
森　達也　1978『尾張天白川流域の諸遺跡』名古屋
吉田富夫・杉原荘介　1937「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(1)」『考古学』８ -10.439～455 頁東京
吉田富夫・和田英雄　1971『古沢町遺跡発掘調査報告書　縄文時代編』名古屋市教育委員会
渡辺　誠　1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
渡辺　誠　1989「朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体」『年報　昭和 63 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

東海地方の鳥形木製品

～本川遺跡出土例の検討～

飴谷　一・佐藤公保

豊田市に所在する本川遺跡では、平成10年度に発掘調査を実施した調査区から古墳時代中期に属する鳥形木製品が出土した。写実的に表現されたこの木製品は、「胴部両側面に12カ所、上面に２カ所、計14カ所に小孔が見られる」・「腹部が浅く刳り抜かれている」という、他の遺跡の出土例には見られない２つの特徴を持つ。

１．はじめに

本稿は本川遺跡で出土した鳥形木製品と東海地方で出土しているものとを比較し、使用法と地域性の検討を試みたものである。

２．出土状態と時期の検証

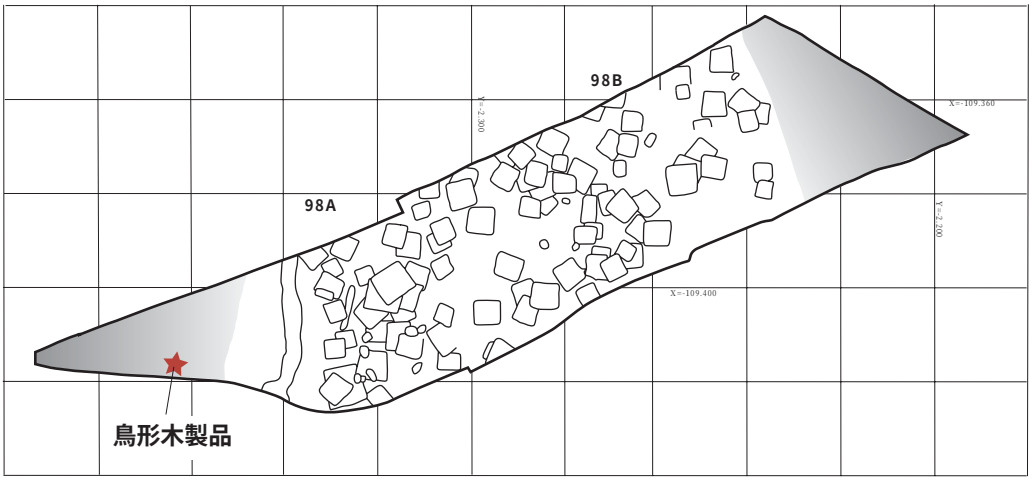
本川遺跡は豊田市南部、矢作川右岸の標高20ｍの沖積地に位置する。遺跡の調査は平成10年度に実施され、弥生時代後期と古墳時代中期の竪穴住居や戦国時代の屋敷地等を確認している。

鳥形木製品は集落西端の谷内の窪地から出土している（図1）。窪地の埋土はシルトと植物遺体が互層になり、鳥形木製品が出土した上層では多量の流木がみられ、中には加工痕のある木製品も存在した。このことから窪地は幾度も水に浸りながら、その都度、流木等が運び込まれ徐々に埋没していったことが窺える。

窪地の落ち際には杭列がみられ、横木を伴う杭も存在する。当初、窪地内に水田が展開する可能性が高いと思われたが、水田関連遺構は確認できず、窪地の埋土からプラントオパールも一切検出できなかった。このことから窪地は谷が埋没していく過程で形成されたもので、杭等は掘方を維持するために打たれたものと考えられる。

窪地に伴う出土遺物は極めて少なく、鳥形木製品の時期を決定するには至らない。しかし土層の観察により、東に展開する古墳時代中期の溝とほぼ同時期に窪地は埋り始めていることが

図1　鳥形木製品出土地点



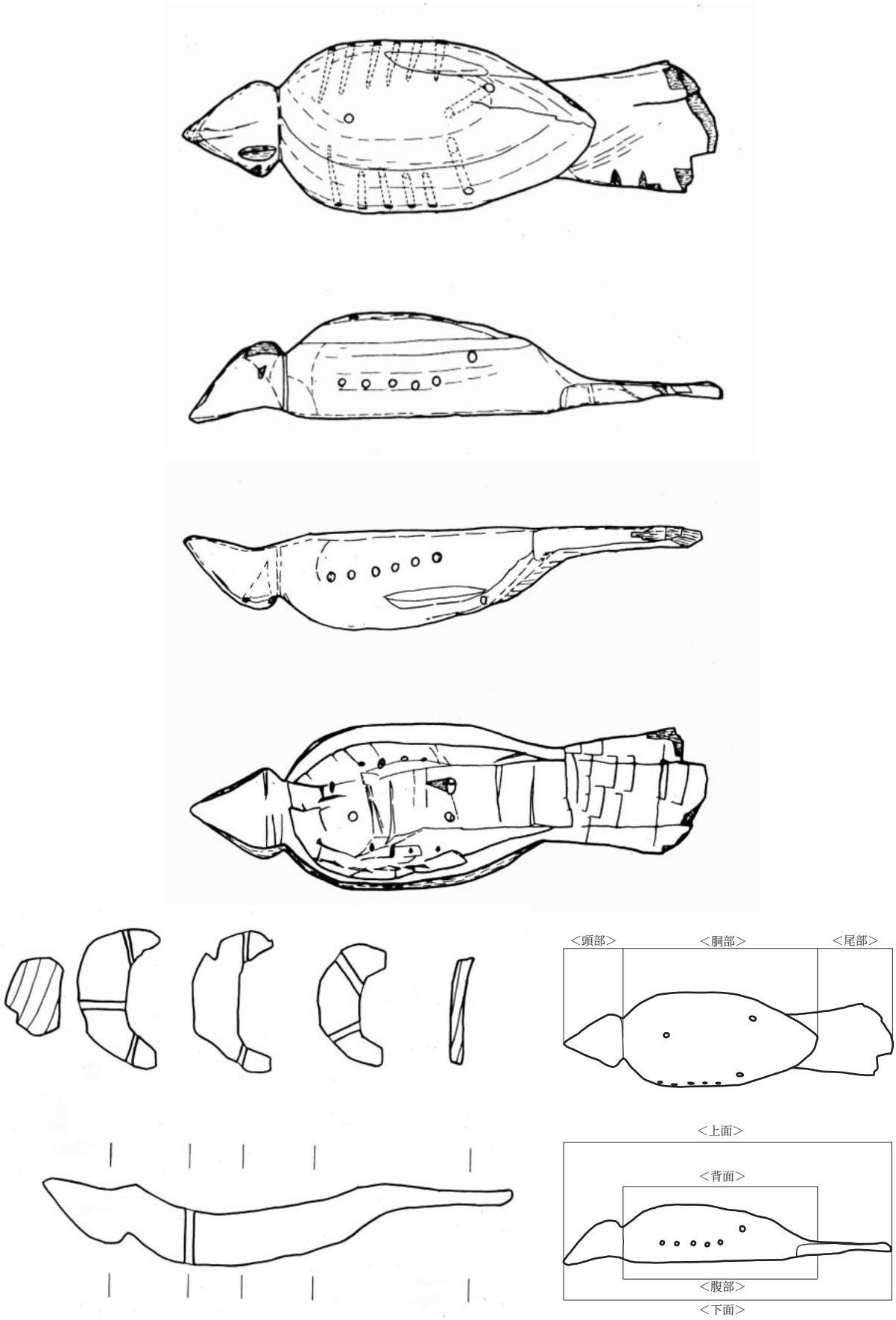


図２　本川遺跡出土の鳥形木製品実測図（1：4）および鳥形木製品部分名称図

判っている。また窪地が形成される以前には溝が存在し、古墳時代中期の古い段階の様相を示す曲柄三又鍬（樋上他 2000）が出土している。

以上の点から、この窪地から出土した鳥形木製品は古墳時代中期に属するものと考えられる。

3．鳥形木製品の形状

鳥形木製品（図２）は全長 41.4 ㎝であり、最大幅は胴部上位から中位にあり 12.1 ㎝を測る。厚さは1.5～7.3㎝を測り、胴部上位が最も厚く、尾部が最も薄い。尾部の一部が欠損しているが、ほぼ完形に近い。

上または下から見られることを意識した形状であり、頭部・胴部は厚みを持って表現される。頭部の下面はやや前方へ傾くものの、胴部・尾部の下面は平坦であり、いわば半立体的に作り出されている。また、腹部は浅く刳り抜かれており、加工痕が明瞭に残る。一方、上面の表面に加工痕は見られないが、遺存状態は非常に良い。

本川遺跡の鳥形木製品の最も大きな特徴は、胴部の両側面と背面に複数の孔が見られることである。右側面には６カ所あり、うち先頭の１カ所が未貫通であるが、残りは貫通している。最後部の孔は他の孔列から離れやや上に位置するが、他のものは横一列に並ぶ。左側面にも６カ所あり、うち２番目の１カ所が未貫通である。左の孔列は後方に向かいやや下方に向かって並ぶ。両側面の孔は、上から見ると左右対称ではなく、交互に配されている。側面の孔は穿孔が不充分であるのに対し、背面の上位と下位にある２カ所の孔は完全に貫通している。

4．研究史概略

鳥形木製品については、金関恕氏をはじめ先学諸氏によっていくつかの分類が提示され、研究が進められてきた。分類項目は、酒井龍一氏がまとめているように、研究者の「視点」によって異なる（酒井1998）。これまでに設定されたものを以下に挙げる。

Ⅰ：人の視点の位置…どの位置から見た場合に鳥とわかるか
「上から見た場合」と「横から見た場合」

Ⅱ：体部の成形方法…部位の作出し方
「立体的に作出したもの」と「平面的に作出したもの」

Ⅲ：体部の加工方法…調整痕の差違
「面取りなどをして丸みをもたせ、ていねいなもの」と「手斧痕を残し使用材の側縁部に粗く抉りを入れるもの」

Ⅳ：体部の表現方法（１）…どの状態の鳥をイメージしているか
「飛翔する鳥（動態）を表現するもの」と「翼を閉じた鳥（静態）を表現するもの」
前者については、「翼部が接合される場合」と「翼部が接合されない場合」との下部項目が用意される。

Ⅴ：体部の表現方法（２）…形態の差違
「写実的に表現するもの」と「抽象的に表現するもの」

Ⅵ：穿孔の有無
「穿孔が見られるもの」と「穿孔が見られないもの」
前者については、どの部位に見られるのか、そしてどのような穿孔がされているのかを確認しておく必要がある。

これらの分類項目を組み合わせ、各資料のもつ様々な属性に基づき、加えて文献や民俗例などを援用して、性格や用途の復元がされている。これまでのところ、金関恕氏（金関 1982・1986）や春成秀爾氏（春成 1987）に代表される「韓国の蘇塗に見られたような、農耕儀礼に関係する鳥」、水野正好氏（1982）や渡辺誠氏（1995）に代表される「集落の境界を守る鳥」の２つの考え方が有力である。

一方、大阪府雁屋遺跡では、中期末の方形周溝墓からの出土例が報告されており、後期にも滋賀県五村遺跡の墳丘墓からの出土例が見られることから、弥生時代の後期には「死者の魂を運ぶ鳥」として葬送儀礼に用いるという（山田1994）、新しい用途の分化がなされたと考えられる。

5．分類項目の提示

分類項目の設定については、人が「鳥を表現した木製品と認識できる」視点の位置を大きな基準とした。また各部位が、視覚的に明確に区分できるのか否かという点に着目し、曖昧になりがちな表現方法による形態分類はおこなわなかった。なお、翼部については、資料の提示だけにとどめる。

Ⅰ類：上または下から見た場合に鳥を表現したもの

Ⅱ類：横から見た場合に鳥を表現したもの

A類：上面と下面、あるいは側面を扁平に作出す

B類：上面を立体的に、下面を扁平に作出す

A類は、いわゆる「板作り」のもので、B類は、上面のみが、いわゆる「丸彫り」の立体的な表現になっているものである。

a類：頭部・胴部・尾部とを明確に作出す

b類：頭部・胴部・尾部との作出しが不明確

以上の分類項目に基づいて、各遺跡から出土した鳥形木製品を見ていくことにする。

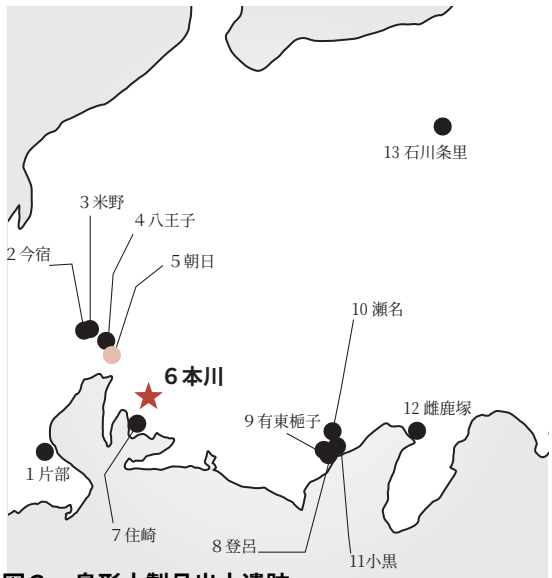


図３　鳥形木製品出土遺跡

6．東海地方の鳥形木製品

本川遺跡の例も含めて、東海地方では13遺跡において出土例がある。そして出土した部位については、体部23点、翼部13点、その他に鳥形木製品を棒の先端に固定していたと思われる鳥竿状木製品２点、計38点が報告されている。これらの該当時期は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の間であることから、本川遺跡のものとを比較する資料として有効であると考える。

１．三重県片部例（１）※1

古墳時代前期の水田にともなう大規模な灌漑用水路から出土した。頭部と体部が明確に作出されている。ＩＡａ類。

２．岐阜県今宿例（２・24）

居住域と水田域とを区画する古墳時代前期の大溝から、翼部と接合した状態で出土した。胴部は翼部を重ねるために側面を抉り、頭部と尾部を作出している。また体部・翼部共に、表面には黒い彩色が施されている。ＩＡａ類。

３．岐阜県米野例（３・４）

古墳時代前期の運河と思われる大溝から２点出土している。３は胴部に翼部を接合させるための抉りが施され、目釘穴が１つ穿たれている。ＩＡａ類。４は頭部と胴部を作り出しており、断面は緩やかな膨らみを呈する。ⅡＡａ類に分類される。またこの大溝からは刀形木製品や舟形木製品も出土している。

４．愛知県八王子例（５・25・26）

古墳時代前期の祭祀場と見られる井泉の南側にある旧河道から出土した。頭部と体部、尾部を明確に作出している。また体部側面には線刻人面が描かれていることから、線刻文を描いた板材を転用したものである。ⅡＡａ類。ほかに翼部が２点※2、刀形木製品も出土している。

５．愛知県朝日例（６・７・8※3）

６・７は弥生時代後期の谷上層から出土した。ややデフォルメされているが、頭部と胴部が作り出されており、７には側面に穿孔がなされて

※１　嬉野町教育委員会和気清章氏の御厚意により、資料を提供していただいた。

※２　未発表資料。調査担当者である本センター職員樋上昇氏より、御教示を受けた。

※３　報告書『朝日遺跡Ⅲ』では、「包含層中出土」となっているが、調査担当者である本センター職員宮腰健司氏の御教示によると、「弥生時代後期の環濠がその機能を停止し、埋没する過程に形成された、溝状の窪地（古墳時代前期初頭）から出土した」とのことである。

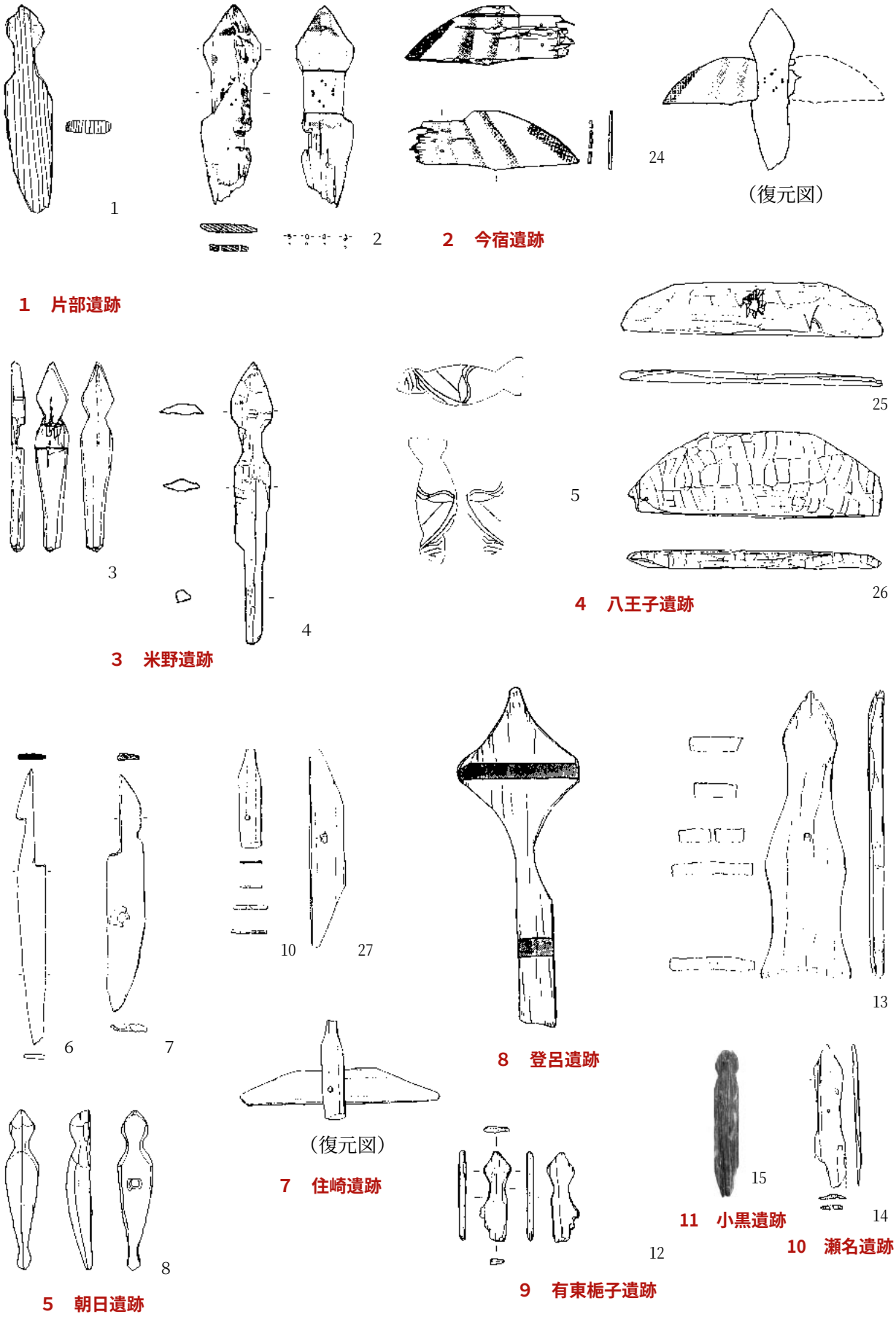


図４　東海地方の鳥形木製品１（８のみ１：4、他１：8）

いる。共にⅡＡｂ類。８はＩＢａ類に分類でき、腹部に穿孔が見られるが、貫通はしていない。古墳時代前期の集落の縁辺部から出土した。

７．愛知県住崎例（10・27）※4

体部は両端を欠き、頭部は細くしただけのデフォルメされたものである。体部、翼部共に１箇所の穿孔がなされている。ＩＡｂ類。他に剣形木製品が１点出土している。

８．静岡県登呂例（11）※5

体部の両側面は欠損しているが、頭部は、両側面から抉りを入れて作出されている。表面には手斧痕が明瞭に残る。ＩＡａ類。

９．静岡県有東梔子例（12）※6

12は水田面からの出土である。頭部を作出しているが、胴部下半部は欠損しており、詳細は不明である。ＩＡａ類に分類できようか。

10．静岡県瀬名例（13・14）※7

弥生時代後期から古墳時代前期初頭の水田から２点が出土した。13は頭部と胴部、尾部を作出しており、表面には明瞭な手斧痕が残る。また頭部先端には、両側から小さな抉りを入れ嘴を表現している。胴部に１箇所穿孔がなされている。14は胴部以下が欠損しており、詳細は不明である。やや長く表現されている頚部には１箇所穿孔が施されている。共にＩＡａ類。同時期の水田からは、舟形木製品も出土している。

11．静岡県小黒例（15）※8

15は尾部が欠損しているが、体部側面に抉りを入れて、頭部と胴部、尾部とを作出している。表面の加工痕は不明瞭である。ＩＡａ類。

12．静岡県雌鹿塚例（16～21・28～32）※9

６点いずれもが、集落の立地する微高地縁辺部の低湿地から出土しており、すべてＩＡａ類に分類される。16は約90㎝の長さをもつ大型製品で、側面から抉りを入れることにより、頭部と胴部、尾部を作出している。そして胴部は緩やかに膨らみ、縦に２列の穿孔が見られる。17はもっとも写実的に成形されており、胴部中央に１箇所の穿孔がなされている。18～20は、両側に方形の翼を表現した独特の形態を呈する。胴部中央の２箇所の穿孔には、やや擦れた痕跡が見られる。21は未製品であろう。また翼部も４点出土している。穿孔部位の状況などから、容器底板を転用したもの（28）、エブリを転用したもの（32）など、他の道具の転用品と見られるものもある。舟形木製品、刀形木製品、男根状木製品が供伴している。

13．長野県石川条里例（22・23・33～37）

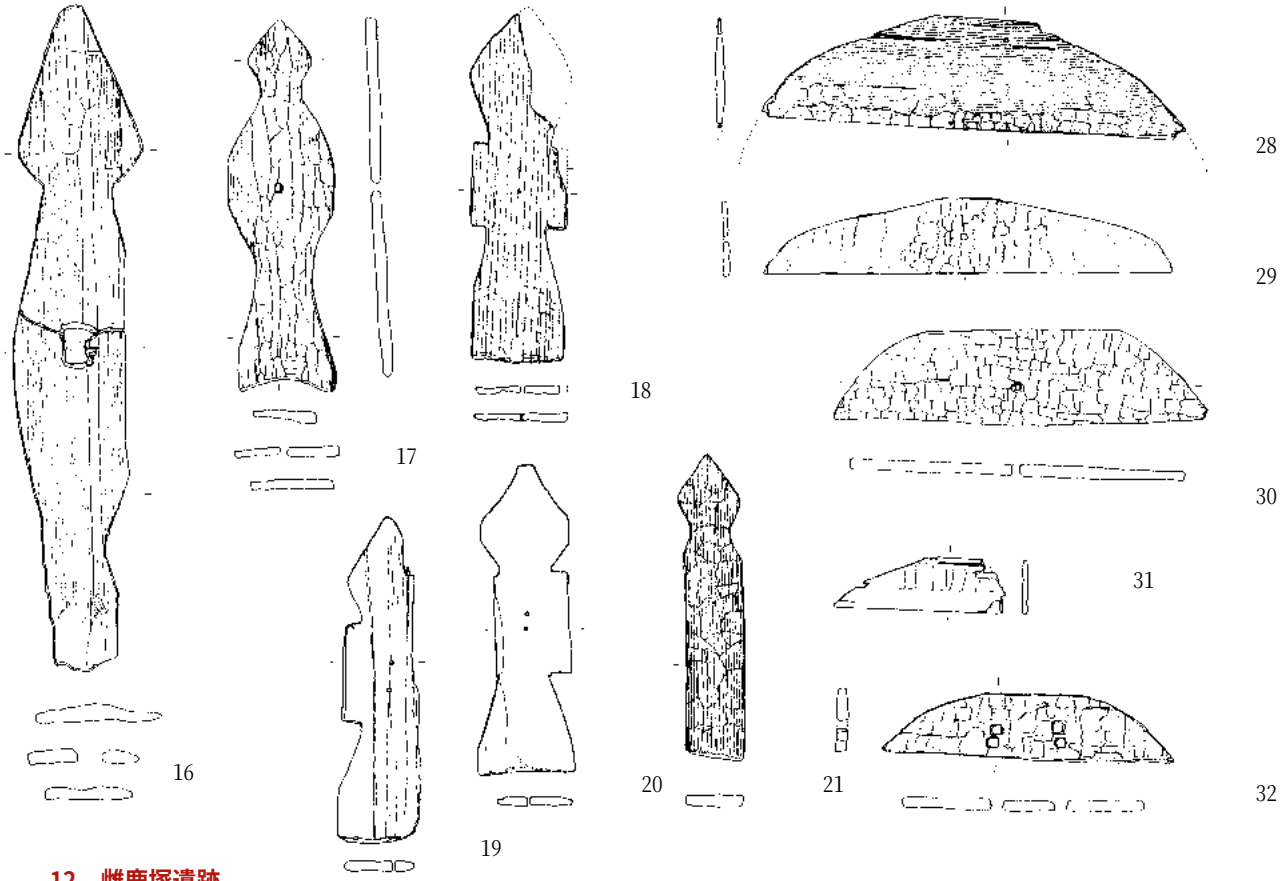
22は頭部を細くしたデフォルメされたものであるが、尾部をやや広げて作出している。体部には翼部と接合する穴を含めて３箇所の穿孔が見られる。23と34は軸部（37）によって接合されたままの状態で出土した。23は頭部を細くしただけのデフォルメされたものである。軸部は別材に挿入されていた可能性がある。いずれも古墳時代前期の水田土手上から出土しており、ＩＡｂ類に分類される。

６．鳥形木製品の検討

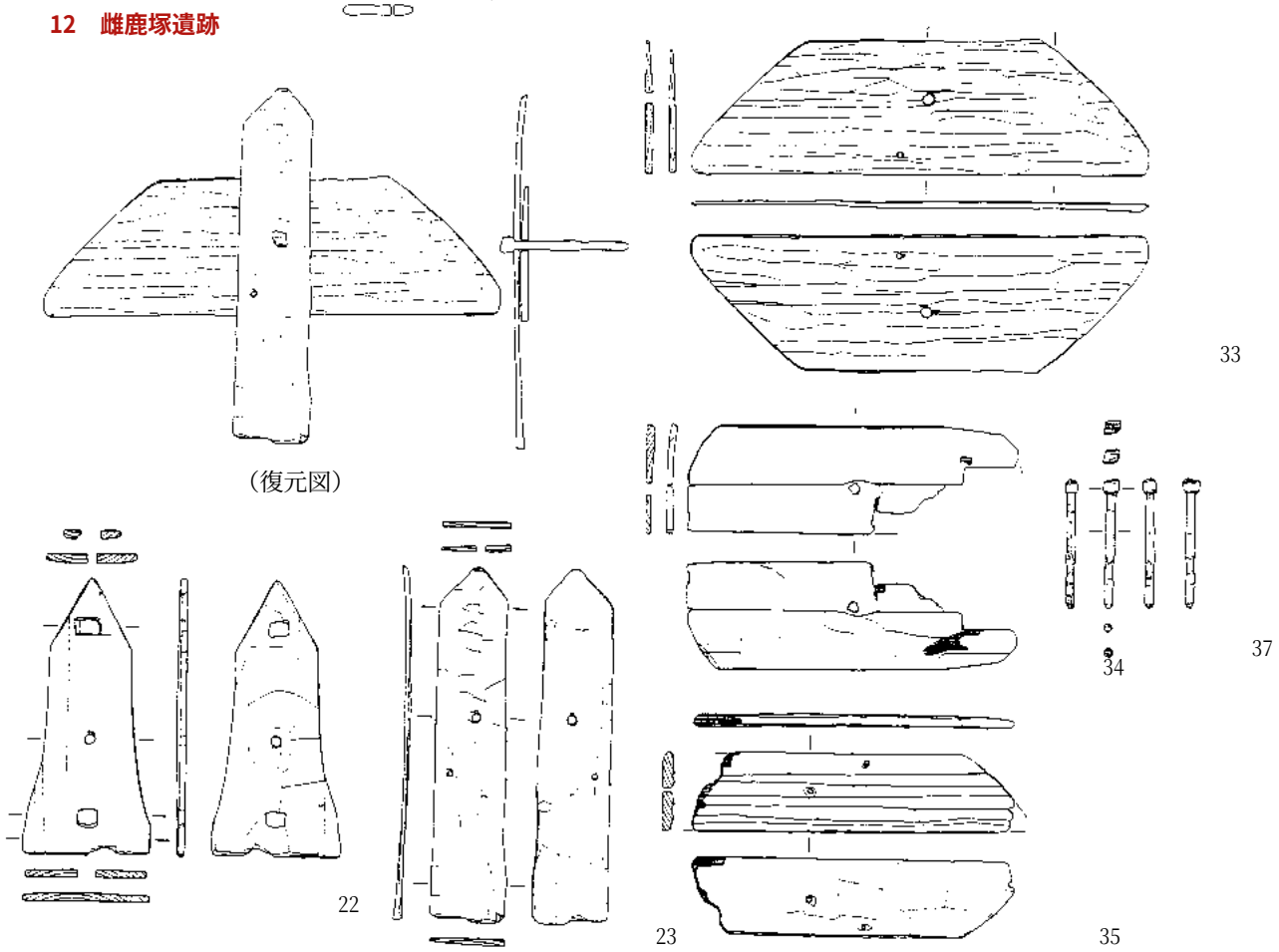
以上の出土例を形態別に見てみると、ＩＡａ類14点、ＩＡｂ類３点、ＩＢａ類１点、ⅡＡａ類２点、ⅡＡｂ類２点となる。ＩＡａ類の数が突出する傾向は、山田康弘氏が指摘（山田1996）されているように、東海地方の特徴を表していると言える。そして畿内地方で多く報告されている「体部を立体的に作出し、丸みをもたせた丁寧なつくり」をもつ例は、東海地方においては見られない。朝日遺跡出土例（８）は、小型で上面を立体的に作出す丁寧なつくりがなされている点では共通するが、下面が平坦に作出されている点で異なる。このタイプは他の地域では見られないことから、畿内地方から伝播する過程で変容し、東海地方に定型化したと思われる。また古墳時代前期の段階に初現が認められる、デフォルメされたＩＡｂ類の例も、近畿地方以西では出土していないことから、東海地方に系譜が求められるタイプである。

装着方法について見てみる。具体的な装着例が明らかなのは、石川条里遺跡出土例のみである。これは、体部・翼部が軸部によって接合した形で出土しており、「鳥形態として、軸部を通し

※４西尾市教育委員会鈴木とよ江氏の御厚意により、実見させていただいた。　※５静岡市立登呂博物館中野宥氏の御厚意により、実見させていただいた。　※６静岡氏教育委員会菊田宗氏の御厚意により、実見させていただいた。なお、『有東梔子遺跡（静岡市教委1987）30頁第14図25に「鳥形類似」と報告されている遺物は、鳥形木製品とは認め難く、今回の対象とはしなかった。　※７静岡県埋蔵文化財研究所大石泉氏の御厚意により、実見させていただいた。　※８未報告資料。静岡市立登呂博物館中野宥氏の御厚意により、実見させていただき、図版の掲載の許可を得た。　※９沼津市教育委員会笹原芳郎氏の御厚意により、実見させていただいた。



12　雌鹿塚遺跡



13　石川条里遺跡

図５　東海地方の鳥形木製品２（雌鹿塚１：10・石川条里１：8）

て竿、板などの台木にはめ込まれ」た様子が復元できる（臼居：1997）。今宿遺跡出土例は、体部と翼部が目釘によって接合されている。これらを含めて、体部にほぞ穴が穿たれている例は14点見られた。朝日遺跡出土例（７）を除いて、いずれもＩ類である。これらは１㎝以上の大きさの穴が１ないし２つ穿たれているものと小さな貫通孔を２つ以上穿つものとに分かれ、穿孔の数は一定していない。これは翼部との装着方法の違い、あるいは用途の違いによるものと思われる。また、Ⅱ類については、柄に切り込みを入れて挟み込んで装着されたと考えられる（山田:1996）。

体部・翼部あわせた、出土した遺構別の点数は、水田関連遺構11点、旧河道・谷地形６点、大溝２点、包含層15点、不明・その他３点である。形態別に出土した遺構を見ていくと、もっとも多くの出土例が見られた水田関連遺構では、ＩＡａ類５点、ＩＡｂ類２点を数える。以下、旧河道・谷地形では、ⅡＡａ類１点、ⅡＡｂ類２点、大溝では、ＩＡａ類１点、ⅡＡａ類１点である。このような遺構から出土する鳥形木製品には、武器形木製品、舟形木製品、男根状木製品が供伴する場合が多いことから、水に関わる農耕儀礼を執り行うときのセットであった可能性もある。集落の周縁の包含層から出土した雌鹿塚遺跡の場合も、こうした木製品をともなっており、また出土例（26）・（32）のように、農具と思われる木製品から転用して製作していることからも、鳥形木製品が農耕祭祀に関わる道具であったことが窺われる。

一方、朝日遺跡出土例（８）のタイプは、集落の縁辺付近から出土している。こうした出土地点は、前記したＡ類の場合と異なり、外界と居住域との境界にあたる。したがって、水野氏・渡辺氏の言う「境界を守る鳥」として「出入口での使用を肯定することは可能」（鈴木：1996）と言える。

７．本川遺跡の鳥形木製品の位置づけ

東海地方から出土した鳥形木製品の形態、出土地点について検討を加えてきた。これらをもとに本川遺跡から出土した鳥形木製品を考えてみよう。

本川遺跡の鳥形木製品は、今までに例のない特徴がいくつか見られる。そこで、今一度その特徴をまとめてみる。

１．ＩＢａ類に分類される。すなわち、上または下から見た場合に鳥を表現しており、上面を立体的に、下面を扁平に作出している。そして、頭部・胴部・尾部の各部位を明確に区分できる。

２．腹部は、浅く刳り抜かれている。

３．上面の表面に加工痕は見られないが、刳り抜かれた腹部および尾部下面には、明瞭な加工痕が残る。

４．胴部の両側面に６ヶ所ずつの小孔が穿たれているが、対称にはならない。そのうち、右側５ヶ所、左側５ヶ所が貫通している。また、胴部の上面にも貫通する２つの穿孔が見られる。

５．出土地点は、集落の西の境界となる谷地形に形成された窪地である。周辺遺構との前後関係から、古墳時代中期に属する。

以上の点から、次のことが言えよう。

Ａ：上面のみであるが、体部を立体的に作出している形態は、朝日遺跡出土例（８）に類似する。そして出土地点も、「集落の縁辺」と共通点が見られる。一方、朝日遺跡のものは近畿地方の鳥形木製品に見られるような腹部に穿孔が施されるのに対して、本川遺跡のものはを浅く刳り抜かれている。したがって、装着法は異なっていたと思われる。

また、朝日遺跡の例が古墳時代前期に属するのに対し、本川遺跡の例は古墳時代中期に属するという、所属時期の相違がある。加えて、前者が尾張、後者が三河の出土という出土地域でも異なる。

これらの点から、両者を直接的な系譜で結ぶ

ことは難しい。しかし、共に「半立体」的で「境界地点から出土した」という点では共通している。対して、板作りされた「平面」的のものは、舟形木製品や武器形木製品、男根状木製品と供伴した形で、水田関連遺構を含めた水に関わる遺構からの出土例が多い。このことから、「半立体」型と「平面」型とに、用途の差異を考えることができる。したがって、本川遺跡出土例と朝日遺跡出土例（８）を１つのグループとしてみることは可能である。

今後、東海地方において、このタイプの鳥形木製品の資料の増加を待ちたい。

Ｂ：特に体部の下面に、加工痕が明瞭に残っている。長時間固定した状態で使用したとすれば、摩擦や風化によって加工痕が不明瞭となり、あるいは胴部に穿たれた小穴も擦れるであろう。出土状況からは、その使用法を復元することは困難であるが、長期間にわたって外部にさらされて使用したものであるとは考えにくい。

Ｃ：両側面に６ヶ所ずつ、上面に２ヶ所の計14ヶ所の穿孔が見られるが、すべては貫通していない。体部にこれほど穿孔がなされている鳥形木製品は、各時代に出土しているものを探しても見当たらない。側面の小穴については、シベリアの例（枡本:1993）にもあるように、実際に羽根が差し込まれていた可能性もある。また、上面の２ヶ所の小穴については、装飾を施すためのものか、もしくは固定用のためのものであった可能性がある。

本稿をまとめるにあたり、本センター職員の樋上　昇氏には木製品についての様々な助言をいただいたのをはじめ、次の方々に御教示をいただき、お世話になった。記して感謝の気持ちに代えることとしたい。（敬称略）

浅野毅、大石泉、菊田宗、笹原芳郎、鈴木とよ江、中野宥、山田康弘、和気清章、渡辺　誠

引用・参考文献

臼居直之　1997「第３節 祭祀具」『石川条里遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15
金関恕　1982「神を招く鳥」小林行雄博士古稀記念論文集刊委員会編『考古学論考』平凡社
金関恕　1986 「呪術と祭」『岩波講座日本考古学』第４巻岩波書店
酒井龍一　1998「鳥形木製品の考古学―その研究に見通しはあるか―」『日本の信仰遺跡』雄山閣
鈴木とよ江　1996「第３節 鳥形木製品について」『住崎遺跡』西尾市教育委員会
樋上昇ほか　2000「豊田地区出土の木製品について」本書収録
春成秀爾　1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 12 集
枡本哲　1993「鳥形をめぐる儀礼の研究ノートーシベリア諸民族に見られる鳥形使用の儀礼の分析からー」『大阪府弥生文化博物館研究報告』第２集
水野正好　1982「弥生時代のまつり」『歴史公論』第 82 号　雄山閣
山田康弘　1994「祭りを演出する道具―弥生時代の鳥形木製品―」『季刊考古学』第 47 号雄山閣
山田康弘　1996「鳥形木製品の再検討」『信濃』第 48 巻第４号
渡辺誠　1995「韓国の蘇塗と弥生時代の鳥形木製品」『西谷眞治先生古稀記念論文集』西谷眞治先生の古稀をお祝いする会

図版出典　※番号は図４・５および表１に対応する。

１．嬉野町教育委員会　1996『片部遺跡４次調査現地　説明会資料』
２．春日井　恒編　1998『今宿遺跡　ソフトピアジャパン造成工事に伴う緊急発掘報告書』岐阜県土地開発公社・財団法人岐阜県文化財保護センター
３．嬉野町教育委員会主催「海・港・交流」シンポジウム（1999）にて、大垣市教育委員会高田康成氏による発表資料から転載
４．赤塚次郎　1996「八王子遺跡出土の線刻人面が描かれた鳥形木製品」『埋蔵文化財愛知』№ 48
５．宮腰健司編　1992『朝日遺跡Ⅲ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
７．鈴木とよ江編　1996『住崎遺跡』西尾市教育委員会
８．山田康弘　1996「鳥形木製品の再検討」『信濃』第 48 巻第４号「第３図－６」より転載
９．伊藤寿夫他　1989『有東梔子遺跡Ⅱ　第３次発掘調査報告書』静岡市教育委員会
10．中山正典他　1994『瀬名遺跡Ⅲ　遺物編Ⅰ』（財）静岡県埋蔵文化財研究所
　望月由佳子編　1996『瀬名遺跡Ⅴ　遺物編Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財研究所
12．石川治夫　1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』沼津市教育委員会
13．市川隆之他　1997『石川条里遺跡』長野県教育委員会

体部

	遺跡名	所在地	出土部位	分類	所属時期	全長（残存長）(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
1	片部	三重県嬉野町	体部	ⅠAa	古墳時代前期	30.4	6.9	1.9	水田脇水路		
2	今宿	岐阜県大垣市	体部	ⅠAa	古墳時代前期	29.4	8.4	1.2	水田脇水路	4	彩色有
3	米野	岐阜県大垣市	体部	ⅠAa	古墳時代前期	27.3	4.5	2.0	大溝（運河？）	1	羽部との接合面有
4	米野	岐阜県大垣市	体部	ⅠAa	古墳時代前期	40.4	6.1	1.9	大溝（運河？）		
5	八王子	愛知県一宮市	体部	ⅡAa	古墳時代前期	9.0	3.0	0.3	旧河道		線刻人面
6	朝日	愛知県清洲町	体部	ⅡAb	弥生時代後期	39.6	4.1	0.7	旧河道（谷上層）		
7	朝日	愛知県清洲町	体部	ⅡAb	弥生時代後期	34.0	5.5	1.0	旧河道（谷上層）	1	
8	朝日	愛知県清洲町	体部	ⅠBa	弥生時代後期	11.2	2.6	1.7	環濠	1	
9	本川	愛知県豊田市	体部	ⅠBa	古墳時代中期	41.4	12.1	7.3	谷中層	14	両側面に６箇所の穿孔
10	住崎	愛知県西尾市	体部	ⅠAb	古墳時代前期	14.6	3.2	0.4	包含層	1	
11	登呂	静岡県静岡市	体部	ⅠAa?	弥生時代後期	44.1	7.2	―	集落付近？		
12	有東梔子	静岡県静岡市	体部？	ⅡAb	弥生時代後期	22.4	4.5	2.6	水田脇水路		
13	有東梔子	静岡県静岡市	体部	ⅠAa?	弥生時代後期	13.0	3.9	0.9	水田面		
14	瀬名	静岡県静岡市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	40.1	11.3	2.0	水田畦畔杭列中	1	
15	瀬名	静岡県静岡市	体部	ⅠAa?	弥生時代後期	20.3	4.3	0.8	水田畦畔内	1	
16	小黒	静岡県静岡市	体部	ⅠAa	古墳時代前期	20.8	3.9	0.4			
17	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	89.4	15.1	2.4	包含層	1	
18	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	49.9	14.6	1.5	包含層	1	
19	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	47.0	12.9	1.2	包含層	2	
20	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	43.2	10.9	1.4	包含層	2	
21	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa	弥生時代後期	40.9	12.9	1.1	包含層	2	
22	雌鹿塚	静岡県沼津市	体部	ⅠAa?	弥生時代後期	40.2	8.4	1.6	包含層		未製品？
23	石川条里	長野県長野市	体部	ⅠAb	古墳時代前期	37.9	8.1	1.0	水田跡内の溝	3	
24	石川条里	長野県長野市	体部	ⅠAb	古墳時代前期	29.3	13.5	1.0	水田跡内の溝	2	

翼部

	遺跡名	所在地	出土部位	所属時期	全長（残存長）(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
25	今宿	岐阜県大垣市	翼部	古墳時代前期	24.8	8.7	0.6	水田脇水路	4	2と接合、彩色有
26	八王子	愛知県一宮市	翼部	古墳時代前期	38.5	7.5	1.5	旧河道	1	
27	八王子	愛知県一宮市	翼部	古墳時代前期	37.0	12.9	2.6	旧河道		
28	住崎	愛知県西尾市	翼部	古墳時代前期	29.2	5.3	0.7	包含層	1	10と接合
29	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	56.5	15.0	1.1	包含層	1	容器底板材転用？
30	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	54.4	10.3	0.9	包含層	1	
31	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	50.0	12.8	1.7	包含層	1	18と接合
32	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	22.8	7.2	0.7	包含層		
33	雌鹿塚	静岡県沼津市	翼部	弥生時代後期	38.9	9.0	1.5	包含層	4	エブリの転用？
34	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	48.0	14.5	0.8	水田跡内の溝	2	23と接合
35	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	11.5	34.5	0.9	水田跡内の溝	1	24と接合
36	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期？	34.1	8.4	1.3	水田跡内の溝	2	
37	石川条里	長野県長野市	翼部	古墳時代前期	8.7	35.9	1.7	水田跡内の溝		

鳥竿類

	遺跡名	所在地	出土部位	所属時期	全長（残存長）(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土地点	穿孔数	備考
34	石川条里	長野県長野市	軸部	古墳時代前期	13.7	2	1.4	水田跡内の溝		差込み部径1.1cm
39	石川条里	長野県長野市	鳥竿？	古墳時代前期	152		径5.1	水田跡内の溝		

豊田地区出土の木製品について

樋上　昇・永井邦仁・木川正夫

平成10・11年度にかけて発掘調査をおこなった豊田市本川・水入の両遺跡から、５世紀前半代を中心とする木製品が出土した。これらは当該期の資料としては愛知県内でも数少ないものである。特に曲柄平鍬・二又鍬・三又鍬は伊勢湾型の終末期にあたるものとして、古墳時代前期と中期の木製品の形態・組成をつなぐきわめて貴重な資料である。

１．はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、第二東海自動車道建設にともない、平成９年度から豊田市南部地域において発掘調査をおこなってきた。そのうち、平成10年度調査分の本川遺跡、同10・11年度調査分の水入遺跡では、いずれも５世紀代を中心とする集落を確認した。そして、これらの遺跡でみつかった複数の溝から、５世紀前半から中葉にかけての多数の木製品が出土している。これまで、西三河地域に限らず愛知県内全体を見渡しても、この時期の木製品の出土例はほとんどなく、きわめて貴重な資料といえる。しかし、両遺跡の正式な報告書の刊行はまだ数年先になるため、早急な資料の公開が必要であると判断し、小論で報告することとした。ただ前述のように、報告書の刊行までまだ間があることから土器等の遺物整理がほとんど進んでいないため、以下に紹介する木製品の出土遺構についても所属時期が若干前後する可能性があり、小論で述べる時期はあくまでも調査時点における見解である。

また、両遺跡は規模・立地などの点で若干の違いはあるが、出土木製品については特に各遺跡の特徴をしめす（たとえば祭祀関連など）ものは

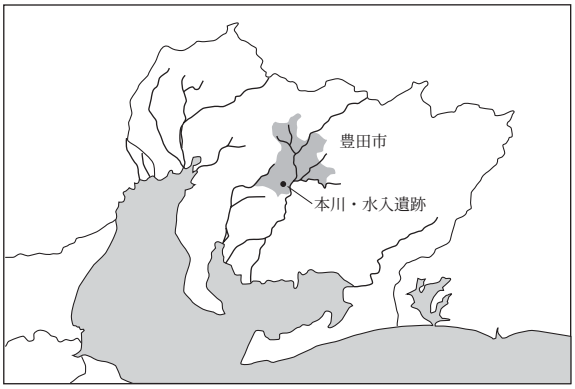


図１遺跡位置図

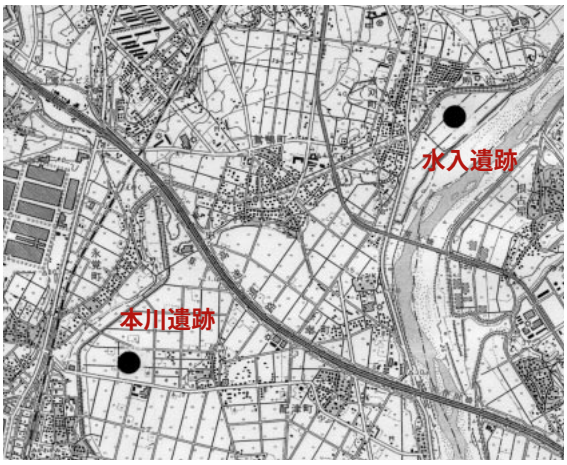


図２本川・水入遺跡位置図（1：50,000）

少なく、むしろ相互補完することによって５世紀前半～中葉頃のこの地域で使用されたごく一般的な木製品の組成を復元できるものと考え、両遺跡からの出土資料をあわせて、用途ごとに分類し記述していくこととしたい。

なお、樹種同定は平成10年度出土分についてのみ、元興寺文化財研究所でおこなった。

２．本川遺跡の概要と木製品出土遺構

本川遺跡は、豊田市の南部、永覚町大正および本川に所在している。地形的には碧海台地の段丘崖から約300ｍ南の矢作川中流域によって形成された沖積地に立地する。調査面積は15,500㎡で、調査区は段丘崖に平行して北東方向から南西方向に設定され、南から98Ａ～Ｄ区の４調査区にわかれている。出土遺構は大きく３時期にわけることができ、中世～近世の遺構は全調査区、弥生時代中～後期および古墳時代中期（５世紀前半～中葉）の遺構は98Ａ・Ｂ区で確認している。

古墳時代中期の集落は、碧海台地の段丘崖から南へのびる低い尾根上の微高地に展開している。調査区内における微高地の東西幅は約130ｍで、遺構検出面の標高は約19ｍをはかる。微高地の両端は谷状の地形となり（図２のトーン部分）、東側の谷寄りでは特に溝などの区画施設はなく、谷の落ち際まで竪穴住居が築かれている。一方、西側では谷の方向に沿って４～５条の溝を確認した。うち、ＳＤ01からは集落内の竪穴住居と同じく５世紀前半から中葉にかけての土器が多数出土しており、特に溝の中央部付近からは少量の滑石製模造品とともに手捏ねのミニチュア土器が数点出土した。最も西よりのＳＤ29は南側のみ再掘削されており、なかから大量のドングリが出土している。この溝からは時期を決定しうる遺物がほとんど出土していないが、土層の堆積状況などからＳＤ01とほぼ同時期である可能性が高いと判断している。なお、本紀要の飴谷・佐藤論文に掲載されている鳥形木製品はこのＳＤ29より西側の浅い窪地から出土した。また、ＳＤ02・03・28からは集落と時期の異なる廻間Ⅰ式併行期の遺物が出土している。小論で紹介する木製品の大半はＳＤ01からの出土で、これにＳＤ02とＳＤ29出土品が若干付け加わる。（樋上）

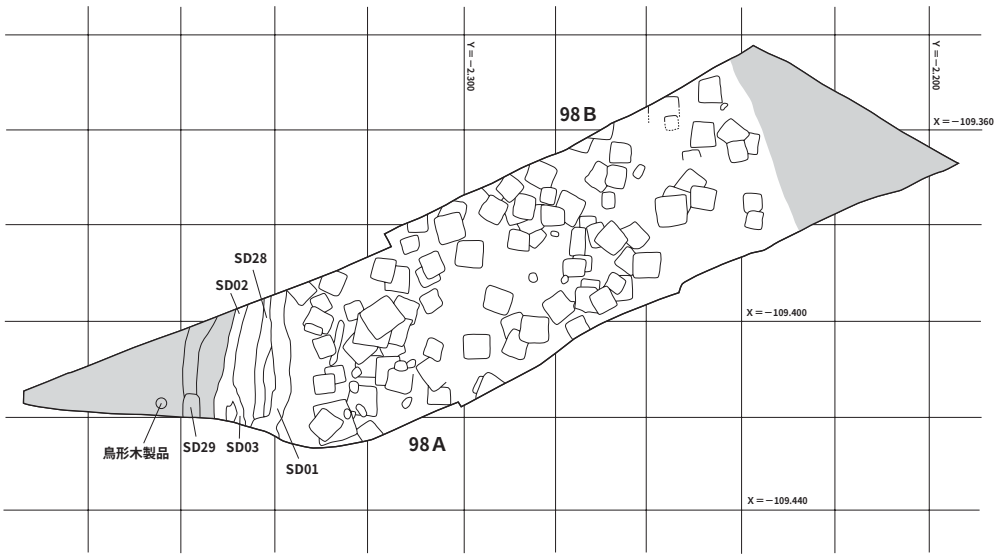


図３　本川遺跡遺構配置図　（1：1,600）

3．水入遺跡古墳時代の概要

水入遺跡は、豊田市渡刈町下糟目・大屋敷にある、矢作川西岸の低位段丘上に展開する旧石器から江戸時代まで続く複合遺跡である。そのうち、古墳時代に属する遺構は、遺跡中央の谷地形より南側を中心に展開しており、木製品が出土した遺構は矢作川に面する高さ約2.5mの崖とそれに平行に掘削された全長約230m、幅５m、深さ４mの大溝である。これら崖と大溝に挟まれた約10,000㎡の空間では、当該期の竪穴住居は一辺７mの大型のものを中心に数棟あるのみで、あとは掘立柱建物がいくつか想定される程度である。したがって本川遺跡のような集落景観とは大きく異なる。また、崖や大溝への土師器の大量廃棄や祭祀関連遺物から、祭祀的性格の強い特殊な場であったと考えられる。ただ、木製品に限ると、祭祀具と特定できるものよりもはるかに多くの農工具類が出土していることも特筆される。

矢作川に面する崖では、尾張地方の編年で松河戸Ⅱ式併行の高杯・小型丸底壺を中心とした土師器が大量に廃棄され、そのなかには手捏ね土器が含まれている。木製品はこれらと同一層から出土しており、木製品の他に自然状態の樹木が多く出土している。それらは樹木の様々な部位であるが、一部のものには表面に焼け焦げ痕がみられる。一方木製品のほとんどには焦げが認められない。なお、出土地点は崖下の各所に散在し特にまとまりをみせることはない。

大溝においても崖同様、松河戸Ⅱ式併行段階の層位で自然状態の樹木と木製品が混合した状態で出土している。土師器以外には、剣形石製模造品・臼玉・管玉や、今回図示しえなかったが刀形木製品（全長55cm）が出土しており、祭祀後に大溝に投棄されたものと考えられる。

なお、小論では、平成11年度上半期までに出土した木製品について図を掲載する。その後出土したものについては極力本文中で触れるようにした。（永井）

4．出土木製品

（1）農具・工具類（図５）

１は伊勢湾型の曲柄平鍬。刃部下半を欠損し、残存長34.3cm、軸部長17.0cmで、刃部最大幅は7.5cm。軸部は上端付近の後面側（曲柄装着面の反対側）に一条深い溝を刻んでおり、筆者の分類（樋上2000）ではＤ類にあたる。刃部の平面形は軸部と刃部の境に明確な肩部をもたず、刃部幅がきわめて狭いⅢ類に属する。側面形は伊勢湾型曲柄鍬に特徴的な刃部後面側上半部からの削り込みが弱い。樹種はクヌギ節。本川遺跡ＳＤ01出土。

２は伊勢湾型の曲柄三又鍬。刃部下半と左側を欠損し、残存長27.2cm、軸部長は14.0cm、刃部幅は3.7cm。軸部形態は１と同じくＤ類。軸部後面側全体に縦方向の加工痕を明瞭にとどめる。軸部最下端には紐ズレ痕とみられる浅い溝状の痕跡を残す。刃部の平面形はやはり明確な肩部をもたない。側面形でも刃部後面側上半部からの削り込みは弱い。樹種はアカガシ亜属。本川遺跡ＳＤ29北半出土。

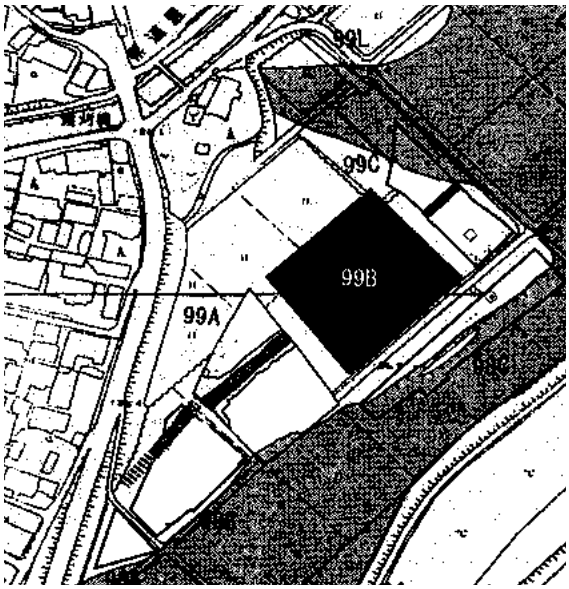


図４　水入遺跡南部の古墳時代主要遺構配置図
（1：4,000）※濃いトーンは崖下にあたる

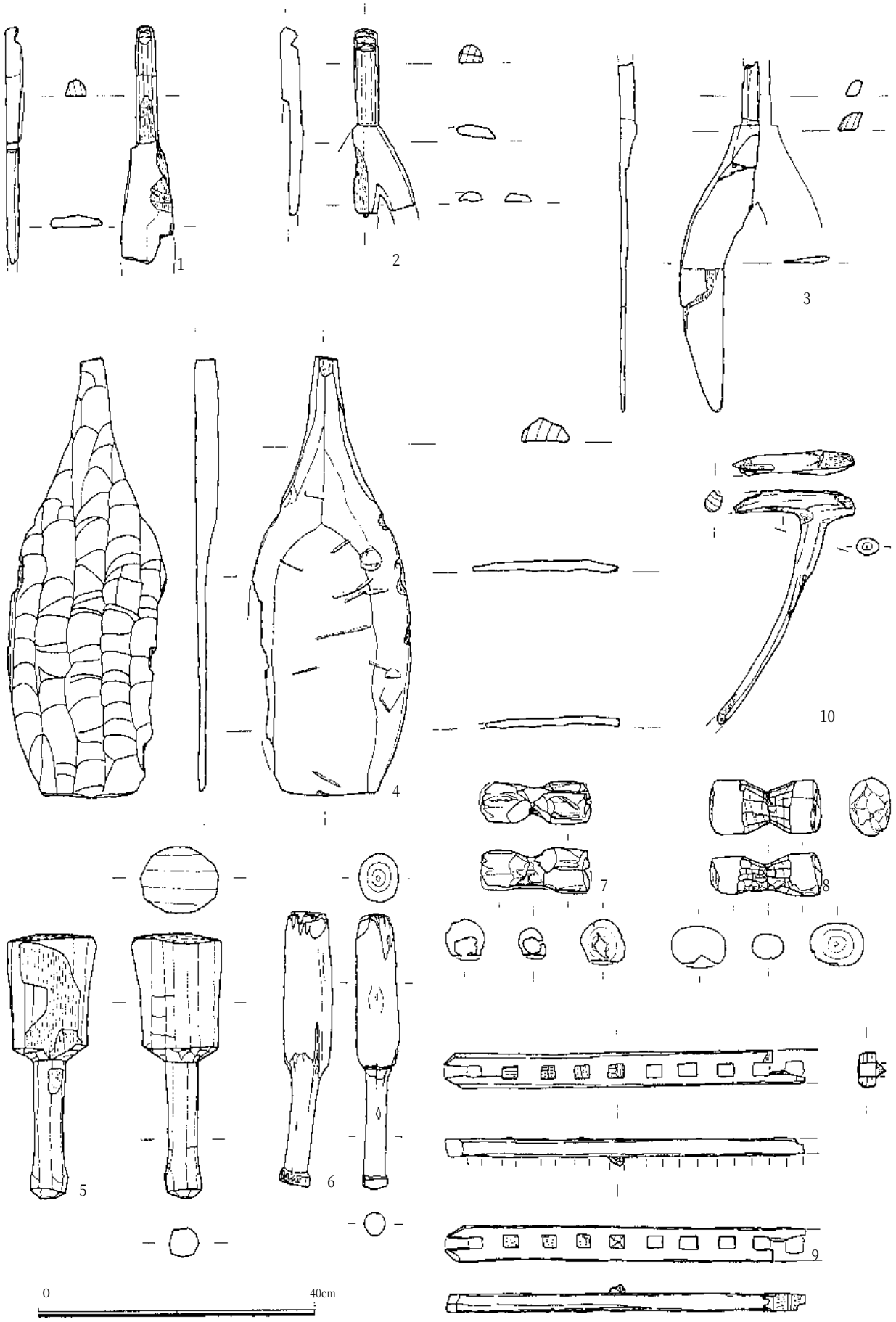


図５　農具・工具類　（1：8）

３は伊勢湾型の曲柄二又鍬。軸部上半と刃部の右側約半分を欠損する。残存長50.6cm、軸部残存長9.2cm、刃部長（又部から下）29.9cm、刃部最大幅6.4cm。刃部の平面形は肩部をもたず、最大幅がほぼ中央に位置するⅢ類。側面形では刃部後面側上半部からの削り込みが上記２点とは異なり、きわめてしっかりとおこなわれている。樹種はアカガシ亜属。水入遺跡崖下中層出土。

４は伊勢湾型曲柄鍬の未成品。全長64.25cmで、刃部の一部を欠損しており、最大幅は21.2cm。平面形は軸部から肩部にかけてゆるやかに広がり、刃部下端付近で若干すぼまる。前面側は軸部から刃部にかけて縦方向の鉄製工具による加工痕（手斧痕）がきわめて明瞭に残る。加工の手順は軸部側から刃部側へ、さらに右から左へ進行し、加工具の幅は4.2cm前後であることがわかる。側面形では刃部後面側上半部からの削り込みがしっかりとおこなわれている。その平面形からみて、二又鍬か三又鍬の未成品とおもわれる。樹種はアカガシ亜属。水入遺跡大溝出土。

５・６はヨコヅチ。５は全長38.5cm、敲打部長18.7cm、敲打部径13.0cmで、渡辺誠氏の分類によるＡタイプ（ワラ打ち等用）にあたる（渡辺1985）。敲打部・柄部ともに加工痕を明瞭にとどめている。水入遺跡大溝出土。６は全長40.0cm、敲打部長22.6cm、敲打部径7.0cmで、渡辺分類のＢタイプ（豆打ち等用）である。樹種はヒノキ。水入遺跡崖下最上層からの出土で、時期は８世紀頃と推定される。

７・８は木製錘（ツチノコ）。７は残存長16.0cm、最大径6.3cm。水入遺跡崖下出土。８は全長16.3cm、最大径7.7cm。水入遺跡大溝下層出土。両者とも中央部がくびれるタイプで、渡辺誠氏の分類ではＩＹｆ型第３群にあたり、ムシロ編み等用と推定される（渡辺1983）。いずれも樹種はクリ。

９は鉄斧の柄。残存長33.8cm、台部残存長17.2cm、台部最大幅3.5cmで、台部と柄部の先端はいずれも欠損している。台部の形態からみて袋状鉄斧（縦斧）の柄と考えられる。樹種はヒノキ。本川遺跡ＳＤ01下層出土。

10は枠型田下駄（大足）の縦枠材（上原1993）。残存長52.0cm、高さ5.2cm、厚さ2.6cmで、10個所ある横桟挿入孔のうち、４個所に横桟の一部が残る。水入遺跡大溝出土。（樋上・木川）

（２）容器・雑具類（図６）

本川遺跡では食器数点・机天板が出土し、水入遺跡では崖下から盤・箱の一部が出土した。

11・12は本川遺跡ＳＤ02下層出土で、11は、復元口径24.8cm、高さ3.2cmの皿。12は、復元口径26.0cm、高さ1.8cmの皿。ともに樹種はヒノキ。いずれも刳物か挽物から判別しづらい。なお、ＳＤ02は廻間Ｉ式併行である。

13・14は盤で、13は水入遺跡崖下出土で、推定長43.0cm、幅24.0cm、高さ4.8cmである。底面は平滑であるが、内面は凹凸が激しい。樹種はヒノキ。14は本川遺跡ＳＤ01出土。高さ3.8cmで、全体的に非常に平滑な状態を保っている。樹種はヒノキ。

15は水入遺跡崖下出土の箱の一部である。樹種はヒノキ。箱部材は大溝でも出土している。

16は本川遺跡ＳＤ01出土の組み合わせ式の机の天板である。表面には刃物でつけられたような線状のキズがある。樹種はヒノキ。

（３）建築部材・用途不明品（図７）

本川遺跡では、焼失した竪穴住居が確認され、そこから部材が出土しているが、今回は図示していない。水入遺跡では崖下と大溝から高床建物に関わる建築部材が出土している。なお、矢板状に加工された土木に関わる木製品もここに含めた。

17・19は水入遺跡大溝出土である。17はほぼ完形の板材で、長さ140cm、幅14cm、厚さ４cm。両端部を中心に削り痕を残す。両端が摩耗し丸みがある以外、良好な状態である。中央より少しずれた個所の長方形の穿孔はホゾ穴か。樹種は針葉樹。19は17より若干薄い板材で、一端が摩耗し丸みがある。矢板とみられる24にも同様の圧痕があり、19も矢板に使用されたのかもしれない。

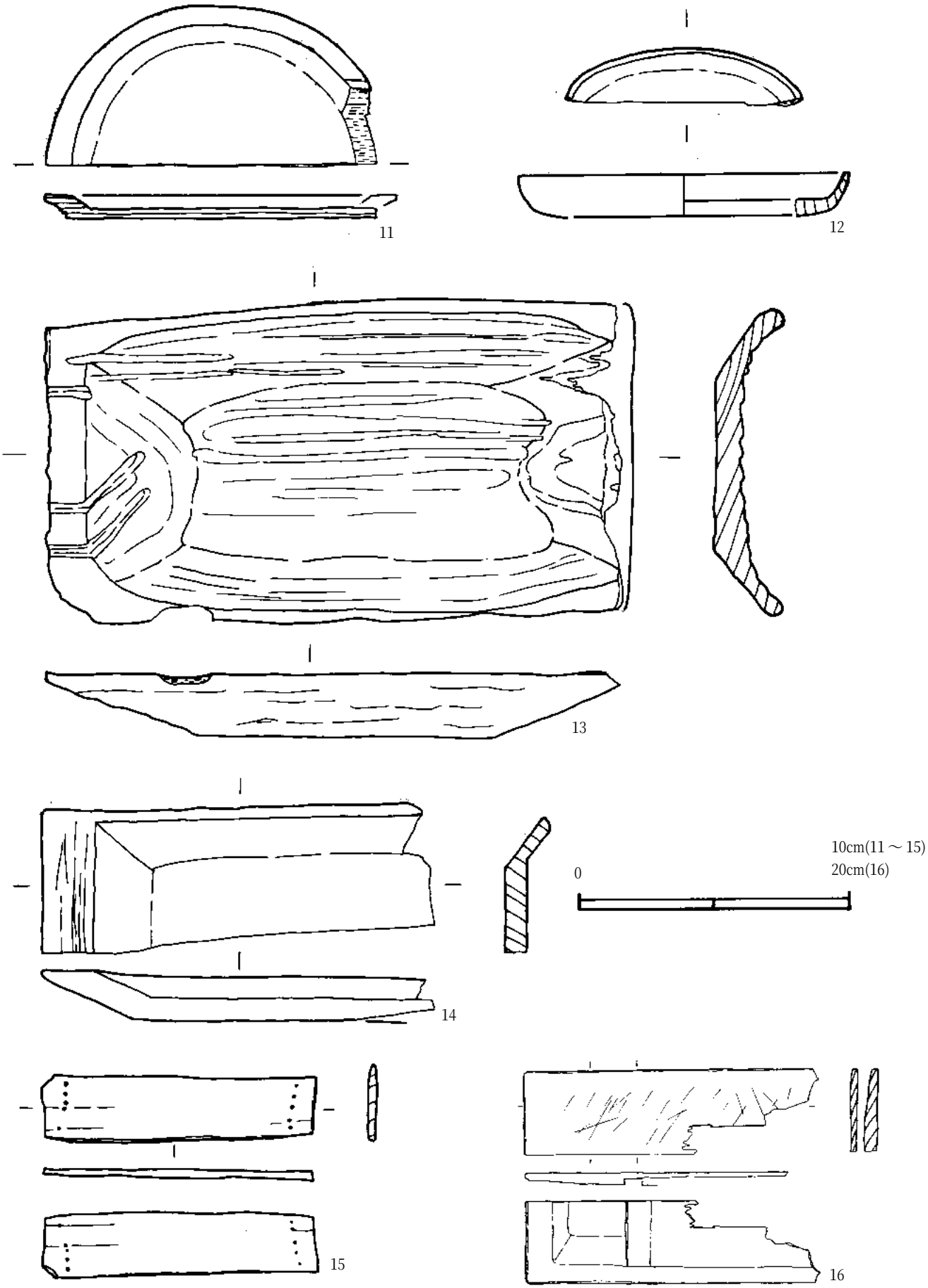


図６　食器・容器（1：4）雑具（1：8）

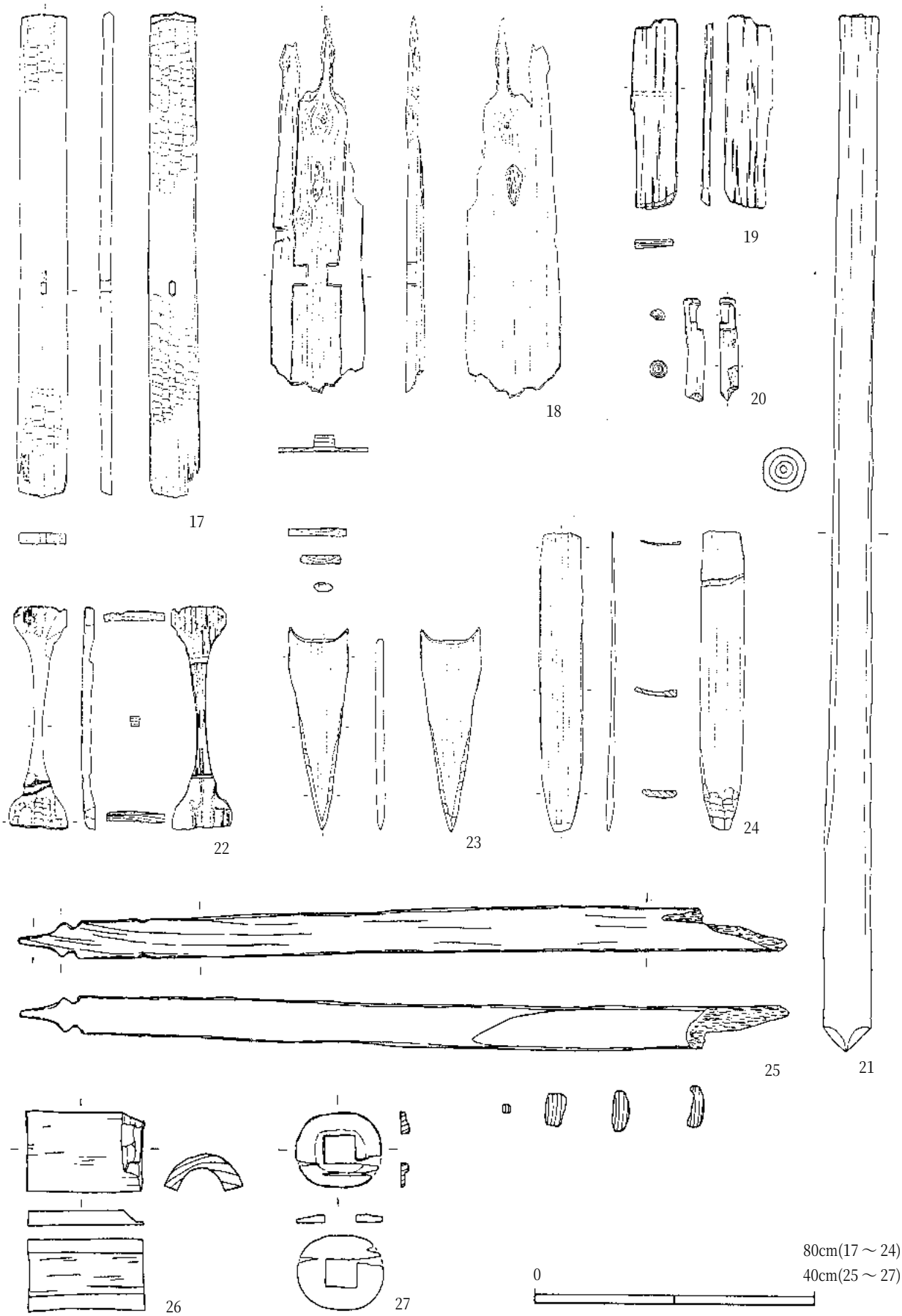


図７　建築部材（1：8）・用途不明品（1：16）

18・21・22は崖下出土で、それぞれ離れた地点である。18は一木から片面を凸状に削りだし、一部細く削りだされた個所がある。「屋根型木製品」と称される戸口関連の部材（松岡1999）に似ているようであるが、ここでは保留しておきたい。樹種はクリ。21は全長290cm、直径10～15cmの円柱である。一端がくさび形に加工され、もう一端は継手のための直径４cmの円形のホゾ穴があり、そこに別材のホゾが刺さった状態である。樹種はマキ。22は扉板の把手部分と推定される。バチ形に開いた部分で扉本体とつながっていたようであるが、剥離してしまったらしい。細い把手部分の中央は使用により凹み、把手部分と剥離面の境に幅約２cmの窪みがあり摩耗している。ここを閂が通ったのであろうか。扉把手の類例からするとかなり繊細な造りである。樹種はヒノキ。

20は本川遺跡ＳＤ02下層出土の部材の組み手部分である。材の直径は５cm。同じ個所に方向を違えて２つの組み手加工がなされるが、前後関係は不明である。樹種はモミ。

23・24は水入遺跡崖下出土である。矢板と推定している。特に23は何らかの板材からの転用の可能性が考えられる。水入遺跡ではこういった矢板の他に杭が崖面や大溝壁面に刺さった状態で10点近く出土しており、崩落防止にしがらみを要所に設けていたようである。樹種はいずれもヒノキ。

用途不明品（25～27）は一見して用途の判別がつかないものである。

25は水入遺跡大溝の出土で、17・19の付近である。全長110cm以上あり、卒塔婆が肉厚になったような印象である。樹種はカヤである。仮に装飾的な形状の部分を上にすると、下方に向かってより扁平になっていく傾向がある。実用的な道具とは考えにくく、祭祀具あるいは建築の装飾の可能性を考えたい。26は本川遺跡出土の丸瓦のような形状をした木製品である。破断面はなく完形品である。一端を斜めに粗く削った痕跡があるが、この目的も含めて用途は不明である。樹種はカヤ。27は水入遺跡崖下出土の円盤状木製品である。形状は鼠返しであるが、建築に使われるそれに比べてはるかに小さい。何らかの部材としか言いようがない。樹種はヒノキ。

前述のように、水入遺跡の大溝からは高床建物に関わる建築部材が数点あるが、延長約10ｍの範囲内で出土している。図示したもの以外に板材が２点、一木造りの梯子が１点出土しており、柱部材は全くみられない。したがって具体的な建物上屋構造を復元するには絶対数が少ない。ところでこの出土地点の約５ｍ東側の段丘上で、同時期とみられる掘立柱建物（５間×３間総柱）が確認されており、建物解体後すぐ近くの溝に廃棄ないしは水漬け保存したならば、この建物に使用されたものと推定できよう。一方、崖下出土の部材は出土位置が散在しているものの、高床建物の存在を示す重要な資料であることに変わりがない。（永井）

５．まとめにかえて

最後にまとめにかえて、本川・水入両遺跡から出土した木製品のうち、特に農耕具類（曲柄鍬）について、その編年的な位置づけをおこなっておきたい（図８）。

筆者（樋上）はこれまで、濃尾平野を起源とし、古墳時代前期から中期にかけて東日本の各地域に広く分布する東海系曲柄鍬について、いくつかの論考を発表してきた。最近では東海系曲柄鍬のうち、伊勢中部から西遠江までの伊勢湾周辺地域に分布する一群を「伊勢湾型曲柄鍬」とし、形態的特徴と変遷についてまとめた（樋上2000）。その伊勢湾型曲柄鍬の特徴をかいつまんで述べると、以下の４点に集約できる。

１．器種は平鍬・二又鍬・三又鍬がある。
２．膝柄との緊縛用に、軸部後面側の上端付近に深い溝を一条刻む。
３．刃部後面側を上半部から下半部にかけて強く削り込む。
４．軸部・刃部ともに前面側はきわめて平坦に仕上げる。

伊勢湾型曲柄鍬の出現時期はほぼ廻間Ⅰ式期

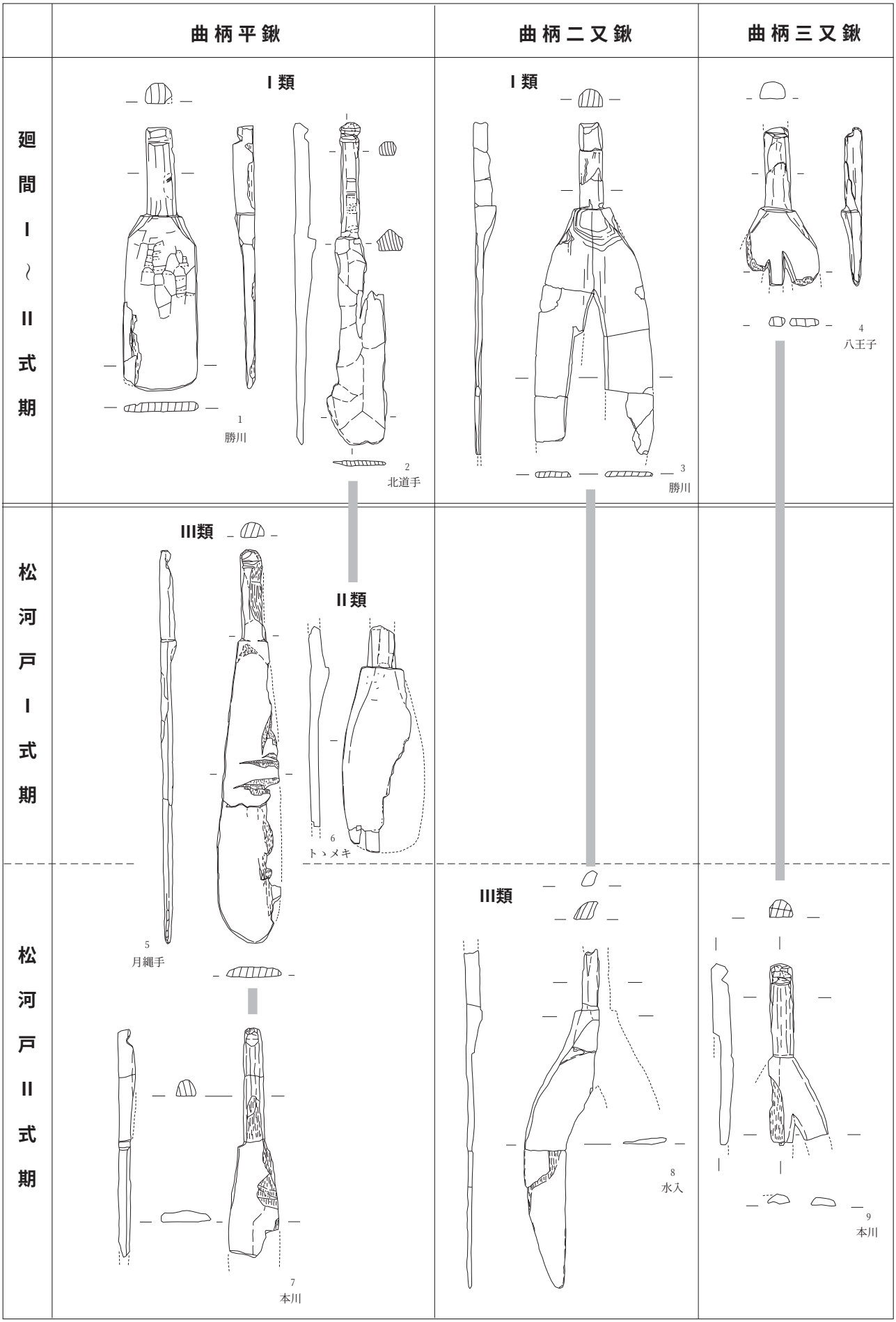


図８　濃尾平野における伊勢湾型曲鍬編年試案（1：8）

初頭頃である。終末時期についてはこれまで、５世紀後半頃（宇田式前期）にはU字形の鉄製刃先を装着するナスビ形曲柄平鍬が出現するため、それ以前であろうとしかいえなかったが、小論で紹介した本川・水入両遺跡からの出土例によって５世紀中葉頃（松河戸Ⅱ式期）であることが判明した。そして、これらの資料を組み込むことによって、濃尾平野および西三河地域での曲柄鍬をⅠ～Ⅲ類に分けて、刃部の平面形態の変化から、以下のような変遷を述べることができるようになった。

Ⅰ類（廻間Ⅰ～Ⅱ式期）：平鍬・二又鍬・三又鍬ともに刃部上端にはしっかりと斜めに削り込んだ肩部をもつ。平鍬は上半部から下端までほぼ一定の刃部幅である。二又鍬も刃部幅は上半部から下半部までほぼ一定で、刃部の平面形は長楕円形となる。三又鍬は完形品がなく、不明。

Ⅱ類（廻間Ⅱ式～松河戸Ⅰ式期）：平鍬は肩部を省略し、刃部の平面形は下ぶくれとなる。二又鍬・三又鍬ともに濃尾平野ではまだ類例がないが、静岡県東部以東に分布する東海系曲柄二又鍬Ⅱ類は平鍬同様、肩部がなくなり、下ぶくれで刃部下端付近に最大幅がくるようになる。

Ⅲ類（松河戸Ⅰ～Ⅱ式期）：平鍬はⅡ類に較べて刃部幅が極端に狭くなり、刃部長は著しく長くなる。二又鍬は刃部中央付近に最大幅がきて、平面形は菱形に近くなる。三又鍬はⅠ類と比較して、なで肩になるが、全形は不明。

以上、本川・水入両遺跡から出土した農耕具（曲柄鍬）の編年的な位置づけについて述べてきた。これからそれぞれの報告書作成にむけて、その他の木製品についても研究を進めていきたいと考えている。（樋上）

小論を作成するにあたり、次の方々にお世話になりました。記して感謝いたします。
佐藤公保・平野昌子・元興寺文化財研究所
（敬称略）

参考文献

浅野　清　　1969　『奈良時代建築の研究』中央公論美術出版
上原真人　　1993.3『木器集成図録　近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所
樋上　昇　　2000.1「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12 考古学フォーラム
松岡良憲　　1999.5「和歌山県鳴神遺跡出土の『屋根型木製品』について」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
渡辺　誠　　1983.3「御山千軒遺跡出土木製品の民具学的研究」
『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI』福島県教育委員会・日本国有鉄道
渡辺　誠　　1985.3「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』70-3　日本考古学会

愛知県における鉄器生産を考える（４）

―朝日西遺跡を中心に―

鈴木正貴・蔭山誠一

朝日西遺跡から出土した金属関連資料の分析を通じて、中世から近世までの鉄器生産の様相を考察した。この結果、鉄資料組成は８類に分類することができ、生産工程または時期的な差異が表れていることを想定した。また、椀型滓と流動滓の分類において、密度あるいは比重のデータが有効であるという可能性が高くなった。

１．はじめに

愛知県における鉄器生産に関する研究は、資料の限界からあまり進んでいないのが現状であった。しかし、豊田市南山畑遺跡での弥生時代後期末の鍛冶工房跡の調査や武豊町ウスガイト遺跡の成果など資料は増加しつつあり、鉄器生産に関して注目されるようになってきた。こうした中、筆者らはこれまでに「愛知県における古代・中世の鉄器生産」というテーマを設定して遺跡出土の鉄資料について整理・分析を行ってきた。これは、鉄器生産遺構が確認されていなかった集落遺跡の中でも鉄器生産を行っていた可能性があると推定し、出土遺物から鉄器生産の様相を考察する試みである。以下に、これまでの検討結果を振り返って、その問題点を整理してみる。

（１）稲沢市堀之内花ノ木遺跡、大縄遺跡、儀長正楽寺遺跡の検討

まず、「愛知県における古代・中世の鉄器生産その１」（鈴木・蔭山1997※1）では、堀之内花ノ木遺跡、大縄遺跡、儀長正楽寺遺跡の鉄資料出土状況から分布のまとまり「群」を見い出し、群の鉄資料組成から鉄器生産工程の想定を試みた。具体的には、椀型鉄滓と含鉄遺物の比率および流動滓Ｂの存在から、精錬鍛冶工程主体の操業が考えられる遺跡と鍛錬鍛冶工程主体の操業が考えられる遺跡に区分できる可能性を考えた。

（２）一宮市清郷遺跡、江森遺跡の検討

次に、「愛知県における古代・中世の鉄器生産その２」（鈴木・蔭山・天野1998※2）では、清郷遺跡、江森遺跡という一括性の高い資料群を検討することによって、鉄器生産工程の特定化を試みた。鍛冶遺構が検出された清郷遺跡では、鉄資料組成が稲沢市内３遺跡の各群の組成の中間的な組成となり、鍛冶工程の限定にまでは至らなかった。江森遺跡では破割りされた多量の椀型鉄滓が出土しており、精錬鍛冶を主体とする工程が繰り返し操業されたものと推定した。

（３）一宮市門間沼・北道手・田所・大毛沖・大毛池田遺跡の検討

そして、「門間沼遺跡における古代・中世の鉄器生産を考える」（蔭山・鈴木1999※3）では、新たに椀型鉄滓の分類を試み、椀型鉄滓各類と流動滓Ａ・Ｂと含鉄遺物などの組成に注目した。様々な問題を孕みつつも、含鉄遺物・鉄片・鉄製品・鉄塊系遺物と流動滓Ａと質感の重い椀型鉄滓Ｂ・Ｃの組み合わせと、流動滓Ｂと質感の軽い椀型鉄滓Ａ・Ｄ～Ｉの組み合わせに分けることができ、前者は鍛錬鍛冶を主体とする操業、後者は精錬鍛冶を主体とする操業が行われていたこ

※１　『年報平成８年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
※２　『考古学フォーラム９』考古学フォーラム
※３　石黒立人編『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

とを想定した。

今回は、第４回目の考察として、名古屋環状２号線建設に伴って発掘調査された朝日西遺跡出土資料を分析の対象とした。この資料は、古代や中世ばかりではなく戦国時代と江戸時代の資料をも含んでおり、鉄器生産工程の変遷について大きな流れを把握し得る資料となるはずである。また、これまでの検討では質感を感覚的に判定していたが、今回は密度や比重を測定して鉄滓の分類の精緻化を試みた。

２．朝日西遺跡の概要

朝日西遺跡は西春日井郡清洲町大字朝日に所在する沖積地遺跡で、現在は清洲城下町遺跡の朝日西地区に該当する。五条川東岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地しており、古代末から近世まで継続する集落遺跡である。遺跡は大きく３期に分けることができる。

中世―11世紀中葉～15世紀前半までの中世集落の段階。

城下町期―16世紀後半～17世紀初頭までの清須城下町に属する段階。

朝日村期―17 世紀後半以降の朝日村の集落の段階。

このうち、中世の段階は報告書（小澤編1992）によれば、古瀬戸製品を含むか否かで大きく中世Ⅰ期（11 世紀中葉～ 13 世紀）と中世Ⅱ期（14 世紀～ 15 世紀前半）の２期に分けられ、中世Ⅰ期前半には区画溝を持たないが、中世Ⅰ期後半（12世紀後葉以降）には区画溝で囲まれた屋敷地が現れるという。また、佐藤公保によれば、遺跡の画期は村落出現確立期（12 世紀後半～）と展開期（13 世紀後半～ 14 世紀前半）と村落再編成期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）の３期に分けられるという（佐藤1989）。中世集落としての朝日西遺跡の評価は未だ定説をみていないのが現状であるといえるが、ここでは取りあえず報告書に依拠して分析を進めることとする。

一方、城下町期の朝日西遺跡では、清須城下町に属する遺構群が確認され、西側から武家屋敷地、町屋、寺社地が展開していた。時期は 16 世紀後葉から17世紀初頭に位置付けられる。また、朝日村期では現在の集落に繋がる集落跡が確認され、17 世紀以降連綿と継続していたようである。

３．金属関連資料の観察

遺跡から出土する金属関連資料には、金属の原材料、加工に伴って生成される滓、炉材や鞴の羽口などの遺構の一部、加工に必要な溶媒材や燃料、道具類および製品や未製品がある。

ここでは朝日西遺跡の金属関連資料の肉眼的な観察と簡易な検査を行い、その組成をもとに分析を加えた。これまでに実施した方法を基本的に踏襲しつつも、一部変更と追加をしたので、以下にその方法を略述するが、前稿（鈴木・蔭山1997、鈴木・蔭山・天野1998、蔭山・鈴木1999）も参照されたい。

（１）金属関連資料の分析の方法

金属関連資料について以下の17項目の調査を実施し、一覧表※1を作成した。

ａ種別……形状を基本に着磁度と金属反応を参考にして、椀型滓、流動滓、再結合滓、含鉄遺物、鉄塊系遺物、鉄製品などに分類した。分類の内容については次項に示した。

ｂ形状……資料の形状を礫状、偏平、凹凸などに区分した。椀型滓については上面の凹凸の状態を記述した。

ｃ完欠……資料の遺存状況を示した。

ｄ重量……全重量を、軽量のものは0.1g 単位で、重量のものは１g単位で測定した。

ｅ法量……資料の長径、短径、厚さを0.1cm単位で測定した。

ｆ容積……資料の容積を適宜 200ml、500ml、2000ml のメスシリンダーを用いて適量のエタノールに完全に浸し、増加した分の容積を計測した。

ｇ密度……重量を容積で割った数値（単位はg/cc）を示した。

ｈ比重……比重 2.498 ～ 2.510 のクレリチ重液

※１結果は一部データを省略した形で表１・２・６～ 10 に掲載。

の中に資料を入れて、その浮沈を表示した。浮く資料は比重が約2.5より小さいもの、沈む資料は比重が約2.5より大きいもの、液中に漂う資料は比重が約2.5となる。

ｉ着磁度……直径30mm・1300ガウス（0.13テスラ）のリング状フェライト磁石を用いて、着磁反応を示す距離を測定し、０～５までの６段階に着磁度を区分して表示した。

ｊ金属反応……簡易な金属反応器（松下電工壁うらセンサープロ用ＥＺ380Ｂ、および京都度器株式会社ＫＤＳメタルチェッカーＭＲ―50）２体を用いて金属分の残存状況を測定した。反応の強弱を前者は２段階、後者は３段階に分けて表記した。なお、これらの測定に際しては明瞭な科学的な基準はないものである。

ｋ発泡……内部にあるガス分が抜け出た気泡の痕跡が存在するものに○を付した。

ｌ小石粒……炉材とは異なる小石粒を包含するものに○を付した。

ｍ植物質痕……植物繊維状の圧痕などが残存するものに○を付した。椀型滓上面などに付着するケースがある。

ｎ木炭……炭粒を包含するものに○を付した。

ｏ炉材……表面に炉材の一部と思われる粘土や石材が付着するものに○を付した。椀型滓下面や流動滓の一部に付着するものがあった。

ｐガラス質……資料中にスラグ状の部分を包含するものをその重みと表面観察から３段階に分けて表記した。

０……ガラス質がないもの。不明瞭なもの。

１……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないもの。

２……軽く色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含し、比較的気泡が大きく多いもの。

ｑ備考……資料表面の付着物や固着の有無などの特記事項を記載した。

（２）鉄資料の分類

鉄資料に関して、形状から鉄滓を椀型滓、流動滓、再結合滓、鉄塊系遺物、含鉄遺物に分け、着磁反応や金属反応がある資料を含鉄鉄滓として区分した。以下詳細な分類を説明する。

鉄滓……製鉄や鍛冶の鉄加工の各段階で原料および半加工品、廃棄物を炉の中で溶融させた際に生じる非鉄成分が多い滓部分。

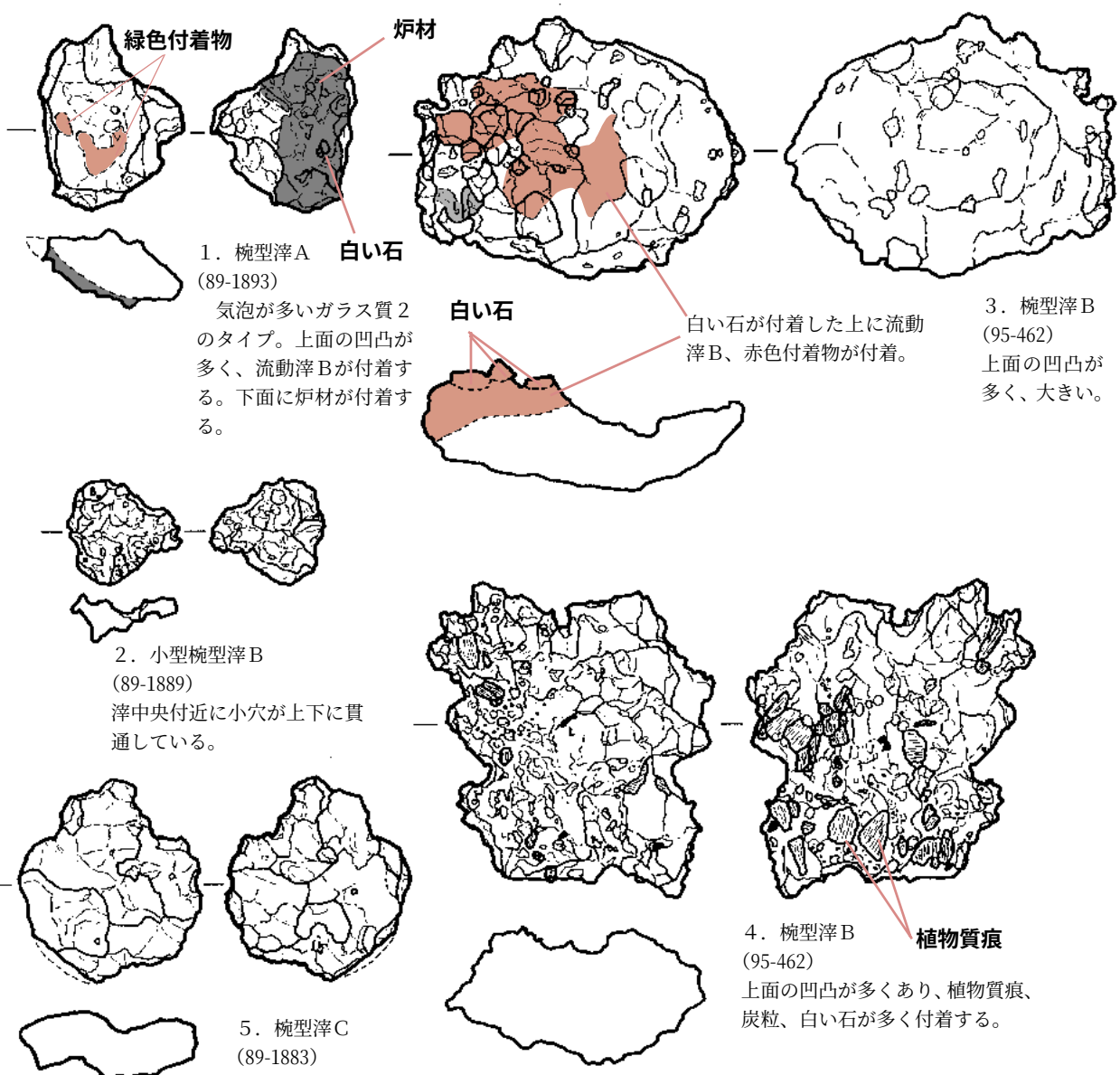
椀型滓……鍛冶の段階に炉の底の部分に生まれる鉄滓。炉の底の形を反映した平面が円形で断面が椀型の形状となる。椀型滓は破割りされたものが多く、これらは残存する部分の割合から２分の１分割椀型滓、４分の１分割椀型滓、８分の１分割椀型滓などと区分した。また、今回は表面の形状や大きさから以下のように分類した。なお、この分類は門間沼遺跡の分類には全く対応しない点をあらかじめ断っておく。

椀型滓Ａ……軽く色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含し、比較的気泡が大きく多いもの（図１－１）。

椀型滓Ｂ……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないものの中で上表面の形状が非常に凹凸したもの（図１－２～４）。小形のものと大形のものがある。

椀型滓Ｃ……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないものの中で、上表面の形状がやや凹凸したもの（図１－５）。

椀型滓Ｄ……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないものの中で、上表面の形状が比較的平坦なもの（図１－６）。



1．椀型滓A
(89-1893)
気泡が多いガラス質２のタイプ。上面の凹凸が多く、流動滓Bが付着する。下面に炉材が付着する。

3．椀型滓B
(95-462)
上面の凹凸が多く、大きい。

2．小型椀型滓B
(89-1889)
滓中央付近に小穴が上下に貫通している。

4．椀型滓B
(95-462)
上面の凹凸が多くあり、植物質痕、炭粒、白い石が多く付着する。

5．椀型滓C
(89-1883)
上面の凹凸がややある。

6．椀型滓D
(89-1874)
上面の凹凸が少ない。

7．鞴の羽口
(95-462)
羽口を支える鞴座がある。
３、４と同じ出土地点。
羽口口径 1.8 ㎝。

図１　鉄資料実測図（１：２）

流動滓……一般には流動状の鉄滓で、製鉄炉や鍛冶炉の内外で生成された鉄滓をいうが、今回も椀型滓と再結合滓以外の鉄滓を全て含んだものを指しており、椀型滓よりも小型のものが多い。ガラス質の状態から流動滓はＡとＢに区分できる。

流動滓Ａ……重く色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し、比較的気泡が小さく少ないもの。ガラス質の項目で０または１としたものがこれに該当する。

流動滓Ｂ……軽く色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含し、比較的気泡が大きく多いもの。ガラス質の項目で２としたものがこれに該当する。

再結合滓……鉄滓や鉄製品、半製品、小石粒などが熱の他に水分や土圧などで再び付着した鉄滓状のもので、椀型滓や流動滓のように構造的形態をしていない。

鉄塊系遺物……いわゆる鉄塊で、表面観察では鉄分の錆膨れによる表面のひび割れが生じているのが特徴である。着磁度の高いものが多く、金属反応が認められるものもある。

含鉄遺物……鉄製品や半製品の錆膨れした鉄滓状のもので、そのほとんどが刀子や釘、鉄片などが錆膨れしたものと思われる。形状から偏平、棒状、礫状に区分される。着磁度は比較的弱く、金属反応は認められないものが多い。

４．朝日西遺跡の鉄資料の組成

朝日西遺跡では800点以上の金属関連資料が出土しており、これらの出土分布状況を検討すると14ケ所の分布のまとまりを見い出すことができる（図２・３）。これらを資料群として紹介する（表３・図４）。

（１）58区西群

調査区の最西端南半部に広がる分布域で、中世前半の小規模な溝などが展開している。遺構に伴う鉄資料がないために時期を特定できないが、遺構の状況から中世Ⅰ期に属すると推定される。内訳は椀型滓が約31%、流動滓が約13%、含鉄遺物が約44%、鉄製品が約13%を占める。流動滓Ａと流動滓Ｂはほぼ同数存在し、椀型滓は椀型滓Ｂ～Ｄがあり、椀型滓Ｄが多い。

（２）58区中央群

遺跡西部の58区中央部に展開する一群で、区画溝SD09の屈曲部に比較的鉄資料が集中している。しかし、中世と城下町期と朝日村期の各時期の遺構から鉄資料が出土しているため、群の時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が約33%、流動滓が約10%、含鉄遺物が約29%を占め、他に羽口、炉壁などがある。流動滓は流動滓Ａのみが存在するが、椀型滓は椀型滓Ａ～Ｄが全て存在する。

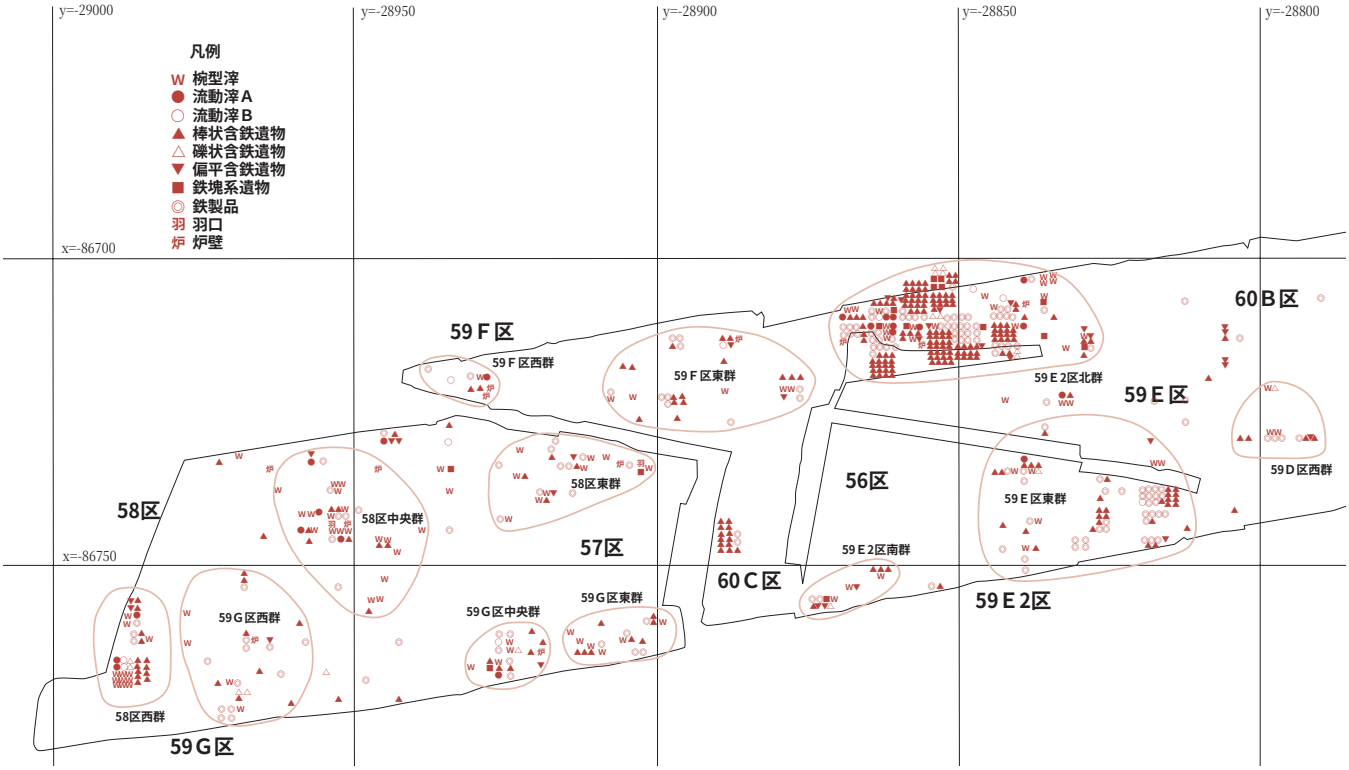
（３）58区東群

58区東部に分布する一群で、区画溝SD24の周囲に集中する傾向がある。鉄資料は、一部の例外を除き、大半は城下町期の遺構から出土していることから、城下町期の一群と位置付けてよいだろう。内訳は椀型滓が約23%、含鉄遺物が約23%、鉄製品が約32%を占め、他に羽口、炉壁などがある。椀型滓は椀型滓ＡとＣとＤが存在する。

（４）59Ｆ区西群

調査区北西部の59Ｆ区西部に広がる一群で、中世Ⅱ期に属する遺構から鉄資料が出土しているため、この時期に位置付けられよう。内訳は椀型滓が10%、流動滓が20%、含鉄遺物が20%、

図２　朝日西遺跡における鉄資料の分布（１）



番号	群	種別	密度	重量	長径	短径	厚さ	着磁	メタル1	メタル2	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
89-1890	58区西群	1/2椀型滓B	3.222	14.5	4.1	2.2	1.3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1929	58区西群	1/4椀型滓C	3.263	62	5.1	4.6	1.8	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1960	58区西群	1/4椀型滓C	2.974	113	5.7	5.5	2.7	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1891	58区西群	1/2椀型滓D	3.545	39	5	3.3	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1940	58区西群	1/2椀型滓D	3.375	135	8.5	4.7	3.1	1	0	0	欠	○	×	○	×	×	1	
89-1917	58区西群	1/2椀型滓D	3.7	51.8	4.2	3.8	2.2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1941	58区西群	椀型滓D	3.565	82	5.6	4.4	2.2	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1944	58区西群	椀型滓D	3.033	18.2	4.1	3.3	1.6	2	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1936	58区西群	椀型滓D	1.965	39.3	4.8	3.9	1.9	3	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1910	58区西群	1/8椀型滓D	2.875	11.5	3	1.9	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1965	58区西群	1/8椀型滓D	4.4	4.4	2.2	1.5	1.4	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1955	58区西群	1/8椀型滓D	2.92	14.6	2.9	2.1	1.4	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1893	58区中央群	1/2椀型滓A	1.529	26	5.4	4	2.1	0	0	0	欠	○	×	×	×	○	2	
89-1867	58区中央群	1/4椀型滓A	2.767	8.3	3.8	2.3	1	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
89-1888	58区中央群	椀型滓B	4	12	3.1	3.4	1.1	4	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1884	58区中央群	1/2椀型滓B	2.5	65	5.7	4	2.8	2	1	1	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1747	58区中央群	1/4椀型滓B	2.865	48.7	5.1	2.9	2.6	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1869	58区中央群	1/4椀型滓B	2.065	35.1	5.2	3.2	2.9	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1883	58区中央群	椀型滓C	3.55	71	5.5	5.3	1.9	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1950	58区中央群	椀型滓D	3.53	35.3	4.4	2.8	2.2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1887	58区中央群	1/2重複椀型滓D	3.6	21.6	4	2.4	2	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1753	58区中央群	1/2椀型滓D	2.473	27.2	4.4	2.5	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1924	58区中央群	1/2椀型滓D	2.35	9.4	2.8	2.3	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1757	58区中央群	1/2椀型滓D	4.5	13.5	3.7	1.9	1.5	1	0	0	欠	×	×	○	×	×	1	
89-1725	58区中央群	1/2椀型滓D	4.76	23.8	4.8	3.5	0.9	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1874	58区中央群	1/2椀型滓D	3.48	87	6.5	4.3	2.2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1896	58区中央群	1/2椀型滓D	2.769	108	8.7	4.3	3.7	2	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	土付着
89-1745	58区中央群	1/4椀型滓D	4.9	98	4.8	4.3	2.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1892	58区中央群	1/8椀型滓D	3.35	26.8	4.3	2.8	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1872	58区中央群	1/8椀型滓D	3.863	30.9	3.4	2.5	1.5	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1727	58区東群	1/4椀型滓A	2.49	24.9	3.7	3.2	2	3	0	0	欠	○	×	×	×	○	2	
89-1750	58区東群	1/4椀型滓A	2.364	33.1	5.5	3.5	1.9	1	0	0	欠	○	○	×	×	○	2	流動滓付着
89-1752	58区東群	1/4椀型滓C	3.6	72	4.8	4.5	2.6	2	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
89-1740	58区東群	1/2椀型滓D	2.59	202	7.9	5.7	3.7	1	0	0	欠	○	○	×	○	×	1	
89-1913	58区東群	1/2椀型滓D	4.591	101	6.9	4.6	2.7	4	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	赤色付着物
89-1911	58区東群	1/2重複椀型滓		48.2	6.1	4.4	2	1	0	0	欠	○	×	×	×	○	1	
89-1748	58区東群	1/8椀型滓D	3.1	62	4.4	3.9	2.7	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1912	58区東群	1/8椀型滓D	5.4	16.2	2.9	1.9	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1551	59Ｆ区西群	1/8椀型滓A	2.433	14.6	2.8	2.5	1.9	1	0	0	欠	○	○	×	×	○	2	
63-312	59Ｆ区東群	1/4椀型滓B	2.858	34.3	5.8	3.6	1.7	4	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
77-1	59Ｆ区東群	1/4椀型滓C	3.25	65	5.3	3.4	2.3	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1554	59Ｆ区東群	7 椀型滓D		2.4	1.3	1.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	①分析済
89-1992	59Ｆ区東群	1/4椀型滓D	5.133	15.4	2.4	2	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1553	59Ｆ区東群	1/8椀型滓D	2.985	38.8	4.2	3.4	2.2	2	0	1	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1552	59Ｆ区東群	重複椀型滓D	2.444	88	6.7	4.7	2.5	3	1	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1919	59Ｇ区西群	1/2椀型滓A	2.4	16.8	4.2	2.6	1.8	1	0	0	欠	○	×	×	×	○	2	
89-1557	59Ｇ区西群	1/8椀型滓A	5.875	23.5	3.1	2.8	1.8	1	0	0	欠	○	○	×	×	○	2	
89-1925	59Ｇ区西群	1/2椀型滓B	1.7	8.5	3.4	2.4	1.5	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1558	59Ｇ区西群	1/2椀型滓B	3.2	128	6.1	5.7	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
62	59Ｇ区中央群	1/2椀型滓B	2.789	25.1	3.9	3.7	2	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
65-1	59Ｇ区中央群	1/4椀型滓B	3.167	47.5	4.1	3.1	2	4	1	2	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1556	59Ｇ区中央群	1/4椀型滓D	2.658	31.9	4	3	2.4	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
20	59Ｇ区東群	1/2椀型滓A	3.467	10.4	3.5	1.9	1.1	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	?
89-1561	59Ｇ区東群	1/4椀型滓B	2.933	17.6	3.3	2.8	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
72-1	59Ｇ区東群	1/4椀型滓B	2.565	51.3	5.2	4.6	2.7	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
43	59Ｇ区東群	1/4椀型滓B	2.867	8.6	2.5	2.4	1.3	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1562	59Ｇ区東群	1/2椀型滓C	2.632	250	8.7	6.1	3.6	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
61	59Ｇ区東群	1/4椀型滓D	3.333	80	5.6	4.4	2.3	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1533	59Ｅ２区北群	椀型滓B	2.593	70	8.7	4.5	2.6	1	0	0	完	○	×	×	×	○	1	
119-2	59Ｅ２区北群	椀型滓C	3.05	61	5.3	4.5	1.5	3	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
117	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓C	2.371	40.3	4.5	3.6	2.1	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	長方形？
89-1537	59Ｅ２区北群	椀型滓D	2.923	114	6.4	5.4	3.4	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1539	59Ｅ２区北群	椀型滓D	3.15	63	5.9	4.7	1.7	2	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1543	59Ｅ２区北群	椀型滓D	3.273	72	5.7	4.6	2.7	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
63-262	59Ｅ２区北群	椀型滓D	3.3	16.5	3.6	2.4	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
168	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓D	3.5	24.5	3.8	3.4	1.1	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	流動滓B付着
156	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓D	2.63	26.3	4.4	2.9	2.3	3	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	

表１　朝日西遺跡出土椀型滓一覧表（１）

番号	群	種別	密度	重量	長径	短径	厚さ	着磁	メタル1	メタル2	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
89-1543	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓D	2.702	154	7.5	5.3	2.2	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1543	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓D	2.952	62	6.4	3.7	2	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	流動滓B付着
134	59Ｅ２区北群	1/2椀型滓D	3.2	9.6	3.5	1.8	0.9	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
105-3	59Ｅ２区北群	1/4含鉄椀型滓D	3.12	14.5	3	2.5	1.7	4	1	1	欠	○	×	×	×	×	1	
157	59Ｅ２区北群	1/4椀型滓D	3.438	27.5	3.6	2	2.4	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
63-215	59Ｅ２区北群	1/8以下椀型滓D	2.9	20.3	3.1	2.7	2.3	1	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
63-257	59Ｅ２区北群	1/8以下椀型滓D	2.325	9.3	2.7	2	1.6	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
139	59Ｅ２区北群	1/8椀型滓D		14.2	3.2	2.1	1.6	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	×	
153	59Ｅ２区北群	1/8椀型滓D	2.64	13.2	3.4	1.8	1.6	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1534	59Ｅ２区北群	1/8椀型滓D	3.2	28.8	2.9	2.7	2.6	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
63-230	59Ｅ２区南群	1/2椀型滓D	3.264	173	5.8	5.6	2.7	3	0	1	欠	○	○	×	×	×	1	赤色付着物
89-1535	59Ｅ２区南群	1/4椀型滓D	2.525	30.3	4.8	4.1	1.3	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
63-295	59Ｅ２区南群	1/4椀型滓D	3.18	31.8	3.9	3.9	2	4	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
89-1545	59Ｅ区東群	1/4椀型滓D	3.829	26.8	4.4	3	1.4	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1541	59Ｅ区東群	1/4椀型滓D	3.12	15.6	3.5	2.2	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1538	59Ｅ区東群	1/4椀型滓D	3.182	70	5.3	5	2.4	2	0	1	欠	○	×	×	×	○	1	
95-891	59Ｅ区東群	1/4椀型滓D	2.521	47.9	4.3	4	2.8	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-891	59Ｅ区東群	1/4椀型滓D	2.878	25.9	3.5	2.9	2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
138-1	59Ｅ区東群	1/8以下椀型滓D	3.033	9.1	3.2	1	1.4	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-421	59Ｄ区西群	1/2椀型滓D？	2.66	13.3	3.2	1.9	1.6	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-890	59Ｄ区西群	1/8椀型滓D	3.04	15.2	3.7	1.9	1.4	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-447	59Ｄ区西群	1/8椀型滓D	4.144	37.3	3.2	2.1	2.2	4	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1530	59Ｄ区東群	椀型滓A?		77.6	5.3	3.6	2.6	3	0	0	欠	○	○	×	○	×	2	分析3.4
95-475	59Ｄ区東群	椀型滓B	3.3	29.7	3.8	2.5	2.2	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	赤色付着物
95-470	59Ｄ区東群	椀型滓B	2.952	62	4.7	4.5	2.5	2	1	1	欠	○	○	×	×	○	1	赤色付着物
95-467	59Ｄ区東群	椀型滓B	2.475	29.7	6.1	3.8	1.9	3	1	1	欠	○	○	×	×	×	1	赤色付着物
95-467	59Ｄ区東群	椀型滓B	3.186	22.3	4.6	2.9	1.3	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
95-467	59Ｄ区東群	椀型滓B	2.833	17	4	2.6	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-462	59Ｄ区東群	椀型滓B	2.523	222	10	7.8	3.8	2	0	1	完	○	○	×	×	○	1	流動滓B付着、赤色付着物
89-1529	59Ｄ区東群	1/2含鉄椀型滓B	1.925	38.5	5.3	4.1	2.3	2	1	2	欠	○	○	×	×	○	1	
95-462	59Ｄ区東群	1/2椀型滓B	2.007	301	8.1	7.8	4	1	1	1	欠	○	○	◎	◎	×	1	
95-472	59Ｄ区東群	1/8以下椀型滓C	2.62	13.1	4	1.6	2.2	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
95-467	59Ｄ区東群	1/8椀型滓C	3.133	37.6	3.8	2.8	2.1	2	0	0	欠	○	○	×	○	×	1	灰色
95-471	59Ｄ区東群	1/2椀型滓D	3.246	42.2	4	2.8	1.8	1	0	0	欠	○	×	×	○	×	1	
95-477	59Ｄ区東群	1/4椀型滓D	3.067	18.4	3.2	2.9	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	○	1	
95-472	59Ｄ区東群	1/4椀型滓D	4.114	28.8	3	2.3	2.2	3	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	赤色
95-474	59Ｄ区東群	1/8以下椀型滓D	2.7	8.1	2.4	1.7	1.8	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-469	59Ｄ区東群	1/8以下椀型滓D		6.7	1.8	1.5	1.6	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-466	59Ｄ区東群	1/8椀型滓D	2.38	11.9	4	2.5	1.3	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
95-442	59Ａ区群	椀型滓A	1.35	2.7	2	1.9	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
95-442	59Ａ区群	1/2椀型滓A	1.96	98	5.7	5.4	3	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
95-442	59Ａ区群	1/2椀型滓B	2.629	18.4	4.1	2.2	1.7	3	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	ガラス質2でもよい
95-442	59Ａ区群	1/2椀型滓C	2.463	39.4	4.6	3.4	2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	ガラス質2でもよい
95-442	59Ａ区群	1/2椀型滓D	3.85	30.8	3.8	2.9	1.9	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	ガラス質2でもよい
89-1526	59Ａ区群	1/2椀型滓D	3.067	18.4	3.6	2.3	1.8	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	ガラス質2でもよい
95-442	59Ａ区群	1/4椀型滓D	2.725	21.8	4.6	2.8	1.7	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	ガラス質2でもよい
95-442	59Ａ区群	1/8椀型滓D	4.22	21.1	3.4	2	2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1751	「58」	1/2椀型滓C	3.385	88	6.5	4.3	2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1756	「58」	1/4椀型滓D	3.22	16.1	3.6	2.2	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1861	「58」	1/4椀型滓D	3.292	79	5	4.9	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	○	1	
89-1956	「58」	1/8椀型滓D	3.95	15.8	2.5	2.3	1.3	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1899	「58」	椀型滓D	3.85	15.4	3.5	2.3	1.4	2	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
73-1	「59B」	1/2椀型滓D	2.736	30.1	3.7	2.8	2.4	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1525	「59D」	1/4椀型滓B	2.708	35.2	4	3.3	2.5	2	0	0	欠	○	×	○	×	×	1	
89-1532	「59E」	1/8椀型滓D	3.133	9.4	3.1	2.1	1.3	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
178	「59E2」	1/4椀型滓D	2.575	20.6	3.5	3.2	1.8	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
63-209	「59E2」	椀型滓D	2.267	13.6	3.8	2.4	1.5	1	0	0	完	○	×	×	×	×	1	?
89-1555	「59G」	1/8以下椀型滓A	2.65	5.3	2	0.8	1.6	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
89-1563	「59G」	1/2椀型滓B	2.364	130	6.8	6.2	3	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	流動滓B付着
51-1	「59G」	1/8椀型滓D	2.04	10.2	4.3	1.7	1.3	2	0	1	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1990	「60C」	椀型滓D	3.222	58	5.7	4	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	

表２　朝日西遺跡出土椀型滓一覧表（２）

図３　朝日西遺跡における鉄資料の分布（２）

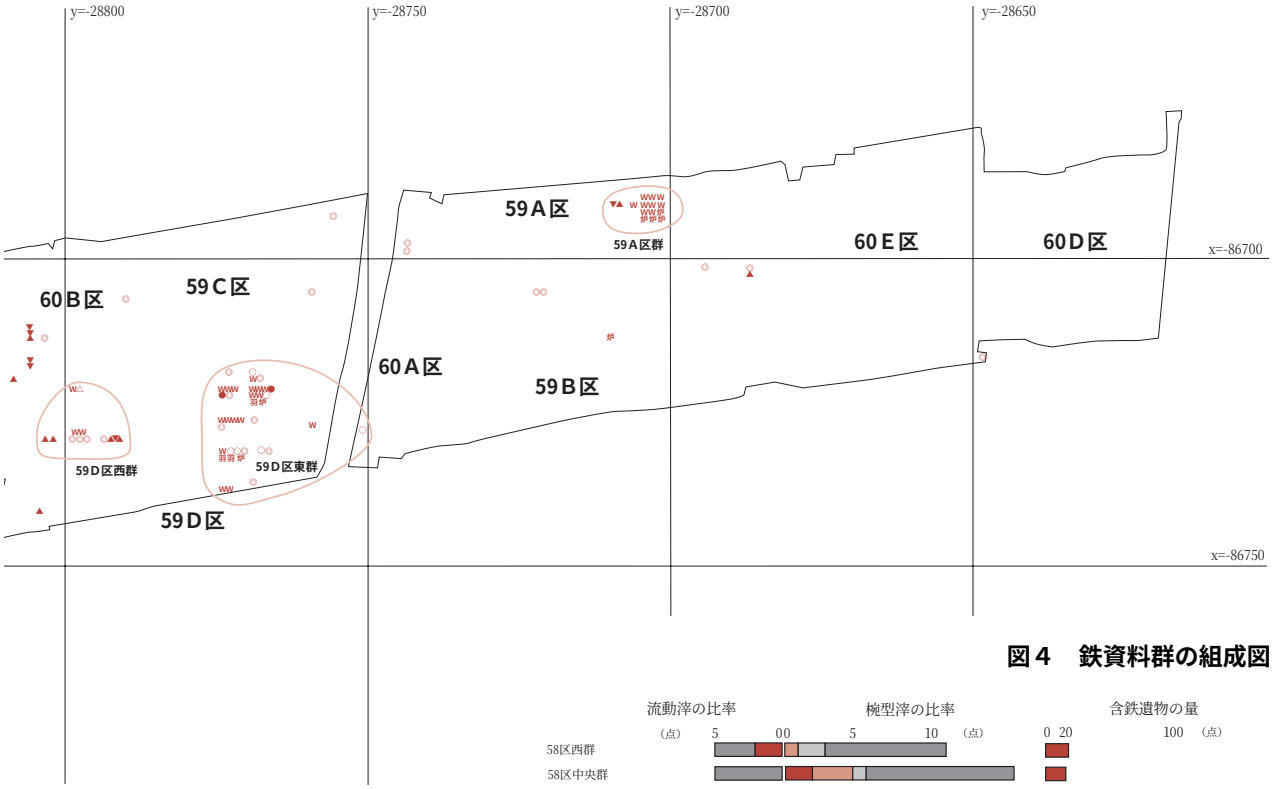


図４　鉄資料群の組成図

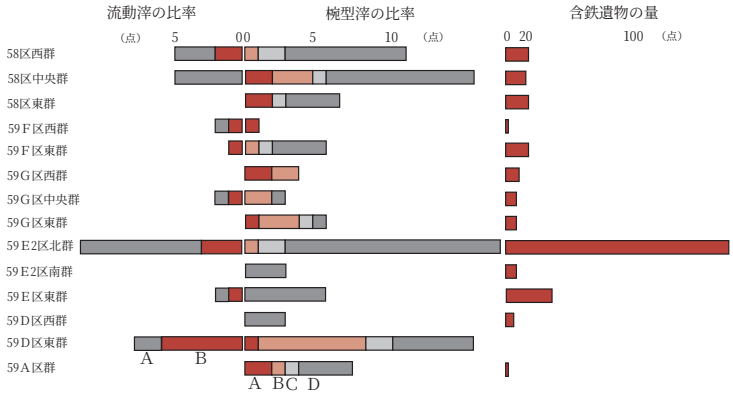


表３　朝日西遺跡出土各資料群の鉄資料組成表

朝日西遺跡 群	類型	椀型滓A	椀型滓B	椀型滓C	椀型滓D	流動滓A	流動滓B	含鉄遺物 棒状	含鉄遺物 偏平	含鉄遺物 礫状	鉄塊系遺物	鉄製品	銅製品	羽口	炉壁	とりべ	その他	合計	中世1・2	城下町期	朝日村期
58区西群	３ａ	0	1	2	9	3	2	13	2	2	0	5	0	0	0	0	0	39	0	0	0
58区中央群	１Ｂ	2	4	1	11	5	0	13	2	0	0	6	6	1	2	0	0	53	4	9	6
58区東群	４Ａａ	2	0	1	4	0	0	4	3	0	1	10	4	1	1	0	0	31	1	15	1
59Ｆ区西群	３ａ	1	0	0	0	1	1	2	0	0	0	3	0	0	2	0	0	10	9	0	0
59Ｆ区東群	３ａ	0	1	1	4	0	1	15	2	0	0	10	2	0	2	0	0	38	19	7	11
59Ｇ区西群	４Ａａ	2	2	0	0	0	0	7	1	2	0	10	1	0	1	0	1	27	5	4	2
59Ｇ区中央群	３ａ	0	2	0	1	1	1	6	1	1	1	5	0	0	1	0	1	21	1	17	0
59Ｇ区東群	４Ａａ	1	3	1	1	0	0	8	0	0	0	5	3	0	0	0	0	22	2	4	16
59Ｅ２区北群	１Ａ	0	1	2	16	9	3	150	8	10	10	58	5	0	3	0	0	275	12	86	39
59Ｅ２区南群	４Ａｂ	0	0	0	3	0	0	4	3	1	1	3	0	0	0	0	2	17	0	1	1
59Ｅ区東群	３ｂ	0	0	0	6	1	1	31	2	1	0	36	14	0	0	0	1	93	63	2	4
59Ｄ区西群	４Ａｂ	0	0	0	3	0	0	4	1	1	0	4	1	0	0	0	0	14	11	0	0
59Ｄ区東群	2	1	8	2	6	2	6	0	0	0	0	7	15	3	2	1	1	54	0	53	0
59Ａ区群	４Ｂ	2	1	1	4	0	0	1	1	0	0	0	1	0	5	0	1	17	0	17	0
その他	―	1	2	1	10	2	1	34	6	0	1	42	41	0	4	0	6	151	―	―	―
合計		12	25	12	78	24	16	292	32	18	14	204	93	5	23	1	13	862	127	215	80

鉄製品が30%、炉壁が10%を占め、流動滓は流動滓Ａと流動滓Ｂが同数存在し、椀型滓は椀型滓Ａのみである。

（５）59 Ｆ区東群

59 Ｆ区東半部に展開する一群である。分布が他の群に比べやや散漫となっており、中世、城下町期、朝日村期の各遺構から出土しているため、群の時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が約16%、流動滓が約3%、含鉄遺物が約45%を占め、他に炉壁などがある。流動滓は流動滓Ｂのみがあり椀型滓は椀型滓Ｂ～Ｄが存在する。

（６）59 Ｇ区西群

調査区南西部の59Ｇ区西部と一部58区にまたがって分布する一群である。、中世、城下町期、朝日村期の各遺構から鉄資料が出土しているため、群の時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が約16%、含鉄遺物が約37%、鉄製品が約37%を占め、他に炉壁などがある。椀型滓は椀型滓ＡとＢが各２点ずつ存在する。

（７）59 Ｇ区中央群

59 Ｇ区中央部に広がる一群で、城下町期の区画溝SD27から多くの鉄資料が出土しており、城下町期と位置付けられる。内訳は椀型滓が約14%、流動滓が約10%、含鉄遺物が約38%、鉄塊系遺物が約5%を占め、他に炉壁などがある。流動滓は流動滓Ａと流動滓Ｂが同数存在し、椀型滓は椀型滓ＢとＤが存在する。

（８）59 Ｇ区東群

59 Ｇ区東部に展開する一群で、朝日村期の遺構から鉄資料が多く出土したことから、近世に属するものと思われる。内訳は椀型滓が約27%、含鉄遺物が約36%、鉄製品が約23%を占め、他に銅製品がある。椀型滓は椀型滓Ａ～Ｄが全て存在するが、椀型滓Ｂがその半数を占める。

（９）59 Ｅ２区北群

遺跡中央部の59Ｅ2区北部に分布する一群で、中世と城下町期と朝日村期の各遺構から鉄資料が出土しているため、時期を特定することはできない。内訳は椀型滓が約7%、流動滓が約4%、含鉄遺物が約61%、鉄製品が約21%、鉄塊系遺物が約4%を占め、他に炉壁などがある。流動滓Ａは流動滓の75%、椀型滓Ｄは椀型滓の約84%を占めている。

（10）59 Ｅ２区南群

59Ｅ2区南部に広がる一群である。城下町期と朝日村期の遺構から鉄資料が１点づつ出土していることから、時期は城下町期以降であろう。鉄資料の内訳は椀型滓が20%、含鉄遺物が約53%、鉄塊系遺物が約7%、鉄製品が20%となる。椀型滓は椀型滓Ｄのみが存在する。

（11）59 Ｅ区東群

調査区中央部の59Ｅ区南東部に展開する一群である。鉄資料は城下町期と朝日村期の遺構から少量出土したが、大半は中世Ⅰ期の遺構から出土しているため、時期は中世Ⅰ期と考えられる。内訳は椀型滓が約6%、流動滓が約2%、含鉄遺物が約37%、鉄製品が約39%を占め、他に銅製品などがある。流動滓は流動滓ＡとＢが同数あり、椀型滓は椀型滓Ｄのみである。

（12）59 Ｄ区西群

調査区中央部の59 Ｄ区西部に分布する一群で、中世Ⅰ期の遺構SD108などから鉄資料が出土している。内訳は椀型滓が約21%、含鉄遺物が約43%、鉄製品が約29%、銅製品が約7%を占める。椀型滓は椀型滓Ｄのみが存在する。

（13）59 Ｄ区東群

59 Ｄ区東部に展開する一群で、城下町期の遺構（SD177とSD189）から鉄資料が出土した。これらの遺構は寺社地を区画する堀と考えられ、59 Ｄ区東群は区画の北西隅に位置する。金属関連遺物の内訳は椀型滓が約32%、流動滓が約15%を占め、他に鉄および銅製品、羽口、炉壁などがある。含鉄遺物が全く存在しない点が特徴的である。流動滓Ｂが流動滓の75%を占め、椀型滓ＢとＤが椀型滓の大半を占めている。

（14）59 Ａ区群

遺跡東部の59 Ａ区中央部に所在する堀SD200の屈曲部に集中して出土した一群であり、溝の時期は城下町期後期に属する。59 Ｄ区東群と同様、寺社地の北西隅に所在する。内訳は椀型滓が約47%、含鉄遺物が約12%、炉壁が約29%を占める。椀型滓は椀型滓Ａ～Ｄが全て存在する。

5．考　察

（1）椀型滓の質感（密度）について

ここでは、先に提示した表面観察による椀型滓分類と密度との関係について検討する。

まず、朝日西遺跡出土全椀型滓の密度の分布を検討する（図５）と、明瞭な形とはならないが2.5～2.7g/cc と 3.2g/cc にピークを認めることができる。そこで3.0g/cc 未満と 3.0g/cc 以上で区分すると、表面観察による椀型滓の分類との間に相関関係があることが分かる（表４）。つまり、椀型滓Ａと椀型滓Ｂは、密度が 3.0g/cc 以上のものよりも 3.0g/cc 以下のものの方が多く、椀型滓Ｃと椀型滓Ｄは、密度が 3.0g/cc 以下のものよりも密度が 3.0g/cc 以上のものの方が多いのである。

これを換言すれば、色調が灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含するもの、あるいは上表面の形状が非常に凹凸したものは密度が軽く、色調が黒～黒褐色のガラス質を包含し比較的気泡が小さく少ないもので上表面の形状が平坦なものは密度が重いと言える。このことから、密度の軽重は、含まれている気泡の大きさや量の違いなどが影響を及していると考えられる。また、椀型滓に含まれる鉄分の量が関与している可能性も考えられよう。いずれにしても、肉眼観察による分類が７割程度の確率で蓋然性があるものと評価できよう。

さて、以前に質感による椀型滓の分類を試みた門間沼遺跡、田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛沖遺跡の資料も密度を測定した（図６）。この結果、門間沼遺跡の全椀型滓の密度の分布状況は、2.5g/cc を挟んで２つのピークが認められた。特に質感が重いとした門間沼椀型滓ＢとＣの半数以上は、密度が3.0g/cc 以上となっている。一方、田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛沖遺跡の資料では、密度の分布が 2.5g/cc をピークとする正規分布となっており、門間沼遺跡とは様相が異なっていた。実際に、田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛沖遺跡の各資料を、門間沼遺跡で用いた質感の区分に適用させることは困難であった。

以上の結果、椀型滓の分類を客観的に行うには密度は有効な指標となり、遺跡や鉄資料の群によって密度分布の傾向が異なることが判明した。門間沼遺跡の鉄器生産工程の推測をさらに進めて考えるならば、密度が 3.0g/cc 以上の椀型滓は鍛錬鍛冶工程に伴うという可能性も指摘することができる。

	3.0g/cc未満	3.0g/cc以上	合計
椀型滓Ａ	9（75%）	3（25%）	12
椀型滓Ｂ	17（約74%）	6（約26%）	23
椀型滓Ｃ	4（約33%）	8（約67%）	12
椀型滓Ｄ	28（35%）	52（65%）	80
合計	58	69	127

表４　朝日西遺跡出土の椀型滓の分類と密度の相関表

図５朝日西遺跡出土椀型滓の密度分布図

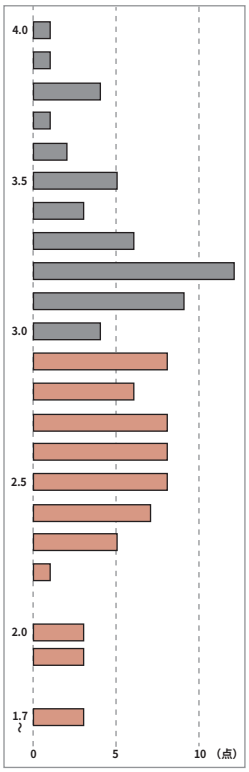
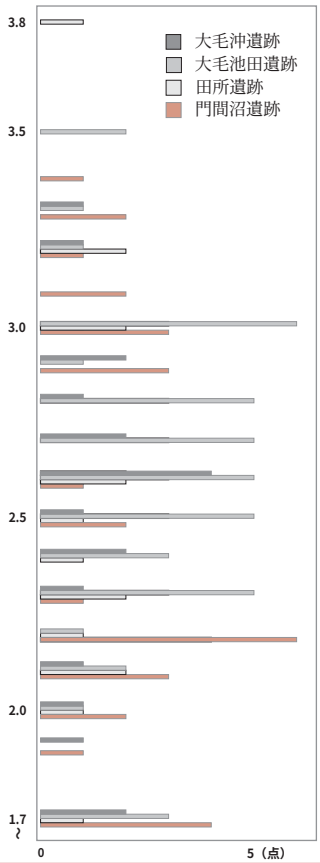


図６門間沼遺跡ほか出土椀型滓の密度分布図



（２）椀型滓の厚さについて

椀型滓の厚さについても若干の検討を加える。まず、朝日西遺跡出土の全椀型滓を厚さの分布を検討する（図７）と、細かい分布のピークが６ケ所で認められる。この分布と椀型滓の分類との関係を見ると、次のような傾向が認められる（表５）。

椀型滓Ａは厚さ 18mm 以下のものが約 83%を占めており、他類と比べて薄いものが多い。

椀型滓Ｂは数量的には薄いものが半数を占めているが、他類に比べると厚さ25mm以上のものが多く認められる傾向がある。

椀型滓Ｃと椀型滓Ｄはともに 20mm 前後をピークに分布する。

以上の結果が鉄器生産工程にどのように関わってくるのかは明らかではないが、一定の傾向を窺うことができることが判明した。

（３）流動滓の質感（比重）について

次に、表面観察による流動滓の分類と比重との相関関係について検討する。なお、比重は約2.5を基準にその浮沈を調査したに過ぎないことをあらかじめ断っておく。

朝日西遺跡出土の流動滓Ａと流動滓Ｂの比重を検討すると、流動滓Ａの75%は比重が2.5よりも大きいものであるのに対して、流動滓Ｂの 88%は比重が2.5よりも小さいものである（表６）。言い換えれば、一部の例外を除き、黒～黒褐色のガラス質を包含して比較的気泡が小さく少ないものは比重が大きく、灰色がかった黒～暗灰色のガラス質を包含して比較的気泡が大きく多いものは比重が小さいことになる。

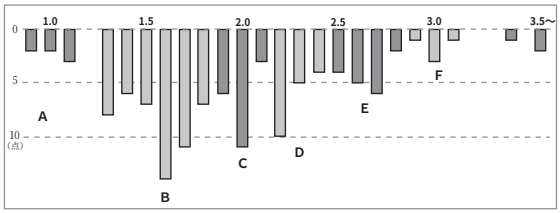


図７　朝日西遺跡出土椀型滓の厚さ分布図

厚さ(cm)	0.9～1.1	1.3～1.8	1.9～2.1	2.2～2.4	2.5～2.8	2.9～	合計
椀型滓Ａ	3	3	4	0	1	1	12
椀型滓Ｂ	1	8	3	2	6	3	23
椀型滓Ｃ	0	2	5	2	1	2	12
椀型滓Ｄ	3	41	8	15	8	5	80
合計	7	54	20	19	16	11	127

表５　朝日西遺跡出土椀型滓の分類と厚さの相関表

今回は、朝日西遺跡のみを分析したに過ぎず、他の遺跡と比較できないが、表面観察による流動滓の分類と比重とは相関関係があり、比重測定は有効な分析手法になると思われる。

（４）鉄資料組成の分類

朝日西遺跡を中心に、各群の鉄資料組成を類型化してまとめると、以下のように区分できる。まず、流動滓に着目すると流動滓Ａと流動滓Ｂの量比から大きく４類に区分でき、さらに含鉄遺物などの割合から細分が可能である。

１類……流動滓Ａのみ、または流動滓Ａの方が流動滓Ｂよりも凌駕するもの。

１Ａ類……金属関連資料における含鉄遺物、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄片の合計（以下「含鉄遺物など」と略称する）の割合が５割を超えるもの。59 Ｅ２区北群が該当する。この群の椀型滓は、密度が大きい椀型滓Ｄが 84%を占め、この椀型滓Ｄは厚さ 20mm 以下のものが半数以上となる。これまでの成果を勘案してみると、この群では鍛錬鍛冶工程を中心とした操業を推測することができる。

１Ｂ類……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が５割以下となるもの。58 区中央群が該当する。流動滓Ａが多い資料群は、従来含鉄遺物も多いという傾向があったが、この類は異なっている。椀型滓の組成も密度の小さい椀型滓Ａや椀型滓Ｂが一定量認められ、この点も従来の予測と異なっている。１Ａ類とは異なる時代または鉄器生産工程を想定しなければならないであろう。

２類……流動滓Ｂのみ、または流動滓Ｂの方が流動滓Ａよりも凌駕するもの。金属関連資料における含鉄遺物などの割合は非常に少ない。59 Ｄ区東群が該当する。この椀型滓は密度の小さい椀型滓Ｂが他群に比べ著しく多く、比重が小さい流動滓Ｂが多いことと連動しているように思われる。このような群のあり方は、従来の理解では鍛錬ではない精錬鍛冶に伴うものと推測してきたが、16 世紀末から 17 世紀初頭の新しい様相を示している可能性もある。

３類……流動滓Ａと流動滓Ｂがほぼ同数とな

表6　朝日西遺跡出土流動滓一覧表

番号	群	種別	比重	重量	長径	短径	厚さ	着磁	メタル1	メタル2	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
89-1931	58区西群	流動滓A	沈む	31.1	4.5	3.1	1.3	0	1	1	欠	○	×	○	×	×	1	銅片かみこみか？
89-1902	58区西群	流動滓A	沈む	9.8	2.7	1.9	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1922	58区西群	流動滓A	浮く	22.6	4.1	3	2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	赤色付着物有り
89-1939	58区西群	流動滓B	浮く	6.5	3	1.9	1.2	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
89-1937	58区西群	流動滓B	浮く	7.6	2.7	2.1	1.2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
89-1754	58区中央群	流動滓A	沈む	2.7	2.5	1.3	0.7	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1765	58区中央群	流動滓A	沈む	3.7	2.9	1.7	0.8	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1863	58区中央群	流動滓A	沈む	18.7	3.9	3.5	1.3	1	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1857	58区中央群	流動滓A	沈む	10	2.5	1.9	1.1	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1897	58区中央群	流動滓A	沈む	7.5	2	1.5	1.2	2	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
89-1551	59Ｆ区西群	流動滓A	沈む	15.8	3.9	2.1	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1548	59Ｆ区西群	流動滓B	浮く	2.6	1.9	1.4	1.2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
89-1550	59Ｆ区東群	流動滓B	浮く	9.2	3.4	2.7	1.1	2	0	0	完	○	×	×	×	×	2	
71-6	59Ｇ区中央群	流動滓A	沈む	3.2	1.6	1.5	1.2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
71-5	59Ｇ区中央群	流動滓B	浮く	0.4	1.3	0.9	0.7	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	変
63-321	59Ｅ２区北群	流動滓A	浮く	5.5	2.1	1.5	1.4	2	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
63-219	59Ｅ２区北群	流動滓A	沈む	24.7	5.2	4	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
140	59Ｅ２区北群	流動滓A	浮く	5.1	2.3	1.6	1.3	3	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
63-213	59Ｅ２区北群	流動滓A	沈む	14.1	3.1	2.3	1.6	3	0	0	完	×	×	×	×	×	1	
89-1542	59Ｅ２区北群	流動滓A	浮く	16.2	4.2	3.2	2	1	0	0	欠	○	○	○	×	×	1	
63-211	59Ｅ２区北群	流動滓A	沈む	3.1	2.1	1.2	0.9	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1544	59Ｅ２区北群	流動滓A	沈む	4.6	2.7	1.9	1.4	2	1	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1546	59Ｅ２区北群	流動滓A	沈む	7.9	2.5	1.7	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	○	1	小片(0.5g)多数あり
123-3	59Ｅ２区北群	流動滓A	2.5	14.8	4	2.1	1.6	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1536	59Ｅ２区北群	流動滓B	浮く	6.1	2.7	2	1.6	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
145	59Ｅ２区北群	流動滓B	浮く	2.1	2.2	1.3	0.9	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
128	59Ｅ２区北群	流動滓B	浮く	1.8	2.2	1	0.8	1	0	0	完	○	×	×	×	×	2	
165	59Ｅ区東群	流動滓A	浮く	19.5	4	2.5	2	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	鉄片噛み込み
95-904	59Ｅ区東群	流動滓B	浮く	2.3	2.8	1.7	1.2	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
89-1528	59Ｄ区東群	含鉄流動滓A	沈む	80	5.1	4.1	4	2	1	1	欠	○	×	×	×	○	1	
95-472	59Ｄ区東群	流動滓A	沈む	9.8	2.4	2	1.5	2	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
89-1530	59Ｄ区東群	流動滓B	浮く	20.4	4.7	2.7	2.1	1	1	1	欠	○	×	×	×	○	2	
95-478	59Ｄ区東群	流動滓B	浮く	23.4	3.5	3.2	2.2	2	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
95-478	59Ｄ区東群	流動滓B	浮く	11.1	3.7	2.8	1.7	1	0	0	欠	○	○	○	×	×	2	
95-472	59Ｄ区東群	流動滓B	沈む	3.1	1.5	1.4	1.1	3	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	破片になる
95-468	59Ｄ区東群	流動滓B	浮く	3.2	2.5	1.9	1.5	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
89-1991	59Ｄ区東群	流動滓B	沈む	15.7	4	3	2.1	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	赤色付着物
89-1855	「58」	流動滓A	沈む	18.8	4.7	2.5	1.4	1	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
89-1875	「58」	流動滓B	浮く	7.4	2.9	2	1.2	1	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
63-209	「59E2」	流動滓A	沈む	6.1	2.3	2	1.1	2	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	

るもの。いずれも金属関連資料における含鉄遺物などの割合は５～８割となり、58区西群、59Ｆ区西群、59Ｆ区東群、59Ｇ区中央群、59Ｅ区東群が該当する。この中で、椀型滓ＡとＢを含む群（３ａ類）は58区西群、59Ｆ区西群、59Ｆ区東群、59Ｇ区中央群であり、59Ｆ区西群は中世Ⅱ期、59Ｇ区中央群は城下町期に属する。一方、椀型滓が椀型滓Ｄのみで構成される群（３ｂ類）は59Ｅ区東群があり、中世Ⅰ期に属する。３ｂ類の59Ｅ区東群と、３ａ類でも椀型滓Ｄが圧倒的に多い58区西群は、１Ａ類と組成が類似しており鍛練鍛冶工程を中心とした操業を推測することができる。また、58区西群以外の３ａ類については、３ｂ類とは異なる新しい時期の資料群である可能性が考えられる。

４類……流動滓が全くないもの。

４Ａ類……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が５～８割となるもの。58区西群、59Ｇ区西群、59Ｇ区東群、59Ｅ２区南群、59Ｄ区西群が該当する。この中で、密度の小さい椀型滓ＡとＢを含む群（４Ａａ類）は58区西群、59Ｇ区西群、59Ｇ区東群があり、いずれも朝日村期の遺構から鉄資料が出土している。一方、椀型滓が椀型滓Ｄのみで構成される群（４Ａｂ類）は59Ｅ２区南群と59Ｄ区西群があり、中世Ⅰ期に属する。４Ａｂ類は１Ａ類のような中世Ⅰ期の鍛錬鍛冶工程を主体とする操業を推測でき、４Ａａ類は新しい時期の鍛錬鍛冶工程を主体とする操業、あるいは異なる工程の操業を推測しなければならないだろう。

４Ｂ類……金属関連資料における含鉄遺物などの割合が５割以下のもの。59Ａ区群が該当する。この群は椀型滓Ａ～Ｄの全部を含む組成であり、含鉄遺物などが非常に少ない点に特徴がある。このことから、鍛錬鍛冶工程とは全く異なる工程を想定した方がよいと思われる。

６．まとめ

門間沼遺跡での成果を受けて、今回は椀型滓の分類と、椀型滓と流動滓の質感（比重や密度）の分析を試みた。この結果、椀型滓と流動滓の表面観察による分類と比重や密度の測定値との間にある程度の対応関係が認められることが判明した。そして、椀型滓と流動滓の質感による各々の分類における組成が対応している状況も確認できた。この結果は含鉄遺物など（鉄塊系遺物や鉄製品も含む）の量比にも対応しそうである。また、質感の軽い椀型滓は新しい時期の資料群に多く存在することも無視し難い現象である。

こうしたことから、解決しなければならない問題を多く含むものの、鉄資料組成１Ａ類、３ｂ類、４Ａｂ類は鍛練鍛冶工程を中心とした中世前半の操業を、含鉄遺物などが多くかつ質感の軽い椀型滓を含む３ａ類、４Ａａ類は中世後半以降の鍛練鍛冶工程を中心とした操業の可能性を、含鉄遺物が少なく質感の軽い椀型滓を含む１Ｂ類、２類、４Ｂ類は城下町期以降の鍛練鍛冶とは異なる工程の操業の可能性を考えることができるのではないだろうか。今後さらに資料を増加していく際にこの傾向が追認されていくのであれば、鉄資料組成の分類には大きな意味があることが確かとなっていくであろう。

本稿は、鈴木と蔭山が鉄資料の分類と整理を行い、協議した結果を鈴木がまとめた。滓の分類や鉄資料組成の鉄器生産工程の場面の特定に際して決め手に欠け、いつもながら多くの課題を残している。

本稿を成すに際して、密度と比重に関しては堀木真美子氏と鬼頭剛氏、朝日西遺跡の評価については遠藤才文氏にご教示を得た。また、1999年12月には門間沼遺跡を中心とした分析結果を部内検討会で発表し、有益なご教示を多くの同僚から得ている。記して感謝の意としたい。

引用・参考文献

小澤一弘編　1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書28集
佐藤公保　1989「清須周辺の中世村落」『清須―織豊期の城と都市―研究報告編』
鈴木正貴・蔭山誠一　1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産その１」『年報平成８年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴・蔭山誠一・天野博之　1998「愛知県における古代・中世の鉄器生産その２」『考古学フォーラム９』
蔭山誠一・鈴木正貴　1999「門間沼遺跡における古代・中世の鉄器生産を考える」『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書80集

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
58区西群	89-1890	58			1/2椀型滓B	小型	
58区西群	89-1891	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1940	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1917	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1929	58			1/4椀型滓C	上面凸	
58区西群	89-1960	58			1/4椀型滓C	上面凸	
58区西群	89-1910	58			1/8椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1965	58	Id層		1/8椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1955	58			1/8椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1943	58			含鉄遺物	棒状	M-24
58区西群	89-1909	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1904	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1963	58	Id層		含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1964	58	Id層		含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1942	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1920	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1946	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1932	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1947	58	Id層		含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1951	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1952	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1948	58			含鉄遺物	棒状	
58区西群	89-1930	58			含鉄遺物	扁平	刀子か？
58区西群	89-1945	58			含鉄遺物	扁平	
58区西群	89-1923	58	Id層		含鉄遺物	礫状	
58区西群	89-1921	58	Id層		含鉄遺物	礫状	
58区西群	89-1962	58			鉄製品(釘)		
58区西群	89-1933	58			鉄製品(釘)		
58区西群	89-1908	58			鉄製品(釘)		
58区西群	89-1907	58			鉄製品(刀子)		
58区西群	89-1938	58			鉄製品(不明)	円盤状	
58区西群	89-1931	58			流動滓A	扁平	
58区西群	89-1902	58			流動滓A	礫状	
58区西群	89-1922	58	Id層		流動滓A	礫状	
58区西群	89-1939	58			流動滓B	礫状	
58区西群	89-1937	58			流動滓B	礫状	
58区西群	89-1941	58			椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1944	58			椀型滓D	上面平	
58区西群	89-1936	58			椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1887	58			1/2重複椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1893	58			1/2椀型滓A	上面凸凸	
58区中央群	89-1884	58			1/2椀型滓B	上面凸凸	
58区中央群	89-1753	58	SD09	中世Ⅰ期	1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1924	58	SD07	朝日村期	1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1757	58	SK54	朝日村期	1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1725	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1874	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1896	58			1/2椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1867	58			1/4椀型滓A	上面凸凸	
58区中央群	89-1747	58	SK46	朝日村期	1/4椀型滓B	上面凸凸	
58区中央群	89-1869	58			1/4椀型滓B	上面凸凸	
58区中央群	89-1745	58	SD09	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1892	58			1/8椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1872	58			1/8椀型滓D	上面平	
58区中央群	89-1746	58	SK27	朝日村期	羽口		
58区中央群	89-1758	58	SD07	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1772	58	SD07	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1764	58	SK26	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1771	58	SK26	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1770	58	SK26	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1769	58	SK26	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1759	58	SK26	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1868	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1895	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1953	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1885	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1885	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1858	58			含鉄遺物	棒状	
58区中央群	89-1957	58			含鉄遺物	扁平	
58区中央群	89-1898	58			含鉄遺物	扁平	
58区中央群	89-1918	58			鉄製品(釘)		M-25
58区中央群	89-1729	58			鉄製品(刀物？)		
58区中央群	89-1859	58			鉄製品(刀子)		
58区中央群	89-1935	58			鉄製品(刀子)		
58区中央群	89-1862	58			鉄製品(不明)	輪状	
58区中央群	89-1934	58			鉄製品(不明)		
58区中央群	89-1865	58	SD09	中世Ⅰ期	銅塊	礫状	
58区中央群	89-1742	58	SK26	城下町Ⅱ期	銅製品(不明)		
58区中央群	89-1737	58			銅銭(永楽通宝)		
58区中央群	89-1734	58	SK26	城下町Ⅱ期	銅銭(乾元重宝)		
58区中央群	89-1736	58	SK53	城下町Ⅱ期	銅銭(元祐通宝)		
58区中央群	89-1738	58	I層		銅銭(天保通宝)		
58区中央群	89-1754	58	SD09	中世Ⅰ期	流動滓A	扁平	
58区中央群	89-1765	58	SK26	城下町Ⅱ期	流動滓A	扁平	
58区中央群	89-1857	58			流動滓A	扁平	
58区中央群	89-1863	58			流動滓A	礫状	
58区中央群	89-1897	58			流動滓A	礫状	
58区中央群	89-1871	58			炉壁		
58区中央群	89-1870	58			炉壁		
58区中央群	89-1888	58			椀型滓B	小型	
58区中央群	89-1883	58			椀型滓C	上面凸	
58区中央群	89-1950	58			椀型滓D	上面平	
58区東群	89-1911	58	Id層		1/2重複椀型滓		
58区東群	89-1740	58	SD26	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓D	上面平	
58区東群	89-1913	58	SD28	中世Ⅰ期	1/2椀型滓D	上面平	
58区東群	89-1727	58	SD27	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓A	上面凸凸	
58区東群	89-1750	58	SK67	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓A	上面凸凸	
58区東群	89-1752	58	SK69	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓C	上面凸	
58区東群	89-1748	58	SD27	城下町Ⅱ期	1/8椀型滓D	上面平	
58区東群	89-1912	58	Id層		1/8椀型滓D	上面平	
58区東群	89-1744	58	SK96	城下町Ⅱ期	羽口		
58区東群	89-1760	58	SD27	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区東群	89-1768	58	SK82	城下町Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
58区東群	89-1767	58	SK70	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
58区東群	89-1879	58	荒		含鉄遺物	棒状	
58区東群	89-1755	58	SD27	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	扁平	
58区東群	89-1880	58	荒		含鉄遺物	扁平	
58区東群	89-1743	58	SK96	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	扁平	
58区東群	89-1733	58	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
58区東群	89-1763	58	SD26	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
58区東群	89-1927	58	SK76	朝日村期	鉄製品(釘)		
58区東群	89-1900	58	荒		鉄製品(釘)		
58区東群	89-1916	58	Id層		鉄製品(釘)		
58区東群	89-1873	58	荒掘り		鉄製品(刀子)		
58区東群	89-1903	58	荒		鉄製品(著？)	棒状	
58区東群	89-1766	58	SK78		鉄製品(不明)	棒状	
58区東群	89-1864	58	荒		鉄製品(不明)	扁平	
58区東群	89-1901	58	荒		鉄製品(鉾？)		
58区東群	89-1761	58	SD27	城下町Ⅱ期	銅製品(不明)		
58区東群	89-1741	58	SK72	城下町Ⅱ期	銅製品？(著)		M-18.20
58区東群	89-1875	58	I層		銅銭(永楽通宝)		
58区東群	89-1875	58	I層		銅銭(永楽通宝)		
58区東群	89-1877	58	荒		炉壁	礫状	
59Ｆ区西群	89-1551	59F	SK111	中世Ⅱ期	1/8椀型滓A	上面凸凸	
59Ｆ区西群	67-3	59F	SK111	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区西群	67-2	59F	SK111	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区西群	67-1	59F	SK111	中世Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区西群	27	59F	P301		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｆ区西群	40	59F	SD45	中世Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｆ区西群	89-1551	59F	SK111	中世Ⅱ期	流動滓A	扁平	
59Ｆ区西群	89-1548	59F	SK110	中世Ⅰ期	流動滓B	礫状	
59Ｆ区西群	89-1551	59F	SK111	中世Ⅱ期	炉壁	礫状	
59Ｆ区西群	89-1551	59F	SK111	中世Ⅱ期	炉壁	礫状	
59Ｆ区東群	89-1554	59F	SK127	城下町期	？椀型滓D	上面平	分析済
59Ｆ区東群	77-1	59F	SK124	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓C	上面凸	
59Ｆ区東群	89-1553	59F	SD55	中世Ⅰ期	1/8椀型滓D	上面平	
59Ｆ区東群	63	59F	SK139	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	53-2	59F	SK121	城下町期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	53-1	59F	SK121	城下町期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	89-1777	59F	SK143	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	64	59F	SE16	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	34	59F	P412		含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	24	59F	SD49	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	29	59F	SD49	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	2	59F	SD55	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	38	59F	SD55	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	41	59F	SD55	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	44	59F	SD55	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	59-2	59F	SD49	朝日村期	含鉄遺物	扁平	
59Ｆ区東群	89-1552	59F	SK157	中世	重複椀型滓D	上面平	
59Ｆ区東群	89-1779	59F	SK143	朝日村期	鉄製品(カギ？)		M-23
59Ｆ区東群	21	59F	SD55	中世Ⅰ期	鉄製品(鎌)		
59Ｆ区東群	77-3	59F	SK124	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区東群	42	59F	SK145	城下町期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区東群	89-1782	59F	SD55	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区東群	2	59F	SD55	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区東群	19	59F	SD56	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
59Ｆ区東群	89-1780	59F	SK143	朝日村期	鉄製品(不明)		現代か？
59Ｆ区東群	89-1776	59F	SK143	朝日村期	銅銭？		
59Ｆ区東群	89-1550	59F	SD49	朝日村期	流動滓B	扁平	
59Ｆ区東群	59-1	59F	SD49	朝日村期	炉壁	扁平	
59Ｆ区東群	89-1549	59F	SK146	城下町期	炉壁	礫状	
59Ｆ区東群	63-312	60C	SD75	中世Ⅱ期	1/4椀型滓B	上面凸凸	
59Ｆ区東群	89-1992	60C	SD75	中世Ⅱ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｆ区東群	63-308	60C	SD75	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	63-324	60C	SD75	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	63-313	60C	SD75	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｆ区東群	63-322	60C	SD55	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59Ｆ区東群	63-323	60C	SD75	中世Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｆ区東群	63-320	60C	SD75	中世Ⅱ期	鉄製品(刀子柄)		
59Ｆ区東群	89-2122	60C	SD55	中世Ⅰ期	銅片	扁平	
59Ｇ区西群	89-1919	58			1/2椀型滓A	上面凸凸	
59Ｇ区西群	89-1925	58			1/2椀型滓B	上面凸凸	
59Ｇ区西群	89-1958	58			含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	89-1894	58	Id層		含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	89-1915	58	Id層		含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	89-1860	58	Id層		含鉄遺物	扁平	鎌？
59Ｇ区西群	91-396	58	Id層		鉄製品(火打鎌)		
59Ｇ区西群	89-1916	58	Id層		鉄製品(刃物)		
59Ｇ区西群	89-1949	58			鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	89-1954	58			鉄製品(釘)		新しい
59Ｇ区西群	89-1905	58	Id層		鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	89-1914	58	Id層		鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	89-1928	58	Id層		銅塊	礫状	
59Ｇ区西群	89-1906	58	Id層		炉壁	礫状	
59Ｇ区西群	89-1558	59G	SD63	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓B	上面凸凸	
59Ｇ区西群	89-1557	59G	SK169	朝日村期	1/8椀型滓A	上面凸凸	
59Ｇ区西群	48-2	59G	SD62	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	7	59G	SK168	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	70-1	59G	P523		含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	31	59G	P457		含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区西群	48-1	59G	SD62	中世Ⅰ期	含鉄遺物	礫状	
59Ｇ区西群	79	59G	SK189	中世Ⅰ期	含鉄遺物	礫状	
59Ｇ区西群	26	59G	SD63	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	15	59G	SK175	城下町期	鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	33	59G	SK169	朝日村期	鉄製品(釘)		
59Ｇ区西群	12-1	59G	SD63	城下町Ⅱ期	鉄製品(刀子)		M-3
59Ｇ区西群	28	59G	SD62	中世Ⅰ期		扁平	
59Ｇ区中央群	89-1560	59G	SD27	城下町Ⅱ期	？		⑤分析済
59Ｇ区中央群	62	59G	SD27	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓B	上面凸凸	
59Ｇ区中央群	65-1	59G	SD27	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓B	上面凸凸	
59Ｇ区中央群	89-1556	59G	P577		1/4椀型滓D	上面平	
59Ｇ区中央群	47	59G	SD69	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	71-1	59G	SD27	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	71-8	59G	SD27	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	32	59G	SE28	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	45	59G	SK200	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	78-1	59G	P579		含鉄遺物	棒状	
59Ｇ区中央群	30	59G	SK208	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59Ｇ区中央群	71-3	59G	SD27	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59Ｇ区中央群	32	59G	SE28	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	礫状	
59Ｇ区中央群	71-4	59G	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｇ区中央群	78-2	59G	P579		鉄製品(釘)		
59Ｇ区中央群	71-2	59G	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(刀子)		
59Ｇ区中央群	65-2	59G	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(鋲)		
59Ｇ区中央群	74-1	59G	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	偏平	
59Ｇ区中央群	71-6	59G	SD27	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｇ区中央群	71-5	59G	SD27	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	

表７　朝日西遺跡出土金属関連資料一覧表（１）

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
59G区中央群	89-1559	59G	SK200	城下町Ⅱ期	炉壁	礫状	
59G区東群	20	59G	SX03	朝日村期	1/2椀型滓A	上面凸凸	
59G区東群	89-1562	59G	SX03	朝日村期	1/2椀型滓C	上面凸	
59G区東群	89-1561	59G	SD72	朝日村期	1/4椀型滓B	上面凸凸	
59G区東群	72-1	59G	SD42	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓B	上面凸凸	
59G区東群	43	59G	SK215	中世	1/4椀型滓B	上面凸凸	
59G区東群	61	59G	SD71	朝日村期	1/4椀型滓D	上面平	
59G区東群	60-2	59G	SD72	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	60-1	59G	SD72	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	58-1	59G	SX03	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	58-2	59G	SX03	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	20	59G	SX03	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	50	59G	SK226	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	13	59G	SK215	中世	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	11	59G	SK210	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59G区東群	57	59G	SK214	城下町Ⅱ期	鉄製品(四股刺突具)		
59G区東群	14	59G	SD72	朝日村期	鉄製品(釘)		
59G区東群	81-5	59G	SK221	朝日村期	鉄製品(釘)		
59G区東群	22	59G	SK220	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59G区東群	4	59G	SX03	朝日村期	鉄製品(不明)		
59G区東群	89-1516	59G	SD72	朝日村期	銅製品(キセルか?)		
59G区東群	89-1517	59G	SK223	朝日村期	銅製品(キセル吸口)		M-11
59G区東群	89-1635	59G	SD72	朝日村期	銅製品(不明)	筒状	新しいか
59E2区北群	117	59E2	表土		1/2椀型滓C	上面凸	
59E2区北群	168	59E2			1/2椀型滓D	上面平	
59E2区北群	156	59E2			1/2椀型滓D	上面平	
59E2区北群	89-1543	59E2	SK305	朝日村期	1/2椀型滓D	上面平	
59E2区北群	89-1543	59E2	SK305	朝日村期	1/2椀型滓D	上面平	
59E2区北群	134	59E2	SK282	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓D	上面平	
59E2区北群	105-3	59E2	検出		1/4含鉄椀型滓D	上面平	
59E2区北群	157	59E2	SK322	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	1/8以下椀型滓D	上面平	
59E2区北群	63-257	59E2			1/8以下椀型滓D	上面平	
59E2区北群	159	59E2	SD83	朝日村期	1/8椀型滓D	上面平	
59E2区北群	153	59E2	SK323	城下町Ⅱ期	1/8椀型滓D	上面平	
59E2区北群	89-1534	59E2	P654		1/8椀型滓D	上面平	
59E2区北群	137	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	163-2	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	163-3	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-216	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-216	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	163-1	59E	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	151	59E	SK285	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-223	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-223	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-223	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-223	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-226	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-210	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-210	59E	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	121-1	59E			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	106-1	59E	検出		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	122-2	59E			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-224	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-224	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-224	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-224	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	148-1	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	108	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	135	59E2	SD83	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	141	59E2	SD84	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-217	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	149	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	126	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	129-2	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-212	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-212	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-212	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-212	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-212	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	127	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	143	59E2	SK235	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	225	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	158-1	59E2	SK241	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	158-2	59E2	SK241	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	179-1	59E2	SK244	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	147	59E2	SK248		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	155-1	59E2	SK282	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-214	59E2	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-214	59E2	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-214	59E2	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-214	59E2	SK292	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-228	59E2	SK274	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-228	59E2	SK274	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	170	59E2	SK257	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-227	59E2	SK284	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	95-873	59E2	SK278	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	171-2	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	130	59E2	SK236	城下町期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	171-1	59E2			含鉄遺物	棒状	

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
59E2区北群	162-1	59E2	SK281	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	172-2	59E2	SK263	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	172-1	59E2	SK263	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	174-3	59E2	SK286	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	174-2	59E2	SK286	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	174-1	59E2	SK286	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	220	59E2	SK286	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	220	59E2	SK286	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-231	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-222	59E2	SK291	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-222	59E2	SK291	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	131-1	59E2	SK322	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	131-3	59E2	SK322	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	142	59E2	SK294	城下町期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	136	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	111-2	59E2	SK288	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	113	59E2	P648		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	242	59E2	P665		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	115	59E2	P670		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-263	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-291	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	146-2	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	146-1	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-282	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-289	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-288	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-287	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-284	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-281	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-280	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-279	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-277	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-275	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-274	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-273	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-272	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-268	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	86-2	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	118-3	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	118-2	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	118-1	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	100	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	87	59E2	検出		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	116-3	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-261	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-260	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-259	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	107-2	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-256	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-253	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-252	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-250	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-251	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	105-1	59E2	検出		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	105-2	59E2	検出		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	105-4	59E2	検出		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-237	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-238	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-239	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-240	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-241	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-241	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	63-246	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	120-1	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	122-1	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	120-5	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	120-2	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	120-4	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	116-1	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	116-2	59E2			含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	123-1	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	123-4	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	123-5	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	123-7	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	123-6	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59E2区北群	148-2	59E2	SD82	朝日村期	含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-217	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-215	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	176-1	59E2	SK329	城下町期	含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	175	59E2	SK322	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-243	59E2	P665		含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-235	59E2	表土		含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-283	59E2			含鉄遺物	扁平	
59E2区北群	63-217	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-217	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	155-2	59E2	SK282	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-231	59E2			含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-292	59E2			含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-296	59E2			含鉄遺物	礫状	
59E2区北群	63-213	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	扁平	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	扁平	
59E2区北群	111-1	59E2	SK288	中世Ⅰ期	鉄塊系遺物	扁平	
59E2区北群	120-3	59E2	表土		鉄塊系遺物	扁平	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	176-2	59E2	SK329	城下町期	鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	164	59E2			鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	63-258	59E2			鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	110-2	59E2	表土		鉄塊系遺物	礫状	
59E2区北群	119-1	59E2	表土		鉄製品(リング)		
59E2区北群	95-912	59E	荒		鉄製品(火打鎌)		
59E2区北群	63-278	59E2	表土		鉄製品(火打鎌)		
59E2区北群	98	59E2	表土		鉄製品(小札)		
59E2区北群	63-248	59E2	表土		鉄製品(刃物？)		
59E2区北群	112	59E2	表土		鉄製品(刃物？)		

表８　朝日西遺跡出土金属関連資料一覧表（２）

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
59Ｅ２区北群	63-236	59E2	表土		鉄製品(刃物刀子？)		
59Ｅ２区北群	63-234	59E2	表土		鉄製品(刃物刀子？)		
59Ｅ２区北群	63-216	59E	SK292	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-216	59E	SK292	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-216	59E	SK292	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	218	59E	SK285	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	218	59E	SK285	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	218	59E	SK285	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	218	59E	SK285	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	133	59E	SK285	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-226	59E	SK284	朝日村期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-226	59E	SK284	朝日村期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	106-2	59E	検出		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	82	59E2	SD82	朝日村期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-213	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-214	59E2	SK292	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	154	59E2	SK278	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	95-874	59E2	SK278	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	162-2	59E2	SK281	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	95	59E2	SK293	朝日村期	鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-286	59E2			鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-285	59E2			鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-271	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	102	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-255	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-254	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-245	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区北群	63-247	59E2	表土		鉄製品(刀)		
59Ｅ２区北群	63-229	59E	粗掘		鉄製品(刀？)		
59Ｅ２区北群	63-221	59E2	SK272	城下町Ⅱ期	鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	95-875	59E2			鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	63-232	59E2	表土		鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	63-233	59E2	表土		鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	63-244	59E2	表土		鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	123-2	59E2	表土		鉄製品(刀子)		
59Ｅ２区北群	63-276	59E2	表土		鉄製品(刀子？)		
59Ｅ２区北群	63-249	59E2	表土		鉄製品(鎬片)		
59Ｅ２区北群	84	59E2	表土		鉄製品(不明)	棒状	新しい
59Ｅ２区北群	63-264	59E2	表土		鉄製品(不明)	リング状	
59Ｅ２区北群	110-1	59E2	表土		鉄製品(不明)	リング状	
59Ｅ２区北群	94	59E2	表土		鉄製品(不明)	釣針状	
59Ｅ２区北群	129-1	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	173	59E2	SE35	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	131-2	59E2	SK322	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	87	59E2	検出		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	107-1	59E2	表土		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	121-2	59E2	表土		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ２区北群	63-319	60C	SD80	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	扁平	
59Ｅ２区北群	63-265	59E2	表土		鉄製品(不明)	扁平	
59Ｅ２区北群	101	59E2	表土		鉄製品(不明)	扁平	
59Ｅ２区北群	179-2	59E2	SK244	城下町Ⅱ期	鉄片	扁平	
59Ｅ２区北群	89-1522	59E2	表土		銅製品(キセル吸口)		M-9
59Ｅ２区北群	63-266	59E2	表土		銅製品(刃物類)		ハバキ
59Ｅ２区北群	89-2127	60C	SD79	朝日村期	銅製品(刀子柄)		M-6
59Ｅ２区北群	63-736	59E	粗掘		銅銭(皇宋通宝)		
59Ｅ２区北群	89-1521	59E	SK284	朝日村期	銅銭(不明)		
59Ｅ２区北群	63-219	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	流動滓A	扁平	
59Ｅ２区北群	63-213	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	流動滓A	扁平	
59Ｅ２区北群	63-321	60C	SD80	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	140	59E2	SD94	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	89-1542	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	63-211	59E2	SE34	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	89-1544	59E2	SK246	中世Ⅰ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	89-1546	59E2	SK260	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ２区北群	123-3	59E2	表土		流動滓A		
59Ｅ２区北群	128	59E2	SK242	城下町Ⅱ期	流動滓B	棒状	
59Ｅ２区北群	89-1536	59E2	SD87	朝日村期	流動滓B	礫状	
59Ｅ２区北群	145	59E2	SD90	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59Ｅ２区北群	89-1546	59E2	SK260	城下町Ⅱ期	炉壁	礫状	
59Ｅ２区北群	63-249	59E2	表土		炉壁	礫状	
59Ｅ２区北群	89-1547	59E2			炉壁		
59Ｅ２区北群	89-1533	59E2	SD93	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59Ｅ２区北群	119-2	59E2	表土		椀型滓C	上面凸	
59Ｅ２区北群	89-1537	59E2	SD98	中世	椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区北群	89-1539	59E2	SK305	朝日村期	椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区北群	89-1543	59E2	SK305	朝日村期	椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区北群	63-262	59E2	表土		椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区南群	63-230	59E2	表土		1/2椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区南群	89-1535	59E2	表土		1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区南群	63-295	59E2	表土		1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ２区南群	93	59E2	南T		鉛玉？		鉄か？
59Ｅ２区南群	132	59E2	SE36	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ２区南群	177	59E2	SK252	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ２区南群	63-293	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ２区南群	104	59E2	南T		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ２区南群	167	59E2	表土		含鉄遺物	扁平	
59Ｅ２区南群	63-294	59E2	表土		含鉄遺物	扁平	
59Ｅ２区南群	114-1	59E2	表土		含鉄遺物	扁平	
59Ｅ２区南群	114-2	59E2	表土		含鉄遺物	礫状	
59Ｅ２区南群	169	59E2	表土		金属製品(不明)	扁平	銅と鉄か
59Ｅ２区南群	63-296	59E2	表土		鉄塊系遺物	礫状	
59Ｅ２区南群	99-1	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ２区南群	124	59E2	表土		鉄製品(不明)	扁平	新しい
59Ｅ２区南群	99-2	59E2	表土		鉄製品(留金具)		
59Ｅ区東群	89-1545	59E2	SD109	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	89-1541	59E2	P738		1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	89-1538	59E2	表土		1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	95-891	59E	SD133	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	95-891	59E	SD133	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	138-1	59E2	SD109	中世Ⅰ期	1/8以下椀型滓D	上面平	
59Ｅ区東群	138-2	59E2	SD109	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	144	59E2	SD109	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	109	59E2	SD109	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	150-1	59E2	SD109	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	166-1	59E2	SD109	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	90	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	85	59E2	南北T		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	88-1	59E2	攪乱坑		含鉄遺物	棒状	

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
59Ｅ区東群	103	59E2	表土		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	152-1	59E	SK359	朝日村期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-906	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-903	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-899	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-897	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-896	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-895	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-893	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-889	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-887	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-886	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-884	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-885	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-883	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-438	59E	SK372	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-432	59E	SK372	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-435	59E	SK372	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-436	59E	SK372	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-437	59E	SK372	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-913	59E	検出		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-911	59E	検出		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-918	59E	粗		含鉄遺物	棒状	
59Ｅ区東群	95-892	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59Ｅ区東群	95-877	59E	SD133	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59Ｅ区東群	89	59E2	表土		含鉄遺物	礫状	
59Ｅ区東群	91-2	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(火打金)		M-15
59Ｅ区東群	92-3804	59E	SK335	中世Ⅰ期	鉄製品(火箸)		下2点と同一
59Ｅ区東群	92-3804	59E	SK335	中世Ⅰ期	鉄製品(火箸)		
59Ｅ区東群	92-3804	59E	SK335	中世Ⅰ期	鉄製品(火箸)		
59Ｅ区東群	150-2	59E2	SD109	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	97	59E2	P751		鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	91	59E2	表土		鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-906	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-905	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-901	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-898	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-898	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-895	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-882	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-878	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	95-914	59E	検出		鉄製品(釘)		
59Ｅ区東群	161	59E2	SE37	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
59Ｅ区東群	92-3802	59E	SK388	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
59Ｅ区東群	92-3803	59E	SK335	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
59Ｅ区東群	95-900	59E	SE44	城下町Ⅱ期	鉄製品(刀子)		
59Ｅ区東群	91-395	59E	SK375	朝日村期	鉄製品(刀子柄)		外周は銅製
59Ｅ区東群	95-881	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(刀柄？)		
59Ｅ区東群	96	59E2	P721		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	89	59E2	表土		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	152-2	59E	SK359	朝日村期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	166-2	59E2	SD109	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	リング状	
59Ｅ区東群	88-2	59E2	攪乱坑		鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	95F-317	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	棒状	M-2
59Ｅ区東群	95-894	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	95-433	59E	SK372	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	棒状	
59Ｅ区東群	95-908	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)		
59Ｅ区東群	95-932	59E	SE39	城下町Ⅱ期	鉄製品(包丁)		
59Ｅ区東群	95-907	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(鏃)		
59Ｅ区東群	95-888	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(鏃)		
59Ｅ区東群	95-434	59E	SK372	中世Ⅰ期	鉄製品(鏃)		
59Ｅ区東群	95F-317	59E	SD133	中世Ⅰ期	鉄製品(鏃)		M-2
59Ｅ区東群	95C-160	59E	SD133	中世Ⅰ期	鋼製品(飾り具)		M-21
59Ｅ区東群	63-742	59D	SD133	中世Ⅰ期	銅銭(開元通宝)		
59Ｅ区東群	89-1523	59E2	SK328	朝日村期	銅銭(寛永通宝)		
59Ｅ区東群	63-737	59E	粗掘		銅銭(寛永通宝)		
59Ｅ区東群	95-925	59E	粗掘		銅銭(元　　宝)		
59Ｅ区東群	63-744	59D	SD133	中世Ⅰ期	銅銭(元豊通宝)		
59Ｅ区東群	63-744	59D	SD133	中世Ⅰ期	銅銭(淳化元宝)		
59Ｅ区東群	63-740	59E	検出		銅銭(淳熙元宝)		
59Ｅ区東群	63-738	59E	粗掘		銅銭(聖宋元宝)		
59Ｅ区東群	63-739	59E	検出		銅銭(天聖元宝)		
59Ｅ区東群	63-745	59D	SD133	中世Ⅰ期	銅銭(不明)		
59Ｅ区東群	95-930	59E	粗掘		銅銭(不明)		
59Ｅ区東群	95-926	59E	粗		銅銭(不明)		焼けている
59Ｅ区東群	63-743	59D	SD133	中世Ⅰ期	銅銭(咸平元宝)		
59Ｅ区東群	95-920	59E	SD150		銅銭(熙寧元宝)		
59Ｅ区東群	165	59E2	SD109	中世Ⅰ期	流動滓A	礫状	
59Ｅ区東群	95-904	59E	SD133	中世Ⅰ期	流動滓B	礫状	
59Ｄ区西群	95-421	59D			1/2椀型滓D？	上面平	
59Ｄ区西群	95-447	59D	SD108	中世Ⅰ期	1/8椀型滓D	上面平	
59Ｄ区西群	95-423	59D	SD108	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｄ区西群	95-424	59D	SD108	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｄ区西群	95-425	59D	SD108	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｄ区西群	95-426	59D	SD108	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
59Ｄ区西群	95-422	59D	SD108	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
59Ｄ区西群	95-420	59D	SD108	中世Ⅰ期	鉄製品(金具)	釣針状	
59Ｄ区西群	95-419	59D	SD108	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｄ区西群	95-427	59D	SD108	中世Ⅰ期	鉄製品(釘)		
59Ｄ区西群	95-430	59D	SD108	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
59Ｄ区西群	89-1503	59D	SD179	中世Ⅱ期	銅銭(皇宋通宝)		
59Ｄ区西群	95-890		整理層		1/8椀型滓D	上面平	
59Ｄ区西群	95-890		整理層		含鉄遺物	礫状	
59Ｄ区東群	89-1529	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/2含鉄椀型滓B	上面凸凸	
59Ｄ区東群	95-462	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓B	上面凸凸	
59Ｄ区東群	95-471	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-477	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-472	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-472	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/8以下椀型滓C	上面凸	
59Ｄ区東群	95-474	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/8以下椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-469	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/8以下椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-467	59D	SD177	城下町Ⅱ期	1/8椀型滓C	上面凸	
59Ｄ区東群	95-466	59D	SD189	城下町Ⅱ期	1/8椀型滓D	上面平	
59Ｄ区東群	95-476	59D	SD177	城下町Ⅱ期	とりべ		
59Ｄ区東群	95-469	59D	SD177	城下町Ⅱ期	羽口		
59Ｄ区東群	95-462	59D	SD177	城下町Ⅱ期	羽口		
59Ｄ区東群	95-463	59D	SD177	城下町Ⅱ期	羽口		
59Ｄ区東群	89-1528	59D	SD177	城下町Ⅱ期	含鉄流動滓A		
59Ｄ区東群	23	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		

表９　朝日西遺跡出土金属関連資料一覧表（３）

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
59D区東群	95-465	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(刀子)		
59D区東群	95-474	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	板状	
59D区東群	95-473	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	板状	
59D区東群	10	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59D区東群	95-479	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59D区東群	95-464	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	棒状	
59D区東群	89-1494	59D	SD177	城下町Ⅱ期	鉄製品(不明)	扁平	
59D区東群	89-1507	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(　　通宝)		
59D区東群	95-928	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(開元通宝)		
59D区東群	89-1501	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(景元通宝)		
59D区東群	89-1502	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(治平元宝)		
59D区東群	89-1505	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(祥符通宝)		
59D区東群	89-1500	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(政和通宝)		
59D区東群	89-1496	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(大観通宝)		
59D区東群	63-735	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(天禧通宝)		
59D区東群	89-1498	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
59D区東群	89-1506	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
59D区東群	89-1497	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
59D区東群	95-929	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
59D区東群	89-1504	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭(熙寧元宝)		
59D区東群	89-1495	59D	SD177	城下町Ⅱ期	銅銭片		
59D区東群	95-472	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓A	礫状	
59D区東群	89-1530	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓B	棒状	
59D区東群	95-478	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59D区東群	95-478	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59D区東群	95-472	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59D区東群	95-468	59D	SD177	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59D区東群	95-478	59D	SD177	城下町Ⅱ期	炉壁		
59D区東群	95-472	59D	SD177	城下町Ⅱ期	炉壁		
59D区東群	89-1530	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓A?	上面凸凸	
59D区東群	95-475	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	95-470	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	95-467	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	95-467	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	95-467	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	95-462	59D	SD177	城下町Ⅱ期	椀型滓B	上面凸凸	
59D区東群	89-1991	60A	SD189	城下町Ⅱ期	流動滓B	礫状	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓A	上面凸凸	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓B	上面凸凸	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓C	上面凸	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓D	上面平	
59D区西群	89-1526	59A	SD199	城下町Ⅱ期	1/2椀型滓D	上面平	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/4椀型滓D	上面平	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	1/8椀型滓D	上面平	
59D区西群	54-1	59A	SK516	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
59D区西群	54-3	59A	SK516	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	扁平	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	炉壁	礫状	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	炉壁	礫状	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	炉壁		
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	炉壁		鋳型か
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期	椀型滓A	上面凸凸	
59D区西群	95-442	59A	SD200	城下町Ⅱ期			
59D区西群	89-1508	59B	SD200	城下町Ⅱ期	銅銭(　　元宝)		
59D区西群	89-1527	59B	SD200	城下町Ⅱ期	炉壁	礫状	
	89-1751	58			1/2椀型滓C	上面凸	
	89-1756	58			1/4椀型滓D	上面平	
	89-1861	58			1/4椀型滓D	上面平	
	89-1956	58			1/8椀型滓D	上面平	
	89-1926	58			含鉄遺物	棒状	
	89-1856	58			含鉄遺物	棒状	
	89-1959	58			含鉄遺物	棒状	
	89-1882	58			含鉄遺物	棒状	
	89-2307	58	Ⅰd層		含鉄遺物	棒状	
	89-2307	58	Ⅰd層		含鉄遺物	棒状	
	89-1886	58			含鉄遺物	扁平	
	89-1811	58			鉄塊系遺物	礫状	
	89-1739	58	SD27	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		M-28
	89-1762	58	SD07	朝日村期	鉄製品(釘)		M-29
	89-1866	58	荒		鉄製品(刀子)		
	89-1726	58			鉄製品(不明)	棒状	
	89-1878	58			鉄製品(不明)	扁平	
	89-1732	58			鉄製品(不明)	扁平	
	89-1724	58			鉄製品(包丁)		89-1728と接合
	89-1730	58			鉄製品(鎌)		M-1
	89-1855	58			流動滓A	棒状	
	89-1875	58	SD19	中世Ⅱ期	流動滓B	礫状	
	89-1876	58	荒		炉壁	扁平	
	89-1749	58	TT6		炉壁	礫状	
	89-1899	58			椀型滓D	上面平	
	25	59A	SK521	中世Ⅰ期	鉄製品(包丁)		M-16
	89-1514	59A	SE77	中世Ⅰ期	銅製品(不明)		
	89-1513	59A	表土		銅製品(棒)		M-19
	89-1515	59A	粗掘		銅銭(元祐通宝)		
	89-1531	59A	SE73	中世Ⅱ期	炉壁		
	73-1	59B	粗掘		1/2椀型滓D	上面平	
	35	59B	粗掘		キセル(雁首)		
	75	59B	粗掘		鉛玉		
	80	59B	SE84	城下町Ⅱ期	鉛製品(不明)	環状	
	52-1	59B	粗掘		含鉄遺物	棒状	
	69-2	59B	粗掘		含鉄遺物	扁平	
	69-1	59B	粗掘		鉄製品(カスガイ)		
	91-1	59B	SE86	中世Ⅱ期	鉄製品(キリ)		M-17
	36	59B	SE86	中世Ⅱ期	鉄製品(リング)		
	52-2	59B	粗掘		鉄製品(刀子)		
	73-2	59B	粗掘		鉄製品(不明)	棒状	
	37	59B	西T		銅製品(不明)		飾りか？
	89-1509	59B	粗掘		銅銭(-銭？)		
	89-1510	59B	SE87	中世Ⅱ期	銅銭(永楽通宝)		
	89-1512-1	59B	SE83	城下町Ⅱ期	銅銭(政和通宝)		
	89-1512-2	59B	SE83	城下町Ⅱ期	銅銭(熙寧元宝)		
	89-1511	59B	SD205	中世Ⅱ期	銅銭(熙寧元宝)		
	18	59C	SE62	城下町Ⅱ期	鉄製品(輪)		
	95C-155	59C	精査		銅製品(キセル雁首)		M-8
	95-156	59C	SD170	中世Ⅱ期	銅製品(キセル吸口)		M-10
	95C-159	59C	SD164	中世Ⅰ期	不明(椀)		M-14、真鍮
	89-1525	59D			1/4椀型滓B	上面凸凸	
	95C-154	59D	SD182	朝日村期	銅製品(ハバキ)		M-7
	90-10	59D			銅製品(刀子柄)		M-5
	89-1499	59D	SD181	中世Ⅰ期	銅銭(永楽通宝)		

群	保存番号	調査区	新遺構名	時期	種別	形状	備考
	89-1525	59D			炉壁	扁平	
	89-1532	59E	SD108	中世Ⅰ期	1/8椀型滓D	上面平	
	95-924	59E	粗		キセル雁首		
	95-909	59E	検出		含鉄遺物	棒状	
	95-915	59E	粗		鉄製品(金具)		
	95-916	59E	粗		鉄製品(飾金具)		
	95-917	59E	粗		鉄製品(釘)		
	95-910	59E	粗掘		鉄製品(刀子)		
	95-919	59E	粗掘		鉄製品(刀子)		
	95-922	59E	粗掘		銅製品？(火箸)		新しい？
	95-921	59E			銅銭(開元通宝)		
	95-927	59E	SD108	中世Ⅰ期	銅銭(不明)		
	63-741	59E	SD108	中世Ⅰ期	銅銭(不明)		
	95-923	59E	粗		銅銭(不明)		3枚融着
	178	59E2	SD108	中世Ⅰ期	1/4椀型滓D	上面平	
	63-209	59E2			含鉄遺物	棒状	
	83-2	59E2	表土		鉄製品(釘)		
	92	59E2			鉄製品(釘)		
	83-1	59E2	表土		鉄製品(刀子柄？)		
	139	59E2	SD108	中世Ⅰ期	鉄製品(不明)	扁平	
	63-209	59E2			流動滓A	扁平	
	63-209	59E2			椀型滓D	上面平	
	89-1520	59F			鉄製品(リング)		M-22
	89-2118	59F	粗掘		銅銭(寛永通宝)		文銭
	63-746	59F	粗掘		銅銭(不明)	扁平	
	89-1563	59G			1/2椀型滓B	上面凸凸	
	89-1555	59G			1/8以下椀型滓A	上面凸凸	
	51-1	59G			1/8椀型滓D	上面平	
	56	59G			鉛玉		
	16	59G			含鉄遺物	棒状	
	6	59G			含鉄遺物	棒状	
	46	59G	SE23	城下町Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
	1	59G			含鉄遺物	棒状	
	3-2	59G			含鉄遺物	棒状	
	3-1	59G			含鉄遺物	棒状	
	51-2	59G			含鉄遺物	棒状	
	6	59G	P548		含鉄遺物	棒状	
	12-2	59G	SD63	城下町Ⅱ期	鉄製品(釘)		M-26
	71-7	59G			鉄製品(釘)		M-27
	5	59G			鉄製品(釘)		
	95E-318	59G	Id層		鉄製品(刀子)		M-13
	39	59G	SE21	朝日村期	鉄製品(刀子)		
	74-3	59G			鉄製品(不明)	三角柱状	
	55	59G			鉄製品(不明)	扁平	
	95C-158	59G	Id層		銅製品(椀)		M-13
	89-1519	59G	粗掘		銅銭(寛永通宝)		
	63-747	59G			銅銭(元豊通宝)		
	89-1518	59G	粗掘		銅銭(洪武通宝)		
	63-299	60A	表土		含鉄遺物	棒状	
	63-300	60A	検出		鉄製品(刀子)		
	63-297	60A	検出Ⅳ		鉄製品(不明)	棒状	
	63-298	60A	検出Ⅳ		鉄製品(不明)	扁平	
	63-301	60B	SD159	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-303	60B	SD152	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-302	60B	SK439	中世Ⅱ期	含鉄遺物	棒状	
	63-305	60B	SD152	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
	63-304	60B	SD152	中世Ⅰ期	含鉄遺物	扁平	
	63-307	60B	SK446	朝日村期	含鉄遺物	扁平	
	63-306	60B	SK446	朝日村期	含鉄遺物	扁平	
	465	60B	SD154	城下町期	鉄製品(留金具)		
	89-2121	60B	検出		銅製品(不明)	扁平	
	89-2129	60B			銅銭(皇宋通宝)		
	63-316	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	鏃状	
	63-329	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-330	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-331	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-332	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-328	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-327	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-309	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-326	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-318	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-325	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-310	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-317	60C	SD76	中世Ⅰ期	含鉄遺物	棒状	
	63-311	60C	SD76	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
	63-315	60C	SD76	中世Ⅰ期	鉄製品(刀子)		
	89-1990	60C	表土		椀型滓D	上面平	
	92-3805	60D	SZ02		鉄刀		
	89-2128	60D	SD222	城下町Ⅱ期	銅銭(皇宋通宝)		
	89-2124	60D	SK569	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
	89-2125-2	60E	北T		銅銭(開元通宝)		
	89-2120	60E	SD214	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		
	89-2126	60E	SD220	城下町Ⅱ期	銅銭(不明)		2枚融着
	89-2125-4	60E	北T		銅銭(不明)		
	89-2125-1	60E	北T		銅銭(不明)		2枚融着
	89-2125-3	60E	北T		銅銭(不明)		2枚融着
	89-2123	60E	SK541	城下町Ⅰ期	銅銭(熙寧元宝)		
	89-1731				鉄製品(刀子)		M-4
	95-879		精査		鉄製品(刀子)		
	95-902		SE57	朝日村期	鉄製品(不明)	皿状	
	63-732		精査		銅銭(嘉祐通宝)		
	63-731		SE56	城下町Ⅱ期	銅銭(寛永通宝)		
	63-734		検出		銅銭(景德元宝)		
	63-733		検出		銅銭(元豊通宝)		
	89-2117				銅銭(天喜通宝)		

表10　朝日西遺跡出土金属関連資料一覧表（4）

三河地域の中世集落

～室遺跡再考～

川井啓介

三河地域南部、矢作古川の下流域に位置し、中世集落が確認されている室遺跡、牛ノ松遺跡、八ツ面北部遺跡を比較検討することにより、遺跡の“地域的理解”のための分析を行った。分析手段は遺物の時期別ｶｳﾝﾄから導き出される遺物組成の読み取りと、歴史的環境からの関連性の解明である。その結果、室遺跡では従来不明であった12世紀の集落の範囲を特定し、14世紀以降集落が均質的屋敷地の集合体へ変質することが明らかとなった。同様に、牛ノ松遺跡は廃絶へ、八ツ面北部遺跡では区画溝の成立へ、という変革期が14世紀に認められた。そして、室遺跡は蘇美御厨を背景として成立した交通の要所に位置する都市的性格を持つ遺跡、牛ノ松遺跡は御厨の中心的集落（屋敷地）であり、八ツ面北部遺跡は一般的農村風景の中に展開する屋敷地であることを指摘した。

1．はじめに

室遺跡は愛知県西尾市室町・駒場町地内に所在し、額田郡幸田町の丘陵から流れ出る広田川と須美川に挟まれた自然堤防上に立地する。遺跡の南側には中世城館の室城が位置し、東側には吉良街道、北側には平坂街道が通る交通の要所である。平成３年度発掘調査が行われた室遺跡の成果についてはすでに報告書として刊行されているため、各時期の詳細はそれに譲るが、中世の遺構については、①地籍図および西尾市教育委員会の発掘調査（松井1993）の成果を用い、未発掘部分を含めた室遺跡に展開する屋敷地範囲の推定復元、②遺物カウントによる組成比較から各屋敷地の特徴や性格付け、を行った。そこで、本稿では遺物の時期別カウントを行うことにより、各屋敷地の遺構の変遷・盛衰を再検討し、さらに、同時期の周辺遺跡との遺物組成の比較検討を行うことにより、矢作川下流域における室遺跡の位置付けを考えてみたい。

2．室遺跡の分析

（1）分析方法

まず、カウントの対象となる遺物の器種分類について、これは報告書掲載のカウントデータとの対比を可能とするため報告書の分類に準ずる。但し、「土師器」鍋・釜については、後述の編年基準となる研究に準じ、通有の名称である“伊勢型鍋・内耳鍋・羽付鍋・羽釜”に変更した。次に遺物の編年については、「山茶椀」「古瀬戸」は藤沢良祐※1、「常滑」は中野晴久※2、土師器鍋・釜は『鍋と甕　そのデザイン』の北村和宏※3・鈴木正貴※4、の研究に拠った。但し、「古瀬戸」「青・白磁」については、まとまった出土量に至っておらず、カウントデータとしての不安定さを減少させるため、報告書同様一器種とした。遺構変遷上の時代区分については、本来であれば、遺物の編年と合致させることが望ましいが、分析目的が遺構を中心とした遺跡の分析である点から、遺物の編年時期とは多少齟齬をきたすが、大枠として12世紀、13世紀、14世紀、15世紀の100年単位を基本とした。具体的にいえば、山茶椀の４・５型式を12世紀、６・７型式を13世紀、８・９型式を14世紀とし、「古瀬戸」は15世紀に、「青・白磁」は13世紀で一括カウントした。

今回実施した時期別カウント法による比較は、総破片数を用いた。具体的な方法は、①各屋敷地出土の器種別総破片数は報告書掲載のものを使用する、②今回カウントする遺物は、「山茶椀」椀（以後山茶椀と表記）の底部、「土師器」鍋・釜（以

※1　藤澤良祐　1990.3『尾呂』瀬戸市教育委員会など
※2　中野晴久　1995.12『常滑焼と中世社会』永原慶二編　小学館など
※3　北村和宏　1996.9「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム
※4　鈴木正貴　1996.9「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム

後鍋釜と表記）の口縁部、「常滑」壺・甕の口縁部とする、③②のカウント対象遺物を時期別にカウントし、山茶椀・「山茶椀」皿（以後小皿と表記）は山茶椀の時期別出土数比率を用い、「土師器」皿（以後土師皿と表記）・鍋釜・「山茶椀」鉢・「常滑」鉢は鍋釜の時期別出土数比率をそれぞれ各屋敷地出土総破片数に案分し、器種ごとの破片数を算定する、というものである。

本来であればすべての破片について時期判断をするべきであるが、破片数カウントの場合、小片をいかに分類するかが問題となり、型式変化があまり顕著でない遺物について、選別することはかえってミスを犯す確立が高くなると思われる。筆者の能力的問題も含め、今回は比較的時期分類が容易と思われる器種に限定した。また、土師皿は、同じ供膳形態の山茶椀で案分をかけるべきであるが、三河地域の特徴として、15世紀代の山茶椀が遺跡から出土する例は極端に少なく、この案分を使用すると、15世紀代土師皿は「0」という結果が生じてしまうため、あえて調理形態をとる鍋釜の案分を使用することとした。最後に、今回のカウントデータには一括性が高く、遺構・遺物ともに時期が特定できるⅡ－1期（対象遺構はSD61、SD46、SE10）の遺物は含まれていない。

（2）カウントによる分析

ここでは室遺跡で検出された遺構の変遷を考える。報告書に掲載した遺構図は、中世を12世紀後半、13世紀前半～15世紀、16世紀以降※5の3時期に区分した。しかし、12世紀代では居住域の存在が推定されたものの、明確な範囲を示しえなかった。また、室遺跡の最盛期である屋敷地が7軒成立していた景観も最終的な姿を示したに過ぎず、必ずしも遺構の変遷をあらわしてはいない（図4）。そこで、時期別遺物の分布により、各屋敷地の盛衰についてみてみたい。それを示したものが図1であり、山茶椀の底部と鍋釜の口縁部の破片数を発掘調査時に設定した5mグリッドごとに示したものである。あわせて、区画溝の位置を示すことにより、屋敷地の範囲も表現してある。

まず山茶椀の分布について、12世紀は調査区A区東半部からC区西半部にその広がりが見られる。なかでも屋敷地Bに相当するエリアでの出土数は分布範囲の中でも抜きん出ており、ここが当時の居住域の中心であった可能性が窺われる。もう1ヶ所C区西端部に見られる出土遺物の多さは、この位置にSD61が掘削されており、そこには該当期の遺物が一括投棄されていたため、その影響で数値が上昇していると考えられる。13世紀にはいると山茶椀の分布は全調査区へ拡散する。12世紀の中心であった屋敷地Bエリアでは、この段階で屋敷地として区画されることにより、12世紀を上回る集中的出土をみせる。この状況は14世紀へも継続し、このエリアが室遺跡に展開する集落の中心であった可能性が高い。また、その他の調査区でも山茶椀に関しては一定量の出土がみられるようになることから、遅くともこの時代のいずれかの段階で居住域として成立していたと思われる。この傾向は14世紀においても読み取ることができる。しかし、屋敷地Bへの遺物の集中度は明らかに低下しており、山茶椀の生産量との関係も考慮に入れる必要があるとは思われるが、屋敷地B中心の集落から、均質化した屋敷地からなる集落へ変化してゆくと考えられる。但し、屋敷地の成立順はこの分布からは読み取りがたい。

この変化を追認するには15世紀の山茶椀の分布を検証すればよいのだが、当該期の山茶椀については室遺跡ではほとんど出土を見ないため不可能である。そこで、15世紀の供膳形態の遺物を含む古瀬戸の分布からこの点を類推してみたい。

室遺跡の古瀬戸の分布は図1に示したとおりである。一見すると屋敷地Bに集中しているようであるが、たとえば屋敷地D・Gでの出土数は屋敷地Bと遜色のない量が出土している。また、調査区全域で古瀬戸は出土しており、先に述べた均質化の動きがより一層進展していることが確認できる。これに加えて注目すべきは、調査区D区における遺物出土量の多さである。発掘調査時には明確な屋敷地を検出することはできな

※5　16世紀以降、屋敷地は廃絶し、火葬施設が展開する。

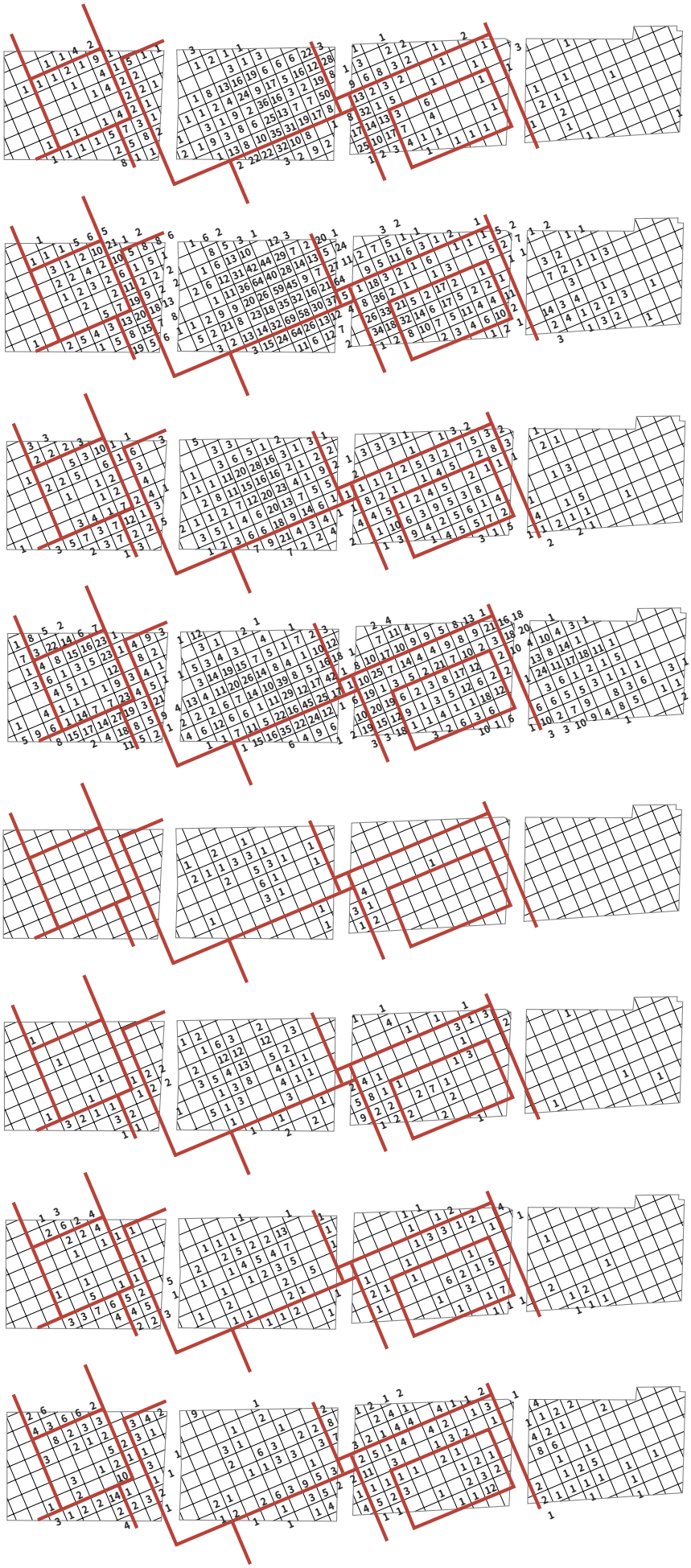


図１　グリッド別出土遺物分布図

かったが、このエリアにも居住域が存在した可能性が高いと思われる。

では、以上の観点を鍋釜の出土状況から検証するとどうであろうか。12世紀の遺物の分布は、調査区Ｂ区の中心およびＳＤ61の位置するエリアに集中しており、その他からは出土をみない。これは山茶椀よりも出土範囲が限定されており、調査区Ｂ区で検出されたＳＥ10の存在からも、やはり当時の居住域は屋敷地Ｂ周辺であることが追認される。そう考えた場合、居住域の範囲は東西約100m、南北50m以上となる。13世紀では、12世紀に比して遺物の出土は調査区全域へと広がる傾向が見られる。そして、山茶椀同様、この段階で成立した屋敷地Ｂにその出土が集中している。この外の屋敷地については、屋敷地Ａ以外である程度の出土を見ており、この段階での屋敷地の成立を想定しうる。但し、報告書の所見に基づき、区画溝を伴う屋敷地は屋敷地Ｂ・Ｃであり、その他の屋敷地については、区画溝は掘削されていないがある程度のまとまりを持った居住域という景観を呈していたと考えたい。

この屋敷地Ｂを中心とする集落のあり方は、14世紀に入ると変化していることが読み取れる。14世紀に入っても、遺物の出土が集中するエリアは屋敷地Ｂの中心部分である。しかし、その集中の程度は前代と比較すると極端に低下しており、やはり分散化へ向かっての動きが認められる。さらにこの段階では、屋敷地Ａの北側に同様の小区画が成立している可能性を読み取ることができる※6。

15世紀では14世紀から始まった遺物の分散化、すなわち屋敷地の均質化の動きがさらに顕著になっている。特に注目されるのは、それまで連綿と集落の中心を成してきた屋敷地Ｂに遺物の集中が見られなくなる点である。この段階で遺物が集中するエリアは区画溝が位置するところであり、遺構の最終段階を表していると思われる。これに対し、先に見た古瀬戸の分布はこの段階も屋敷地Ｂに遺物の集中ポイントが残っている。この相違は今回の時代区分の問題と思われ、当然室遺跡出土の古瀬戸には14世紀に属する遺物も含まれており、屋敷地Ｂに見られる集中ポイントはこの遺物が出土しているエリアであると思われる。最後に調査区Ｄ区に想定した居住域についてであるが、鍋釜の分布からもその可能性が高いことが推察される。この調査区では、12世紀の溝（ＳＤ46）埋没後、井戸が１基構築されており、居住域であるとすればその存在も理解できる。但し、この居住域に区画溝は伴わず、他の屋敷地とは性格を異にする空間であると思われる。

以上、時期別遺物の分布から分析した遺構変遷における新知見をまとめておくと、①12世紀の居住域は調査区Ｂ区を中心としたエリアであること、②室遺跡の集落は、12世紀の成立期、13世紀の屋敷地Ｂを中心とする集落の誕生、そして14世紀均質化への動きが始まり、15世紀は均質な屋敷地の集合体へと変化すること、③従来想定していなかった調査区Ｄ区にも居住域が存在し、この居住域は区画溝を持つ他の屋敷地と異なる性格のエリアであること、をあげることができる。

（３）遺物組成による分析

ここでは遺物組成の側面から、遺構の変遷について考察を加える。分析方法は、器種別にカウントしたデータを用途によりグループ化し、比較検討を行う。今回用いた分類は、供膳形態をとる山茶椀・小皿・土師皿を供膳具、調理形態と考えられる鍋釜および「山茶椀」鉢、「常滑」鉢を調理具、貯蔵形態である「常滑」壺・甕を貯蔵具とした。また、古瀬戸、青・白磁については時期別カウント同様独立したグループという扱いをしている。この方法で分類した出土数を示したものが図３、比率を表示したものが図２である。分析にあたり、前述の遺物分布による分析及び報告書の遺構変遷から次のように仮定した。まず、室遺跡に中世の居住域が成立するのは12世紀後半であり、この頃遺跡が立地する微高地の中世における開発が開始される。そこで、図２の《12世紀》室遺跡全体を開発期における遺物組成パターンとする。すなわち、供膳具80%、調理具７%、貯蔵具13%という割合が、開発が行わ

※６　従来の屋敷地Ａの内部を分割して形成された可能性が高い。ただし、溝で区画はされているが、居住域との確定はさけたい。

※７このエリアには鉄滓の充填された土坑が検出されており、鍛冶関連の空間も想定し得る。

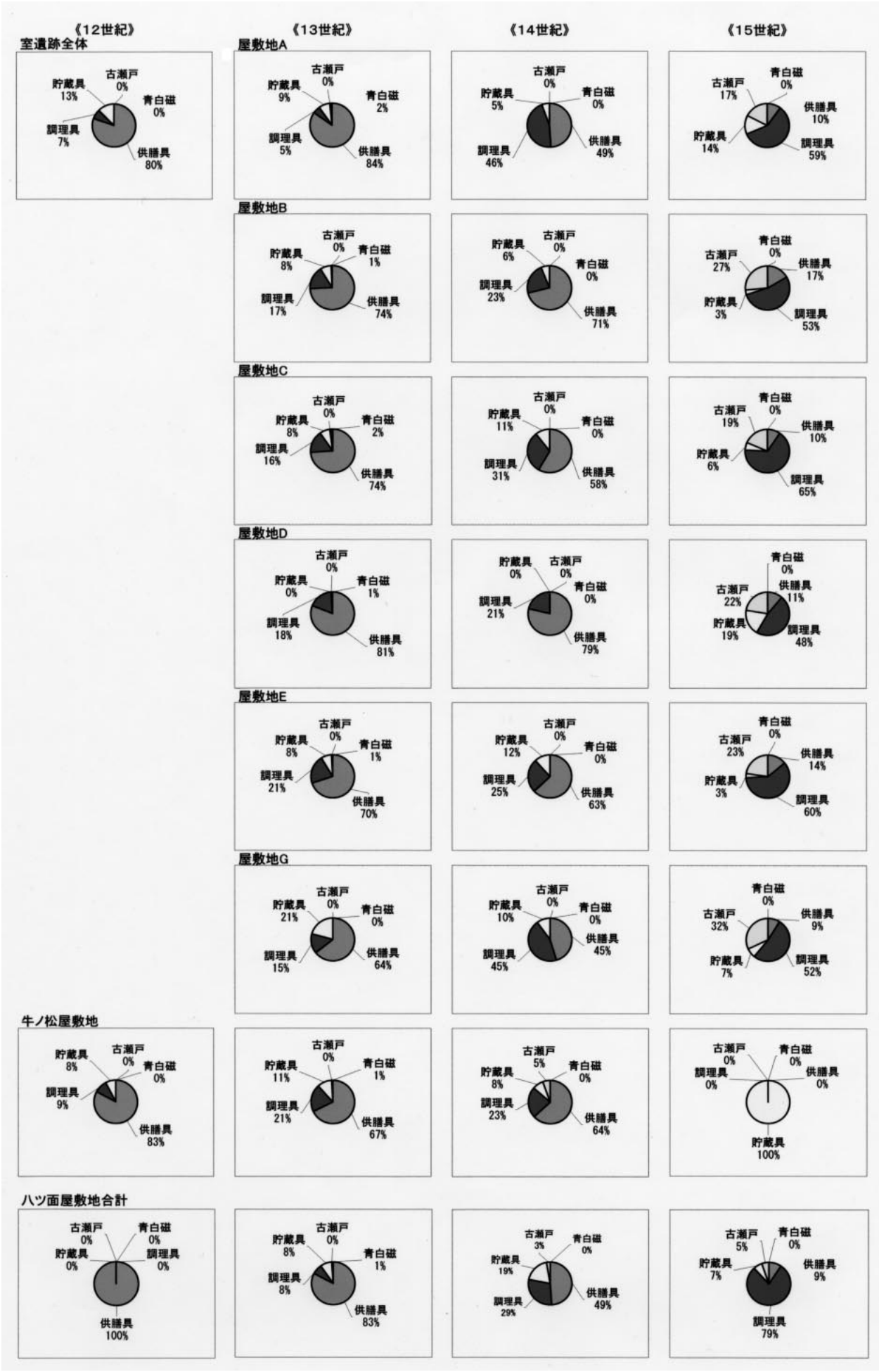


図２　遺跡・屋敷地別組成図

れ、集落もしくは屋敷地が成立する段階での遺物の使用量と考えてみる。同様に、１３世紀では屋敷地Ｂが確実に成立しており、この屋敷地Ｂの遺物組成を屋敷地成立後安定期に入った遺物組成パターンと考えてみる。この２つの比率と各屋敷地の比率を比較した場合にどのようなことが読み取れるかを問題とする。尚、発掘調査で全域を検出できた屋敷地はなく、検出面積でのカウントデータの修正を行う必要が考えられるが、今回はあえて修正を加えずに検討している。

12 世紀は室遺跡における開発の時代である。ＳＤ61と広田川の氾濫原までの間を居住域とし集落が形成され始め、13 世紀にはいると屋敷地Ｂ中心の集落となる。他の屋敷地では、まず屋敷地Ｃが調理具の割合がわずか１％異なる点を除けば、安定期パターンと同じである。これは屋敷地Ｃがこの段階で成立していた可能性が高いことを示唆している。同様に、屋敷地Ｅも若干調理具が多く、その分供膳具が減少してはいるが、そのエリアが居住域であったと推定される。これ以外の３屋敷地は、屋敷地Ｄは貯蔵具の出土をみないため詳細は明らかにしえない。屋敷地Ｇも３用途ともモデルパターンと大きく割合を異にしており、開発期、安定期どちらとも判断しかねる。あえて類推するならば、貯蔵具が約２割を占める点において、当時は開発期に近い様相を呈していたのではないかと考えたい。屋敷地Ａについては、小区画であること、区画内部の遺構が希薄である点などその性格の判断に窮するが、組成の面からもこの屋敷地は他の屋敷地とは異なる空間であり、居住域であるか否かという点からの検討が必要とされる。

14 世紀の特徴は、供膳具の減少、調理具の増加であり、６屋敷地すべて供膳具の減少分が調理具の割合を増加させていると言っても過言ではないであろう。この点に対する明確な答えは持ち合わせていないが、ひとつには山茶椀の生産量が前代をピークに減少することが影響しているとおもわるれ。このように考えた場合、屋敷地Ｂはこの時代も前代同様の姿を保っていたと思われる。これに対し、屋敷地Ｃ・Ｅではやや変化がみられ、貯蔵具の比率増加は開発期パターンへの回帰と考えられ、これは次代への再開発の萌芽と思われる。同様に屋敷地Ｇも開発・変化は低調になりつつあるが、まだ安定期には入りきっていない様相と考えたい。屋敷地Ａの比率は他に類例を見ず、今後の検討課題である。屋敷地Ｄは前代同様、検出面積の狭小さの影響を受けている可能性が高く、比率がほとんど変化していない点を重視すれば、発掘調査において偶然貯蔵具が出土せず、供膳具の一部が仮に貯蔵具へ移行したとすれば安定期のモデルパターンに一致する。このように考えると、屋敷地Ｄは13・14 世紀ともに安定期であり、屋敷地Ｂ同様12 世紀の開発期に屋敷地の萌芽が見られ、13 世紀には単独の屋敷地として成立していた可能性も考えられるようになる。

15 世紀にはいると、遺物組成の様相は大きく異なってくる。その第一が古瀬戸の登場である。古瀬戸が後期段階に入りその生産量が増大するとともに、各遺跡である程度出土するようになる。その用途は豊富な器種により多岐にわたるが、室遺跡においては深皿を中心とした供膳形態？をとるものが多い。第二に組成変化最大の原因である山茶椀・小皿の消滅である。この段階に入ると三河地域においては山茶椀の出土がほとんど見られなくなり、遺物の器種構成も大きく変化する。この影響は室遺跡における遺物組成でも確認され、従来７割前後を占めていた供膳具の割合が大きく減少するのはそのためである。それにかわり調理具の比率が上昇する。本来調理具とした器種のうち大半を占めるのは鍋釜であるのだが、この遺物は器壁が薄く壊れやすいため、破片数に換算すると必然的に多くを占めることになる。14 世紀まで比率が抑えられていたのは、それを上回る山茶椀の出土をみていたためである。その上でこの時代の組成を考えた場合、２つにグループ化することができる。まず、屋敷地Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｇは調理具が５～６割を占め、貯蔵具は１割に満たない。そして、供膳具と古瀬戸をあわせると約４割という比率を示す。これは貯蔵具の比率の低さから、安定期に近い

と思われ、14世紀に屋敷地C・E・Gが開発（変革）期とした点と一致する。これは、屋敷地Bの優位性が薄れ、均質化に向かっていった結果であると思われる。これに対し屋敷地A・Dは貯蔵具の占める比率が高く、あえて言及すれば開発期パターンに類似していると思われる。

以上、遺物の分布および組成の両側面からの分析の結果、室遺跡を考える場合屋敷地Bを中心とする集落が成立する12世紀、均質化に向けて集落が変革を始める14世紀に画期を設定することができることが明らかとなった。今後この画期の成因と中世集落での普遍的なありかたであるか等の検討が必要とされる。そのためには、より多くの集落のデータを集積し比較検討しながら各種のモデルパターンの確立が求められる。

3．室遺跡の位置付け
～地域における遺跡の理解～

（1）対象遺跡の概要

前項までの遺物カウントを中心とした室遺跡内部の分析に次いで、本稿は周辺遺跡との比較検討を行い、各遺跡の特徴を明らかにすることにより、矢作川下流域における室遺跡の位置付けを考える。比較方法は出土遺物のカウントに基づく組成比率を基本とし、補足で室遺跡を取り巻く歴史的環境を踏まえて考察を加える。この分析の比較対象とする遺跡は以下の２遺跡である。（第５・６図参照）

牛ノ松遺跡：室遺跡から東へ約３km、額田郡幸田町大字須美字牛ノ松に所在し、室遺跡の南東を流れる須美川上流左岸の中位段丘上に立地する旧石器から近世までの遺跡である。今回遺物カウントを行った遺構は、区画溝から県下４例目となる宋三彩洗が出土した屋敷地である。

八ツ面山北部遺跡：室遺跡の北西約2.5km、西尾市北部の八ツ面町・中原町に所在し、矢作川と矢作古川の分岐点にあたる碧海台地の縁辺部に立地する。西尾市教育委員会により平成２～４年度に発掘調査が行われ、７世紀前葉から16世紀までの遺跡であることが判明している。今回遺物カウントを行った遺構は、平成３年度に行われた発掘調査で確認された中世の屋敷地Ⅰ～Ⅲである。

（2）遺物組成による比較

まず牛ノ松遺跡の遺構変遷を概観すると、集落が形成されるのは12世紀前葉から中葉であり、この段階では区画溝は掘削されていない。その後12世紀後葉から13世紀前葉に区画溝が地形に沿って掘削され屋敷地が成立する。この区画溝は13世紀末頃から土器廃棄が行われ、埋没していく。これを前提に、室遺跡のモデルパターンと照らし合わせてみると、まず12世紀の組成は、牛ノ松遺跡における集落形成期の組成といえる。同じ開発期パターンを室遺跡のそれと比較した場合、２データの相違点は、貯蔵具の占める割合に現れている。この差を生じる原因は、開発規模の大小にあると思われる。すなわち、室遺跡の12世紀における開発は方一町を想定しうる大規模開発であるのに対し、牛ノ松遺跡の開発は遺跡の画期となる規模ではなかったと思われる。事実、牛ノ松遺跡で区画溝が掘削される13世紀は、貯蔵具の比率が増加し、その組成は区画溝が掘削されたと考えられる室遺跡屋敷地Eの14世紀のそれに類似している。さらに、牛ノ松遺跡14世紀の組成は古瀬戸を供膳具に加えた場合、室遺跡屋敷地B 14世紀の組成とほぼ一致し、室遺跡は均質化への変革期であったが、牛ノ松遺跡の場合は廃絶という変革の様子を示していると思われる。そして、牛ノ松遺跡15世紀は貯蔵具のみであるが、これは集落が14世紀で廃絶され、耕地化してしまったことを如実にあらわしている。この考えに基づけば、13世紀の室遺跡屋敷地Aのエリアは未だ区画溝は掘削されず、屋敷地としては成立を見ないが、空閑地ではなく、居住域として設定されつつあったと考えることができる。但し、貯蔵具の比率については、一概に何％であるから開発期、安定期と判断できるものではなく、遺構の変遷等を考え合わせた上で、どの段階がその遺跡にとっての画期となっているかで数値は当然変化するものであり、遺跡内での推移を問題にするべきであって、一律で考えるべきではない。

次に八ツ面北部遺跡との比較であるが、この遺跡の各屋敷地はカウントデータ総数が少なく、単独で比較した場合誤差を生じる可能性が高いため今回は３屋敷地合計で組成を示すこととする。

報告書によれば、９世紀後半から12世紀にかけての集落の存在が推定されており、その後13世紀以降に今回分析を行った屋敷地等が成立するとされる。これを遺物組成からみると、12世紀は出土する遺物が供膳具に限定され、人々の活動は推定されるが居住域とは判断し難い。これが13世紀にはいると、遺物組成は牛ノ松遺跡の12世紀とほぼ同じ比率を示すようになる。このことは、八ツ面北部遺跡に牛ノ松遺跡同様の小規模開発が行われ、居住域としての明確な空間が設定されたことを示している。そして、遺物組成は14世紀で貯蔵具の比率が大幅に上昇する変化をみせ、この段階で区画溝が掘削され、個別の屋敷地が成立するという遺跡の画期に相当する変革が起こっていると推定される。

以上遺物組成という総体としての遺物のあり方から３遺跡の変遷を考えた場合、いずれの遺跡も14世紀を契機としてその姿を変容させることが明らかとなった。次に視点を変えて個々の遺物のあり方から遺跡の性格を検討してみたい※8。

第一は出土（所有）が階層性を表現する遺物である。例えば牛ノ松遺跡の屋敷地から出土した宋三彩洗であり、室遺跡の屋敷地Ｂから出土した景徳鎮窯の白磁花卉（かき）唐草文小盤、青磁大盤、白磁壺である。発掘調査において中世集落から数％の貿易陶磁が出土することは珍しくはない。しかし、それは青・白磁の椀や皿が中心であるため、前述のようないわゆる優品と呼ばれる遺物が地方で出土する場合、それは特定階層以上の所有者像を浮かび上がらせる事ができる。また室遺跡では、出土する青・白磁の大半が屋敷地Ｂから出土しているということも忘れてはならない点である。

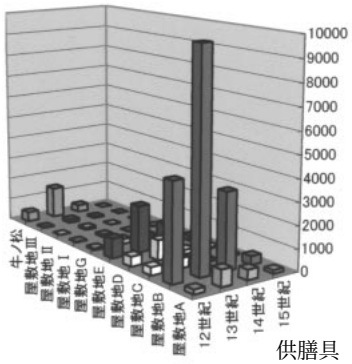
第二に、用途の特殊性が指摘されている土師皿の出土状況である。土師皿は非日常的な饗宴・儀礼に用いられる一過性の強い器種だとされる。そのため、遺跡内から多量の土師皿が出土するということは、富裕な居住者が存在し、饗宴・儀礼が繰り返し行われたことを想像させる。この観点から３遺跡をみてみると、最も多くの土師皿が出土している遺跡は牛ノ松遺跡である。報告書の口縁部計測データによれば、分析対象とした屋敷地の区画溝のＳＤ01では23％を占めるとされる。これを総破片に換算してみると27.5％となる。これに対し、室遺跡では全出土破片の6.1％、八ツ面北部遺跡では３屋敷地の合計で3.4％と圧倒的な差が生じている※9。尾張地域ではあるが同時期の遺跡における土師皿の割合を比較してみると、朝日西遺跡では50％と高い比率を示すが、土田遺跡第２次調査、天白元屋敷遺跡第３次調査で５％以下、名古屋城三の丸遺跡第6・7次調査で20％であり、牛ノ松遺跡の出土割合ははかなり高い。貿易陶磁のあり方では類似性をもつ室遺跡と牛ノ松遺跡は、この点では性格を異にする。八ツ面北部遺跡は、貿易陶磁・土師皿の出土ともに２遺跡とは様相を異にしており、土師皿の出土割合が数％であることが一般的であれば、貿易陶磁のあり方とあわせ、農村的様相を示す例と考えることができるのではなかろうか。（図３参照）

最後の要素として、遺跡からの遺物の出土量を比較してみる。この比較方法は、１㎡単位の遺物出土量を比較するものである。近年の研究では中世における都市からは１㎡あたり10点を超える遺物が出土するとされ、これに対し農村では一桁またはそれ以下の数字（１㎡調査して１破片出土するか、しないか）とされる。つまり、10点をこえれば“都市”とする。室遺跡の場合、６屋敷地の全出土破片数を全屋敷地面積で割ると、１㎡で9.7点となり、ほぼ10点に近くなる。これに対し牛ノ松遺跡は今回カウントした遺物数を屋敷地の検出された面積で割ると4.72、八ツ面北部遺跡は３屋敷地の合計破片数を３屋敷地の面積で割ると0.67という数値となる。先に述べた都市と農村の基準となる数値をそのまま当てはめるとすれば、室遺跡は鎌倉・京都並みの

※８　この点については、参考文献の遠藤論文（1999）、尾野論文（1996）に詳しい。

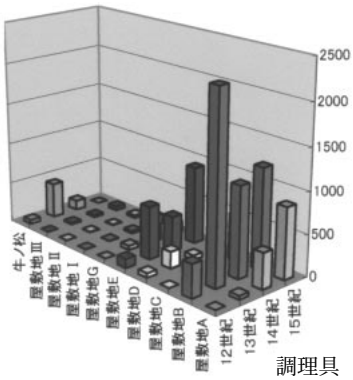
※９　八ツ面北部遺跡の屋敷地Ⅲ南東のＳＫ12からは、完器70個体を含む401破片の土師皿が一括出土しており、空間の性格を含め、今後の検討を要する。

《１２世紀》	供膳具				調理具						貯蔵具	古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶椀	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶椀鉢	常滑鉢	常滑壺甕		
屋敷地A	209	192	17	0	0	0	0	0	0	0	25	0	0
屋敷地B	4342	3922	295	125	398	348	0	0	32	18	261	0	0
屋敷地C	361	343	18	0	0	0	0	0	0	0	112	0	0
屋敷地D	444	405	26	13	53	47	0	0	4	2	92	0	0
屋敷地E	869	800	44	25	108	94	0	0	7	7	474	0	0
屋敷地G	77	60	8	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0
室全体	6302	5722	408	163	559	489	0	0	43	27	982	0	0
牛ノ松	436	352	37	47	50	39	0	0	11	0	41	0	0
八ツ面全体	77	65	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地Ⅰ	33	28	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地Ⅱ	11	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地Ⅲ	33	28	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



供膳具

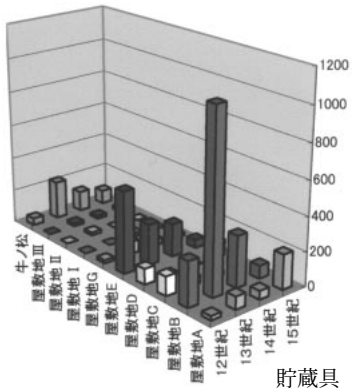
《１３世紀》	供膳具				調理具						貯蔵具	古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶椀	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶椀鉢	常滑鉢	常滑壺甕		
屋敷地A	754	686	60	8	45	39	0	0	3	3	76	0	14
屋敷地B	9738	8399	633	706	2259	1973	0	0	182	104	1045	0	112
屋敷地C	442	407	21	14	98	87	0	0	5	6	45	0	13
屋敷地D	899	799	52	48	203	180	0	0	14	9	0	0	11
屋敷地E	2092	1844	102	146	633	540	12	0	38	43	237	0	26
屋敷地G	224	190	25	9	51	47	0	0	2	2	72	0	0
室全体	14149	12325	893	931	3289	2866	12	0	244	167	1475	0	176
牛ノ松	1399	850	89	460	425	385	0	0	38	2	223	0	18
八ツ面全体	345	293	49	2	34	14	0	0	18	0	35	0	5
屋敷地Ⅰ	98	83	14	1	5	5	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地Ⅱ	94	80	13	1	9	5	0	0	4	0	18	0	2
屋敷地Ⅲ	153	130	22	1	20	5	0	0	15	0	18	0	3



調理具

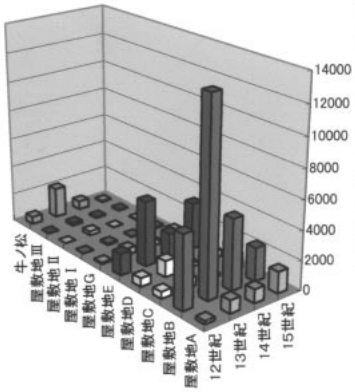
《１４世紀》	供膳具				調理具						貯蔵具	古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶椀	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶椀鉢	常滑鉢	常滑壺甕		
屋敷地A	457	353	31	73	427	273	98	0	30	26	51	0	0
屋敷地B	3435	2878	217	340	1088	834	116	0	88	50	299	0	0
屋敷地C	122	107	6	9	65	58	0	0	3	4	22	0	0
屋敷地D	195	171	11	13	53	47	0	0	4	2	0	0	0
屋敷地E	1041	896	49	96	417	317	47	0	25	28	190	0	0
屋敷地G	163	120	16	27	160	129	17	0	7	7	36	0	0
室全体	163	4525	330	558	2210	1658	278	0	157	117	598	0	0
牛ノ松	324	166	17	141	118	69	49	0	0	0	41	28	0
八ツ面全体	90	71	12	6	54	47	5	0	0	1	35	5	0
屋敷地Ⅰ	14	9	2	3	25	19	5	0	0	1	18	0	0
屋敷地Ⅱ	19	15	3	1	5	5	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地Ⅲ	57	46	8	3	24	24	0	0	0	0	18	5	0

《１５世紀》	供膳具				調理具						貯蔵具	古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶椀	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶椀鉢	常滑鉢	常滑壺甕		
屋敷地A	146	0	0	146	852	0	156	585	59	52	202	253	0
屋敷地B	378	0	0	378	1209	0	190	865	98	56	79	602	0
屋敷地C	78	0	0	78	541	0	39	444	26	32	43	152	0
屋敷地D	53	0	0	53	225	0	9	190	16	10	92	107	0
屋敷地E	215	0	0	215	928	0	129	680	56	63	47	352	0
屋敷地G	22	0	0	22	130	0	26	94	5	5	18	80	0
室全体	892	0	0	892	3885	0	549	2858	260	218	479	1546	0
牛ノ松	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	81	0	0
八ツ面全体	29	0	0	24	206	0	47	156	0	3	17	14	0
屋敷地Ⅰ	15	0	0	15	125	0	5	118	0	2	0	0	0
屋敷地Ⅱ	4	0	0	4	33	0	14	19	0	0	0	9	0
屋敷地Ⅲ	6	0	0	6	48	0	28	19	0	1	17	5	0

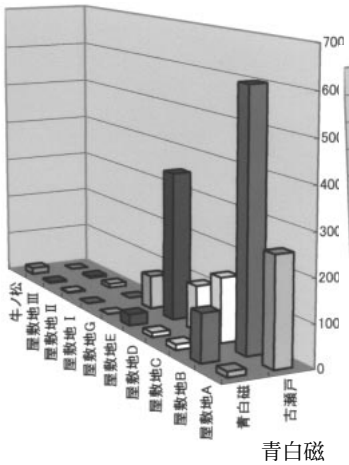


貯蔵具

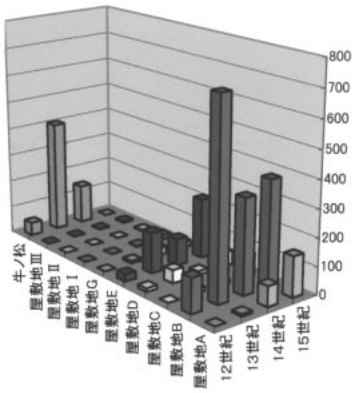
※　室・八ツ面北部遺跡について、該当データを合計した数値と全体と表記したデータの相違は案分により生じるもので、間違いではない。



総出土数



青白磁



土師皿

図３　器種別出土破片数一覧

遺物消費が行われる都市であり、他の２遺跡は農村風景が展開していたこととなる。但し、牛ノ松遺跡は八ツ面北部遺跡の７倍もの遺物消費が行われており、八ツ面北部遺跡と牛ノ松遺跡の屋敷地を同等に扱うことは難しく、牛ノ松遺跡は地域の中心程度の都市性を持ち合わせていたと考えたい。

以上、貿易陶磁で室遺跡と牛ノ松遺跡、土師皿で室遺跡と八ツ面北部遺跡、都市性では牛ノ松遺跡と八ツ面北部遺跡に類似性が認められ、その組合せから、室・牛ノ松遺跡の特殊性、八ツ面北部遺跡の一般性（農村的あり方）が明らかとなった。次に問題となるのは、異なった性格の遺跡を成立させる要因であり、それらが構成する景観である。

（３）歴史的背景からの分析

ここでは、前項までの分析で特殊性が明らかとなった室・牛ノ松両遺跡について、その性格形成過程を歴史的背景から考えてみたい。

室遺跡と牛ノ松遺跡は、現在は異なった行政区分に属しているが、当時は共に幡豆郡に属していた。このうち歴史的背景を文献史料から比較的明らかにしうるのは牛ノ松遺跡である。牛ノ松遺跡が所在する須美地域は、『伊勢大神宮神領注文』※10によれば、往古神領であり、保延元年(1140)に再度寄進され久安元年(1145)に宣旨をうけた蘇美御厨に比定されている。また、牛ノ松遺跡の東には『三河国内神明名帳』※11に記載される蘇美天神が鎮座しており、この一帯の開発は平安時代中期以降にはじまった可能性も考えられている。蘇美御厨以外で幡豆郡に存在し、現在比定が可能な御厨としては、饗庭（あえば）御厨、角平（つのひら）御厨を挙げることができる（第７図参照）。この３御厨の範囲を推定させる史料はわずかだが残されており、饗庭・角平御厨では『中右記』長承元年11月４日条に「参河国饗庭御厨内、字角平寺島郷事、伴所代々国司奉免、永久三年被奉免宣旨了」とあり、矢崎川流域が御厨域に該当し、蘇美御厨に関してはやや時代は下がるが、元弘三年８月９日の木戸宝寿丸宛後醍醐天皇綸旨に「須美村内家武□□□□伝可令知行」※12とあり、須美川流域が当時「須美」として捉えられていた範囲であったと考えられる。この御厨の立地を荘園研究における一般論にあてはめてみると（大山1996）、矢作川下流域に展開する荘園は平野部タイプと周縁山間部タイプの組み合わせで考えることができる。現在の西尾市・幡豆郡を荘域とした吉良荘は、郡の中心を南流する矢作古川により形成された沖積平野を支配対象としていたであろう。これに対し、蘇美御厨は郡レベルの河川に注ぐより小さな河川、荘郷レベルの河川に相当する須美川が形成する氾濫平野に形成された耕地を荘域とし、幡豆山塊の小谷に成立した御厨として独立した世界を形作っていたと考えられる。そしてこの小谷を支配管理する集落は、谷の開口部の微高地に形成される事が多く、自らの背後に展開する湿潤地を開発維持していたと思われる。したがって牛ノ松遺跡は、その小谷の最奥、もしくは眼前に広がる耕地を意識して成立した集落とすることができる。そして、蘇美御厨を考えた場合、この地は往古以来須美の中心地であり、おそらく最初に開発が行われた地であると想像され、このことが一般農村以上の遺物の出土量を見、宋三彩や土師皿の大量出土という条件を作り上げた要因と言えるのではなかろうか。また、14世紀に牛ノ松遺跡が廃絶する理由は、主要な谷部の開発が終了し、次なる開発地を求めた結果、須美川が合流する広田川、もしくは矢作古川流域の未開地へと移住したためであると考えられる。その移住先は現在の集落域であり、室遺跡周辺である可能性が高い。

その室遺跡は、蘇美御厨が形成された小谷の開口部にあたり、周囲には広田川の氾濫平野が広がっている。この地が御厨の範囲であるか否かは不明であるが、遺跡東の家武村（現家武町）が御厨であったことは先述のとおりであり、まったく無関係であったとは考えにくい。海上交通を利用して三河に展開したと考えられる神宮領の西三河地域で最も内陸に位置する蘇美御厨の開口部にあたり、広田川・矢作古川に隣接するという立地は、小谷の開口部に位置し、かつて津が存在したといわれる角平御厨のそれに類似

※10 『鎌倉遺文』第２巻第614号
※11 『続群書類従』第３輯上
※12 『鎌倉遺文』第41巻第3254号

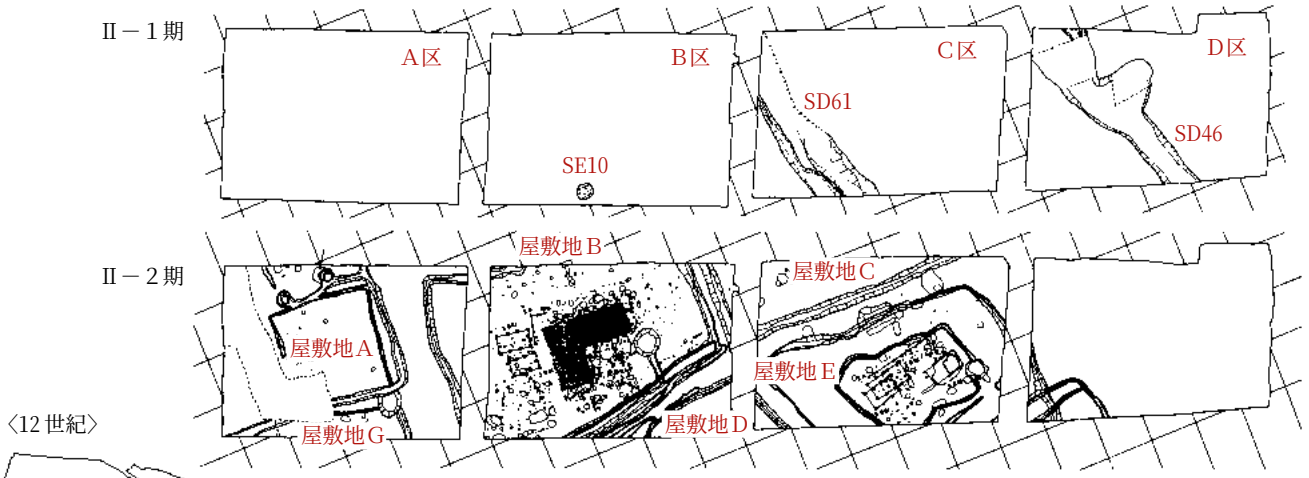


図4　室遺跡遺構変遷図（1：1,500）

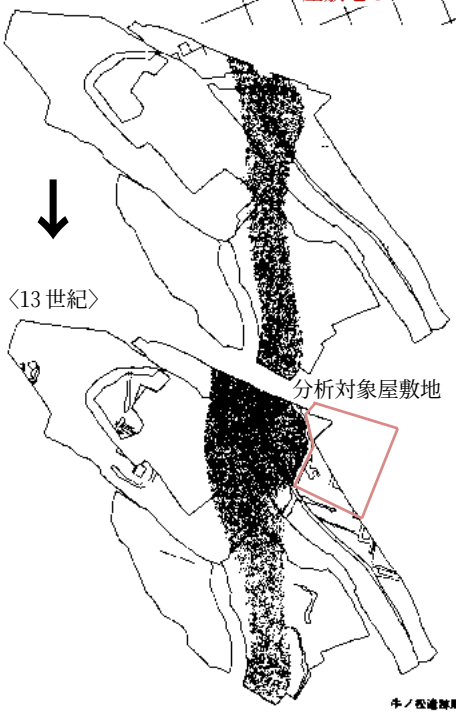


図5　牛ノ松遺跡遺構変遷図（1：3000）

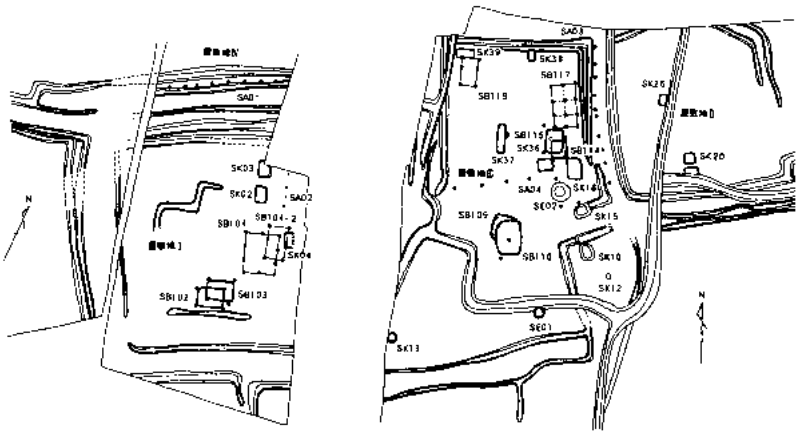


図6　八ツ面北部遺跡屋敷地（1：1,000）

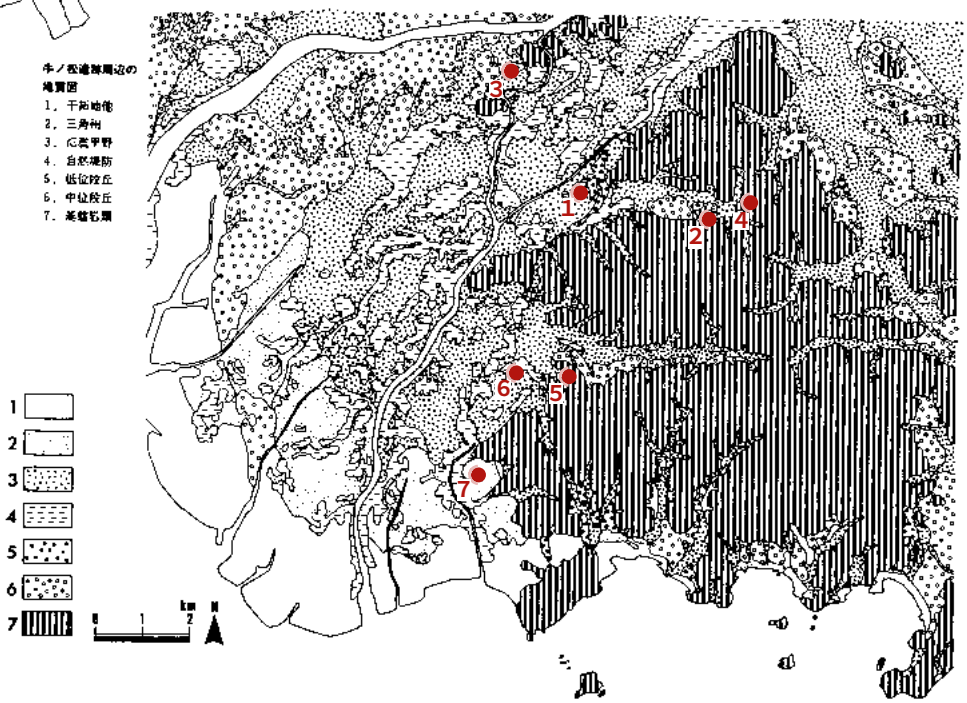


図7　関連遺跡等位置図

1. 室遺跡　2. 牛ノ松遺跡　3. 八ツ面北部遺跡　4. 蘇美天神
5. 角平御厨　6. 寺嶋　7. 饗庭御厨

する。矢作古川を利用した舟運に関しては文献・考古両側面から分析がおこなわれ、その利用頻度はわれわれの想像を越えるものがあると思われる。たとえば、『中右記』永久二年(1114)二月別記三日条※13には「就中遠江尾張参河海賊強盗多以出来、奪取供祭物甚不便也」とあり、仮に蘇美御厨の供祭米が海路伊勢へ運ばれたとすれば、室遺跡周辺から広田川、矢作川、三河湾へというルートが想定できる。また、「室」という地名は“無漏（むろ）”から派生したもので、いわゆる「公界」の地であり、港であるとの指摘もある。室遺跡が港であったという点はさておき、交通の要所（港・泊・津・宿など）であったとすれば、鎌倉・京都に匹敵する量の遺物が出土することはたやすく理解できる。そして、その背景に蘇美御厨が存在していたとすれば、14世紀以降御厨の開発対象が移動し、御厨そのもののあり方が変化すると共に、吉良氏の勢力拡大に伴い、須美保政所職が吉良満義から今川氏兼に与えられるという支配の変化に呼応するように、室遺跡の遺構のあり方も14世紀を境として変化し、出土量も減少することと一致を見る。この２遺跡を取り巻いていたものが、八ツ面北部遺跡で示された農村的屋敷地であり、この３遺跡が有機的に関連しあいながら、中世矢作古川下流域の景観を作り出していたのである。

４．まとめにかえて

近年全国各地で行われる発掘調査により、中世集落のデータも数多く蓄積され、三河地域においても、多数遺跡が調査・報告されている。但し、そのデータは、遺跡ごとの分析であり、地域的な観点からの分析はほとんど行われていない。今回室遺跡の再検討を行う上で中心としたのはその視点であった。室遺跡内部では、時期別遺物カウントを行うことで、12世紀の集落範囲を特定し、14世紀以降集落のあり方が、均質化に向けて変化してゆくことを明らかにした。また、八ツ面北部遺跡、牛ノ松遺跡との遺物カウントデータの比較により、それぞれの遺跡の特徴を抽出し、その上で、室遺跡の地域における性格分析を試み、室遺跡は蘇美御厨を背景として成立した都市的性格を持つ遺跡、牛ノ松遺跡は御厨の中心的集落（屋敷地）、八ツ面北部遺跡にはあまり言及はできなかったが、一般的農村風景の中に展開する屋敷地で、区画溝の掘削が14世紀である可能性を指摘した。カウントデータの読み取りは、報告書・発掘調査時の所見とのすりあわせになってしまったという反省があるものの、試案にはなりえたのではないかと考えている。但し、今回行った分析方法は、データの蓄積が必要であり、より多くの遺跡において実施し、比較検討することにより、より確かなものにすることができるであろう。そして、屋敷地Ａ・Ｇにみられる不安定な組成を示す空間をどのように理解するかという点も解明可能となるであろう。また荘園の一部とされている知立市腰前・小針遺跡のデータと牛ノ松遺跡のデータを比較することによりその違いを明らかにしうるであろうし、類似点を指摘することが可能となる。いずれにせよ、今後より一層のデータ蓄積に伴い、「地域の中での遺跡」を考えてゆくことが、中世の景観復元を可能にすると考える。

参考文献

遠藤才文　1999.3「中世尾張の村と市町」『尾張平野を語る』一宮市博物館
鋤柄俊夫　1999.2『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社
大山喬平編　1996.9『中世荘園の世界　東寺領丹波国大山荘』思文閣出版
綿貫友子　1993「尾張・参河と中世海運」『知多半島の歴史と現在　NO5』日本福祉大学知多半島総合研究所
尾野善裕　1996.12「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」『中近世土器の基礎研究ＸＩ』日本中世土器研究会
網野善彦ほか　1991.12『伊勢と熊野の海　海と列島文化8』小学館
網野善彦　1998.9『海民と日本社会』新人物往来社
仁木宏　1997.5『空間・公・共同体』青木書店
脇田晴子　1988.4「中世の分業と身分制」『日本中世史研究の軌跡』東大出版会
佐々木銀弥　1988.4「中世後期地域経済の形成と流通」『日本中世史研究の軌跡』東大出版会
井原今朝男　1993.4「幕府・鎌倉府の流通経済政策と年貢輸送」『中世の発見』吉川弘文館
中世都市研究会編　1996.9『津泊宿』新人物往来社
小野正敏　1997.7『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ
鋤柄俊夫　1995.3「第５章Ⅱ調査区の景観復元」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会、（財）大阪府文化財ｾﾝﾀｰ
松井直樹編　1991～1993『八ツ面北部遺跡Ⅰ～Ⅲ』西尾市教育委員会
山本ひろみ編　1995『腰前遺跡』知立市教育委員会
大野真規編　1996～1998『小針遺跡』『小針遺跡Ⅱ』『小針遺跡Ⅲ』知立市教育委員会
宮腰健司編　1995.3『牛ノ松遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ
川井啓介編　1994.3『室遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ

茶筅状竹製品の系譜

―岩倉城遺跡出土茶筅の位置づけ―

木川　正夫

出土竹製品や竹製民具の中に、先端を細かく裂いて茶筅状を呈する物（茶筅状竹製品）がある。茶筅やササラのように名称がついていて用途が分かっているものもあるが、出土遺物の中には用途不明のものもある。この小論では岩倉城遺跡等の出土遺物を中心に微妙な形態の違いによって、茶筅状竹製品がどのような用途に使用されうるか、また、似た用途でも歴史的にどのように形態が変化していくかを考察したい。

1．はじめに

筆者はさきに（木川 1999）茶筅状竹製品について２例の出土例をあげて「スリザサラ」という楽器の片方の可能性があることを示唆した。他の出土例を再調査、再検討を加えた結果、用途の大部分（Ⅲ～Ⅴ類）は茶道具（茶筅）と考えて問題ないが、同じ茶筅状をしていても微妙な形態の違いによって用途が異なることが分かってきた。

茶筅のように用途が分かる物・用途不明の物を含めて“茶筅状竹製品”という名称が使用されている例があるので、本論でもこの名称を使用する。私が集成するにあたって基準にした“茶筅状竹製品”の定義は、

適当な長さ（数cm～数十cm）に切断された竹材の長軸に対して平行に割裂した竹製品（結果的に片方が束ねられた形状を呈す）

ということである。さて、そのような形状の遺物を可能な限り集めた。

集成を試みた結果、1999年末現在で日本のものが９遺跡10例以上は存在することが分かった（表１）。その内愛知県岩倉城遺跡出土例は、１遺跡からの出土数が２例と最多である。

今回の小論では、愛知県岩倉城遺跡出土の茶筅の持つ特徴が、戦国期の他の出土例と異なる点に重点を置いて考察した。

2．従来の研究

この遺物については、研究と呼ばれるようなものはほとんどない。台所用具のササラ・楽器のササラ・茶筅と、三者それぞれについての研究であれば若干あるが出土遺物との関連はほとんど取り扱っていない。これらの研究は「５．用途」で触れる。三者を包括しさらに出土遺物を含めて研究されたものはない。ただ、増田修氏と横山妙子氏の集成された目録（増田・横山1997.11）の鋸歯状木製品の項に数例（生立ヶ里例・袴狭例）の報告書名等が紹介されている。

3．出土例の観察

出土例10例を報告書・発掘担当者の話・筆者が実物を見て等の手段で観察した結果の概略を以下に記す。

１宮内堀脇例※1

筮竹を束ねたような形状。武家屋敷内区画溝出土。

２青山学院例（青学構内調査会 1994）

篠（ささら）？と報告されている。木片を一方で束ねたような形状。何で束ねられていたかは不明だがその痕跡がある。木製だが参考例として加えた。伊予西条藩上屋敷出土。

３生立ヶ里例（牛津町教委 1995）

※１　未報告資料。

節は下端から3.5ｃｍのところにある。穂はまず節の５mm上方から16分割の大割りがなされ、さらに３ｃｍ上方で（出土時は桜皮がこの付近に集中して巻かれていた。）それぞれを３分割し、さらに２ｃｍ上方で先端がきめ細かく裂かれている。大割りの部分は身が残っている。それより先端は身が削がれている。鋸歯状木製品と30ｍ離れて出土。ＳＥ94中の木臼と伴出。

４紀尾井町例（紀尾井町調査会1988）

茶筅の先端が破損して（切れて）ほどけたもの？と報告されている。ＳＲ35出土。

５一乗谷例（朝倉資料館1983）

比較的残存状態はよいが、ややひしゃげている。穂先はのびており、内傾していない。出土茶筅としては最古の形態とされる。町屋ＳＢ2530出土。

６梅原胡摩堂例（富山県埋文セ1996）

穂先の末端は内に曲げられており、節が抜かれて（貫通して）いる。比較的口径の大きい竹材を使用。穂数約105本。井戸ＳＥ9751出土。

７袴狭例（兵庫県埋文セ1996）

穂の根元付近に編み糸の痕跡がある。しかし穂同士に凹凸がないので上り穂（外穂）・下り穂（内穂）の区別はない。また、先端部は変色しており、大割り以前に表皮をむいた痕跡と思われる。穂先はのびており、内傾しない。穂数74本。三間堂雨落ち溝出土。

８宮内例※2

穂先が欠損。それ以外は袴狭例に類似。武家屋敷付近出土。

９・10岩倉城例（愛知県埋文セ1992）

いずれもひしゃげた状態で出土。穂先が何れも欠損しているが、出土時は残っていた。残存する穂先の内傾は認められない。穂の付け根に凹凸があることから外穂・内穂の区別があったようである。しかし、編み糸の痕跡は見あたらない。いずれも本丸内区画溝ＳＤ03出土。

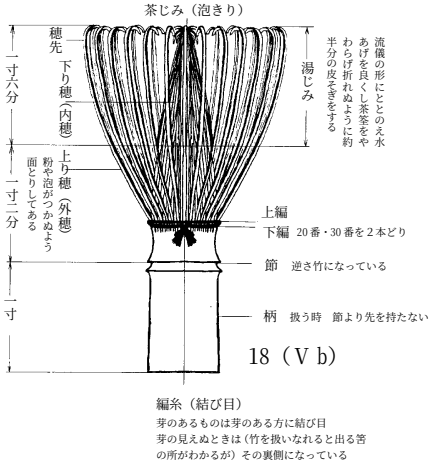


図１　茶筅の名所（内山1974より引用）

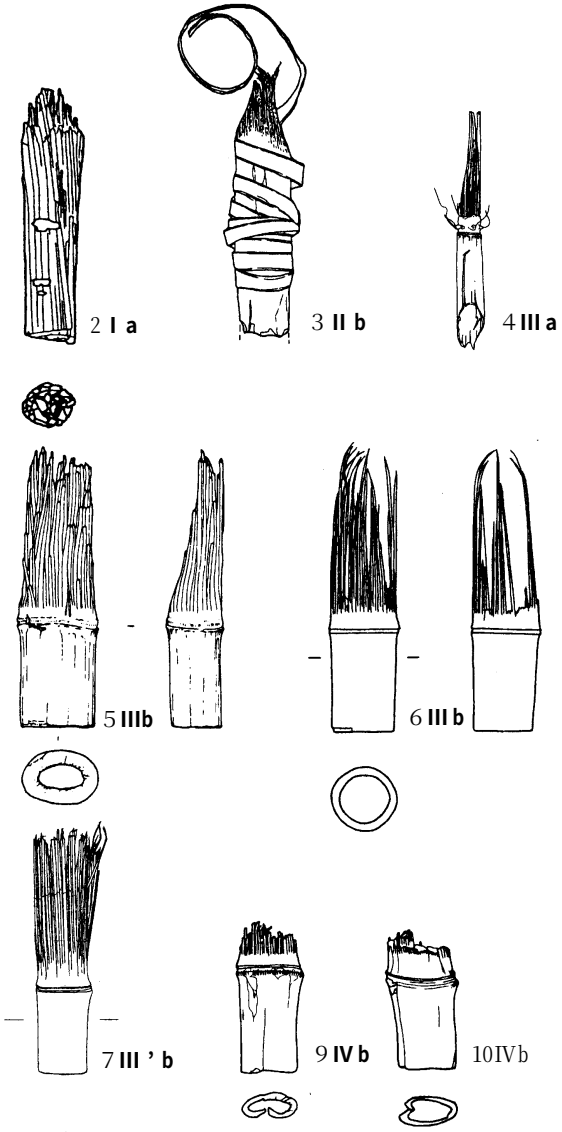


図２　出土茶筅状竹製品集成図（1：4）
※番号は表１に対応・図は各文献より転載

表１　茶筅状竹製品地名表

No.	遺跡名	分類	材質	全長	幅,厚	割裂範囲	握り部長	年代	所在地
1	宮内堀脇遺跡	Ⅰa	竹					16世紀後半	兵庫県出石郡出石町宮内字堀脇
2	青山学院構内遺跡	Ⅰa	木	10.5	3.9	10.5	6.6	江戸	東京都渋谷区渋谷4丁目4番24号
3	生立ヶ里遺跡	Ⅱb	竹,桜皮	14.3+α	2.5×2.5	10.3＋α	4	弥生中期前半(BC1C)	佐賀県小城郡牛津町大字乙柳
4	紀尾井町遺跡	Ⅲa	竹	12.3	1.3	5.5	6.8	1620～1669	東京都千代田区紀尾井町3-3
5	一乗谷朝倉氏遺跡	Ⅲb	竹	11.2	3.2×2.2	6.4	4.8	戦国(1471～1573)	福井県福井市城戸ノ内町字赤淵
6	梅原胡摩堂遺跡	Ⅲb	竹	15.2	3.4×3.4	8.8	6	中世後期(16C)	富山県西礪波郡福光町梅原・宗守
7	袴狭遺跡	Ⅲ'b	竹	14.3	3.0×3.0	8.3	6	16世紀後半	兵庫県出石郡出石町袴狭
8	宮内遺跡	Ⅲ'b	竹					16世紀後半	兵庫県出石郡出石町宮内
9	岩倉城遺跡	Ⅳb	竹	8.0+α	3.2×1.4	1.8+α	6.2	戦国(1479～1559)	愛知県岩倉市下本町
10	岩倉城遺跡	Ⅳb	竹	7.2+α	3.8×1.6	1.2+α	6	戦国(1479～1559)	愛知県岩倉市下本町

※２　未報告資料。

4．型式分類と年代比定

９遺跡10例について、表１（寸法の単位はcm）のように型式分類と年代比定を試みた。その基準を表３に示した。ａ類（握りは手で握る長さ）とｂ類（握りは指先でつまむ長さ）との長さの境界はおおよそ６.２cmを基準として、ａ類がそれ以上、ｂ類がそれ以下の長さである。また、実測図等を図２に示した※3。補足のために民俗例や絵画資料（筒井1992・林屋1980）等を加味し、資料対象を増やして考察した。海外の例を中国に限定した理由は、中国の文献や絵画資料に茶筅やササラに類する楽器等の掲載があり、日本への影響が最も強いと考えられるからである。

5．用途

茶筅状竹製品の用途は主に次の三つである。

（１）台所用具（タワシ）……Ⅰ・Ⅱ

（２）楽器（ササラ）……Ⅱａ

（３）茶道具（茶筅）……Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ

次に各用途別に形態の歴史的変化を追っていき、出土例がどれに相当するか等検討を加えたいと思う※4。

（１）台所用具（タワシ）として

台所用具のササラ・束子の歴史については小泉和子氏の著作（小泉1994）等が詳しいと思われる。

Ⅰ類の台所用具のササラの由来はさだかでない。江戸時代の文献『南都名産物集』に「団扇。竹は筅帚（ささら）のごとし」とあるので、江戸時代に竹を細かく割った物を清掃道具等に使用していたであろうと想像がつく。江戸末期以降の「勝手道具尽し」（図３－１）に登場しているのでその頃は随分普及していたと思われる。出土例として、宮内堀脇例・青山学院例がある。また、中華料理の鍋を洗うのに、中国でも日本でも現在に至るまで用いられている。束子で洗うより泡切れがよいらしい。現在製作されているものを観察すると、中国の物も日本の物も握り部にまず角材の芯を用意し、厚めの竹を細かく割いて皮つきと皮なしに分け、皮なしの方でまず芯を包み込むように束ね、皮つきの方で皮の部分が外周を向くようにその外側に束ねて、針金または繊維の紐で握り部を縛る。形状の似たものが洋服ブラシ（図３－３）としても使用されている。

江戸期の絵画資料には唐の陸羽の『茶経』（760年）に記述のある「札」の推定図がいくつか描かれている。「札」は竹を細かく裂いて束ね、茶器を払い清める道具として記述されているのだが、『茶経中巻茶器図解』（18世紀末）には「竹札」（図３－２）として柄の長い筆状のもの、『茶筌之一件』（江戸後期）には「唐茶筌（図３－４）」としてあたかも茶筅の起源であるかのように描かれている。

Ⅱ類の一部は台所用具（図３－17）として使用されるが、楽器として使用される物との違いは、穂が面取りや間引きされずに密な状態にされていることである。そのような形状でないとタワシのような役目は果たせない。

束子（たばし・たはし・たわし）はもともとは自家製で、江戸時代以降都市で商品化され、棕櫚製のものが江戸時代の遺跡から何十点と出土している。

（２）楽器（ササラ）として

楽器としてのササラ（日本にササラと名のつく楽器が二種あり、一つはスリザサラ、もう一つはビンザサラである。この場合はスリザサラ。）の歴史については、拙論（木川1990）があるが、山路興造（山路1988）や増田修（増田1997）のものが詳しい。

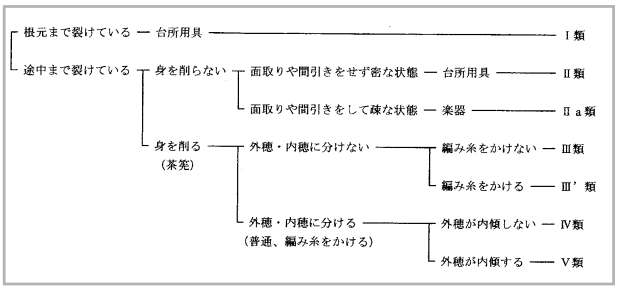


表２　茶筅状竹製品の用途推定表

※３　図中の各数字は表１の遺物番号に対応

※４　本文中の「図１－●」などの数字は図１・図３と対応させてある。

刻骨や鋸歯状木製品がスリザサラの左手で持ち擦られる方である可能性があり、日本では弥生期までさかのぼれるが、右手で持つ擦る方（ササラ竹）の出土例がないため、瓜郷例の刻骨のように棒状の鹿角や木の棒で擦られていた可能性がある。このような例は世界の民族楽器等にも見られる。擦る方が竹製の茶筅状になるのは、日本では文献や絵画資料上平安末期からと考えられる。中国では「敔（ぎょ）」（図３－16）という孔子廟聖楽用の楽器が春秋時代から存在し日本のスリザサラ（図３－15）の原形かとも考えられるが、宋の陳暘の『楽書』によると、初めは擦る方は木の棒であり、竹製になったのは唐代以降らしい。

Ⅱ類の一部（Ⅱa類のように握れるタイプ）の茶筅状竹製品の用途としては、スリザサラのササラ竹が考えられる。Ⅱa類でも台所用具に使用される物との違いは、面取りや間引きをして疎にされていることだ。そのようにしないとササラゴを擦る時うまく音が出ない。これらに似た出土例として生立ヶ里例がある。しかし用途不明である。いくつかの説は出されているが、水野正好や山崎和文（佐賀新聞 1995）は楽器説をとなえている。その根拠としては、生立ヶ里例の茶筅状竹製品が鋸歯状木製品（ササラゴと考えられるもの）と約 30m 離れた同時期の遺構で出土していることである。筆者（木川）も両者の実物を観察したが、穂先が細かく裂かれていることや鋸歯状木製品の刻目が浅く短くしか刻まれていないことから、両者を結びつけることは少々困難と言わざるをえない。むしろ、木臼と伴出したことからタワシのように使用されたか、液状のものを攪拌するために使用したのではないかと考えたい。

（３）茶道具（茶筅）として

茶筅の歴史については、内山一元の著（内山1974）をはじめ、熊倉功夫（熊倉1977）、布目潮渢（布目1998）等が詳しい。また、現存民俗例からは漆間元三（漆間1982）や中村羊一郎（中村 1992）が詳しい。

文献上茶筅が登場するのは北宋徽宗皇帝の『大観茶論』（1107年）である。抹茶を攪拌し、泡立てるための道具として唐代の竹夾（ちくきょう＝竹ばし）、北宋の茶匙（ちゃさじ）にかわって使用され始めた。南宋の『茶具図賛』（1269年）には「竺副帥」として茶筅の絵が載せてある。他に南宋代の『品茶図』（12～13 世紀）や元代の『元宝山墓壁画』（14 世紀）などに描かれているが、15 世紀、明代に中国では抹茶の衰退とともに茶筅も消滅してしまう。日本で文献上の初見は鎌倉時代（13 世紀末）で、絵画としては南北朝時代の『慕帰絵』（1351 年）である。『福富草紙』（15 世紀前半）のものも初期のものとして有名である。日本ではこの後、形態の変化・多様化は見られるものの、現代まで連綿と製作・使用されている。さて、茶筅状竹製品の内、茶筅に相当するⅢからⅤ類の分類であるがこれは筆者が文献・絵画資料・伝統工芸品とその製作方法などから分類したものであり、おおよそⅢからⅤの順に多様化していくものとおもわれる。

Ⅲ類

現在の民俗例で残っている振り茶や桶茶に使用する茶筅と同様の形態である。Ⅳ類以下との決定的違いは外穂・内穂に分けない点である。その分製作に手間がかからない。またⅡ類との違いは竹の身を削ることで、その製作過程で穂先は内傾することがある。初期の絵画資料として『茶具図賛』（図３－７）、『慕帰絵』（図３－８）、『福富草紙』（図３－12）が相当する。民俗例の振り茶用茶筅として出雲のボテボテ茶筅（図３－11）、桶茶用茶筅として沖縄のブクブクー茶筅などがある。なおブクブクー茶筅を描いたと考えられる古いものに『中山伝信録』（1721年）の「小竹箒」の図（図３－６）がある。出土例としては、一乗谷例・梅原胡摩堂例が相当する。

また、Ⅲ’類として編み糸のかけられているものをここに入れた。この編み糸はⅣ類のように外穂・内穂に分けるためのものでなく、穂同士の隙間を開けるためのものである。初期の絵画資料として『品茶図』（図３－９）、『元宝山墓壁画』（図３－13）などが相当する。民俗例として北設楽郡の桶茶用茶筅（図３－10）・中曽司の茶筅（図３－14）がある。出土例は袴狭例・宮内例が相当する。

図３　各種の茶筅状竹製品（約１：４）
※各文献より転載
（1,8,12,13,16 は再トレース）

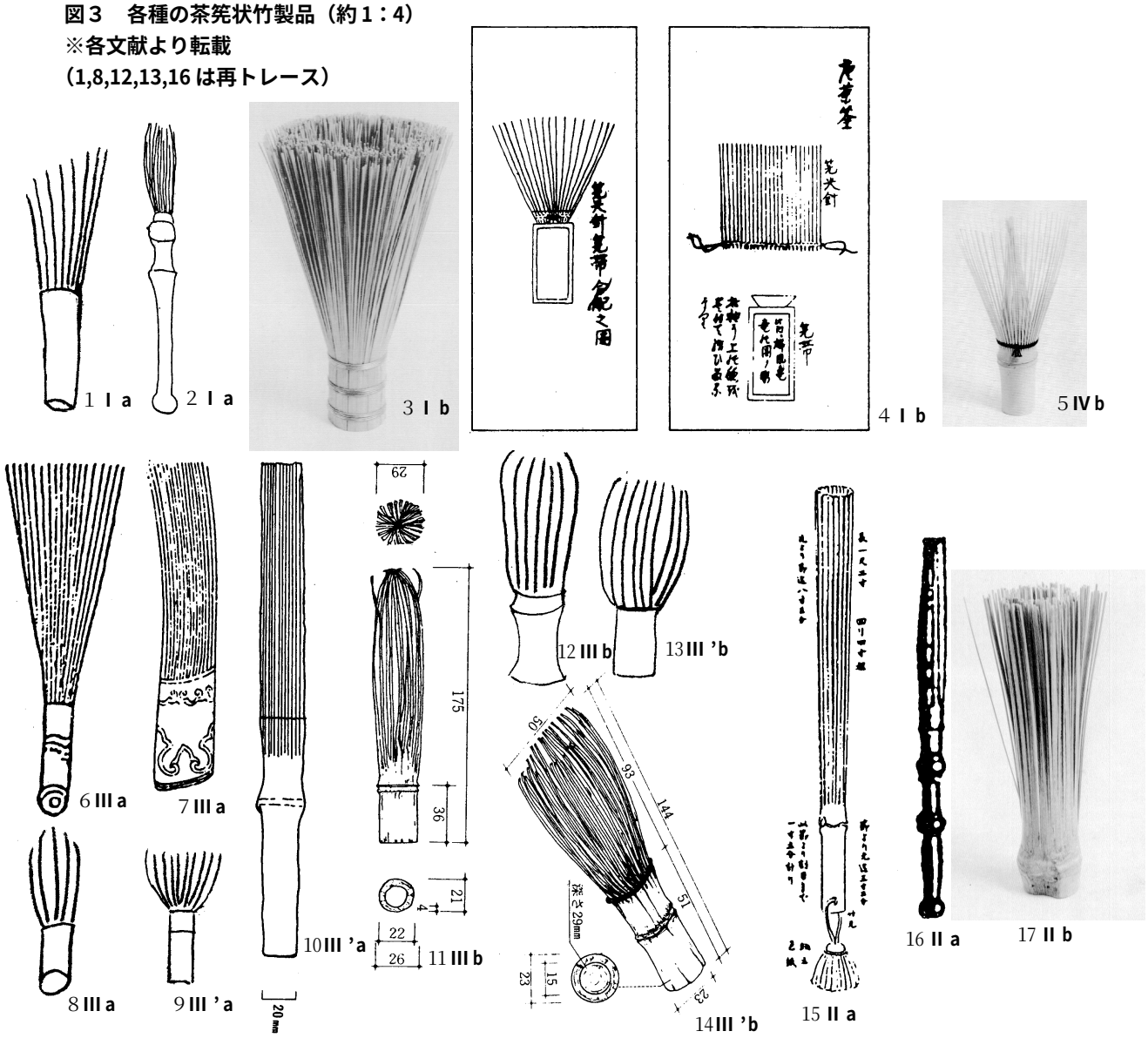


表３　茶筅状竹製品型式分類表

型式	特徴	年代	用途	出土例・絵画例・民俗例等	国別
Ⅰ類	竹を縦に割り片方を束ねる	１６世紀後半～現代	食器洗浄用・はけ		日本
		唐～現代	食器洗浄用・はけ		中国
Ⅰａ類	握りは手で握る長さ	１６世紀後半～現代	食器洗浄用	宮内堀脇例・（青山学院例）・勝手道具つくし	日本
		唐～現代	食器洗浄用	茶経の「（竹）札」・中華鍋用ササラ	中国
Ⅰｂ類	握りは指先でつまむ長さ	近代～現代	はけ等	洋服ブラシ用	日本
		唐～現代	はけ等	（唐茶筌）・中華鍋用ササラ	中国
Ⅱ類	竹を縦に途中まで割り裂く	弥生中期～現代	主に楽器ササラ		日本
		唐～現代	孔子廟聖楽用		中国
Ⅱａ類	握りは手で握る長さ	平安～現代	楽器ササラ	民俗芸能例	日本
		唐～現代	孔子廟聖楽用	「ぎょ」のささら竹	中国
Ⅱｂ類	握りは指先でつまむ長さ	弥生中期～現代	食器洗浄用	生立ヶ里例	日本
					中国
Ⅲ類	Ⅱ類の筅部の身を削る	１２世紀末～現代	初期の茶筅		日本
		１２世紀～１５世紀	中国の茶筅		中国
Ⅲａ類	握りは手で握る長さ	１２世紀末～現代	初期の長茶筅	紀尾井町例・中山伝信録・桶茶用茶筅	日本
		１２世紀～１５世紀	宋代の茶筅	茶具図賛・品茶図（Ⅲ'a）	中国
Ⅲｂ類	握りは指先でつまむ長さ	１４世紀～現代	初期の短茶筅	慕帰絵・福富草紙・一乗谷例・梅原胡摩堂例・振茶用茶筅・袴狭例（Ⅲ'b）・宮内例（Ⅲ'b）	日本
		元～１５世紀	元代の茶筅	元墓壁画（Ⅲ'b）	中国
Ⅳ類	Ⅲ類の筅部を内外に分ける	１５世紀中葉～現代	初期茶道用茶筅		
Ⅳａ類	握りは手で握る長さ	江戸時代～現代	初期天目茶筅	宗守流天目茶筅・空也堂大茶筅	
Ⅳｂ類	握りは指先でつまむ長さ	１５世紀中葉～現代	初期茶道用茶筅	高山宗砌の茶筅・岩倉城例・利休茶筅・宗守流	
Ⅴ類	Ⅳ類の外筅端を内に曲げる	１７世紀～現代	茶道用標準茶筅		
Ⅴａ類	握りは手で握る長さ	江戸時代～現代	天目茶筅	表千家流天目茶筅・西大寺大茶筅	
Ⅴｂ類	握りは指先でつまむ長さ	１７世紀～現代	茶道用標準茶筅	裏千家流数穂	

Ⅳ類

戦国時代初め頃、村田珠光のすすめで高山宗砌が開発したと考えられるタイプの茶筅。外穂・内穂に分けることによって、茶の湯に使用される茶筅も芸術の域に高められた。千利休もこのタイプ（図3－5）を用いた。ただし編み糸をかけていないと何度も使用する内に外穂・内穂が寄ってくる。しかし、穂の付け根の凹凸は残る。出土例としては、岩倉城例が相当する。

Ⅴ類

千利休以降に出現したとおもわれる、上り穂（外穂）の先端を内に曲げるタイプ。裏千家流等（図1）で利休の形状を真似るのがおそれ多いとのことで先端を曲げたことが始まりらしい。ただし、何度も使用するうちに外穂の先がのびてくる。現在、裏千家流数穂というこのタイプが標準茶筅として（流派にこだわらないときなど）使用される。

6．岩倉城遺跡出土例の位置づけ

岩倉城例を観察してみて、他の戦国期の出土茶筅と比較して異なる点は穂の付け根に凹凸が見られることである。これは外穂・内穂に分けられていたことを意味する。外穂・内穂に区別するとき編み糸をふつうかけるが、その痕跡は見られない。現存状況として穂先が根元からことごとく折れていることから、編み糸がかかっていた可能性はある。それらのことから、高山宗砌が開発したとされる芸術的な茶筅の最古の出土例ではないかと考えられる。

7．結　び

茶筅状竹製品に関して、さまざまな分野の文献に目を通し、以上のような見解を持つに至った。まだまだ不明な点も多々あるが、茶筅状竹製品の出土例が増えていき、茶筅状竹製品の系譜がさらに解明されていくことを期待する。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、兵庫県の西口圭介氏に未発表資料のデータの提供をいただきました。また佐賀県の大橋隆司氏・福井県の南洋一郎氏に出土遺物等について御教示いただきました。一部の図版の掲載に関しては、群馬県の内山一元氏に御快諾をいただきました。ここに謹んで感謝いたします。

参考文献

(財）愛知県埋蔵文化財センター　1992.3　『岩倉城遺跡』『(財）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』38
青山学院構内遺跡調査調査室　1994.3　『青山学院構内遺跡（青学会館増改築地点）―伊予西条藩上屋敷跡の調査―』青山学院構内遺跡調査委員会
内山一元　1974.12　『茶筌博物誌』東京書房社
漆間元三　1982.4　『振茶の習俗』「民俗資料選集」12 国土地理協会
木川正夫　1990.5　「刻目のある木製品について―ササラの起源と変遷―」『民具研究』87
木川正夫　1999.3　「刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察」『(財）愛知県埋蔵文化財センター年報　平成 10 年度』
熊倉功夫　1977.10　『茶の湯』歴史新書〈日本史〉81 ニュートンプレス
黒沢隆朝　1984　『図解世界楽器大事典』雄山閣
小泉和子　1994.9　『台所道具いまむかし』平凡社
佐賀県牛津町教育委員会　1995　『生立ヶ里遺跡出土木製品図録編』『牛津町文化財調査報告書第 7 集』
佐賀新聞　1995.1　「木・竹製は『ササラ』　国内最古の楽器か」 1 月 17 日
千代田区紀尾井町遺跡調査会　1988.11　『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』
筒井紘一監修　1992.4　『茶の湯絵画資料集成』平凡社
(財）富山県文化振興財団　1996.3　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編)』（富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 7 ）
中村羊一郎　1992.3　『茶の民俗学』名著出版
布目潮渢　1998.4　『中国茶文化と日本』汲古選書 21 汲古書院
林屋辰三郎著・村井康彦図版解説　1980　『図録茶道史』淡交社
兵庫県教育委員会　1996.8　『兵庫県埋蔵文化財情報　ひょうごの遺跡』22
福井県立朝倉氏遺跡資料館　1983.3　『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅣ　―昭和 57 年度発掘調査整備事業概報―』
増田修・横山妙子　1997.11　「『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41 別冊付録　市民の古代研究会
増田修　1997.11　「解説『ささら』に関する参考文献目録」『古代の風』41 別冊付録　市民の古代研究会
松下智　1990　「三・信・遠の製茶・喫茶用具について」『山村民俗の物質文化的研究』
山路興造　1988.3　「『ささら』とささら説経」『京都部落史研究所紀要』 8

『年貢割附状』からみた江戸時代の災害

―明和４年亥年の水害と碧海郡西鴛鴨村―

加藤博紀

江戸時代後期は火山噴火や冷害による飢饉など天災が相次いだ時代である。西三河にても例外ではなく、矢作川水系の水害に苦しめられつづけた。矢作川扇状地上にある碧海郡西鴛鴨村はその甚大な被害をこうむった村の一つである。江戸時代随一の水害・明和４年亥年の水害は、西鴛鴨村の生活の根本を揺るがした。農地を中心とする被災状況は、豊田市鴛鴨町に伝存する「年貢割附状」などの近世文書から知ることができる。この文書から、被災状況の他、復興への足取り、代官側の対応などやも知ることができた。また尾張藩内の諸村とも比較を行い、明和４年亥年の水害の影響範囲も検討した。

しかし、代官農民ともどもの努力にも関わらず、被害は大きかった。特に水田は最終的に水害前の半分程度しか復興することができなかった。

１．はじめに

筆者を含む平成９年度郷上遺跡調査担当者は鴛鴨町区民会館に年貢関係文書・村絵図を含む近世文書を所蔵していることを知った。そこで翌10年から２年にわたって川井啓介・鈴木達也（以上調査研究員）・伊藤秀紀（前調査研究員、現県立大府養護学校教諭）・後藤英史（前調査研究員、現県立名古屋西高等学校教諭）とともに、鴛鴨町文化財保護委員会の長谷川義雄氏などの協力を得てこの古文書を閲覧し、多くの事実を知りえた。本論は、筆者がこれらの閲覧を通して知りえたことを踏まえておこしたものである。

この鴛鴨区民会館所蔵文書（以下『鴛鴨区有文書』と記す）は、過去に昭和33～34年に『年貢割附状』と『年貢皆済状』が長谷川清氏・長谷川釼三郎氏らによって整理を受け、東・西鴛鴨村・領主ごとに分けられ、題名・石高・署名者（代官）を記載し、まとめられた。さらに昭和42年に「検地帳」や金銭出納帳の類が、整理されている。これらの調査の控えとして作成された『鴛鴨古文書年貢割附免定年貢皆済目録調査控書』（以下『長谷川レポート』と記す）を現在の文化財保護委員長の長谷川義雄氏がお持ちになっており、筆者が本論の参考にすることができた。

ここでは、明和４（1767）年亥年の水害とそれ以降の様子をテーマとするので、宝暦13（1763）年御料所となって以降の西鴛鴨村の「年貢割附状」を中心に考察をする。

２．西鴛鴨村について

―その変遷とあいつぐ天災―

（１）近世以前の西鴛鴨村（図１）

三河国碧海郡西鴛鴨村は、旧加茂郡との郡境に位置し、現在は愛知県豊田市鴛鴨町となる。愛知県の中央部を占める豊田市でも南部に位置し、矢作川が巴川と合流し山間部から扇状地へと流れ出る位置に所在する。現在は東名高速道路が通り、第２東海自動車道とのジャンクションが建設される交通の要所ともいえる所でもある。

豊田市鴛鴨町周辺は碧海台地上を中心に旧石器時代から遺跡を有し、古墳・飛鳥時代には三味線塚古墳や神明遺跡などの有力な遺跡がみられるようになる。郷上遺跡の調査によると、13世紀になって継続的な集落が台地下の沖積地に形成され、この後18世紀にいたるまで綿々と集落が継続していたことから、遅くとも鎌倉時代までには人々が沖積地に進出し、５世紀以上にわたってその場所に住み続けた様子が窺える。※1

※１　(財)愛知県埋蔵文化財センター編 1998・P39

図１　鴛鴨町位置図

表１　西鴛鴨村領主・領主別石高変遷

年号	西暦	領主・村高（石）			検地実施記録	特記事項
正保３	1646	岡崎・　626.411				
慶安２	1649	岡崎・1,202.526			一円検地	
寛文３	1663	岡崎・　608.978				東西分村
寛文４	1664	岡崎・ 466.9512				西田新郷分郷
宝暦５	1755	岡崎・　456.928			新切畑検地	
宝暦13	1763	天領（御料所）・　519.596				
明和７	1770	天領(御料所)・　450.786		岡崎・60.515		
安永６	1777	天領(御料所)・496.9346		岡崎・60.515	新田検地	
天明２	1782	大多喜(小牧)・443.2635	天領(御料所)・53.659	岡崎・60.515		
文政５	1822	大多喜(小牧)・443.2635	沼津(大浜)・53.6598	岡崎・60.515		

（豊田市教委 1980 の表に加筆）

表２　明和５年以降矢作川の水害

元号	西暦	月	記事
明和５	1768	２月	挙母大雨、矢作川通洪水、堤破損田畑浸水
		４月	矢作川通洪水、堤防破潰、城内浸水
		５月	大雨出水、引続浸水
明和６	1769	６月	挙母川除堤再三の洪水で破堤流出
		８月	矢作川満水、樹木御殿へ立退
明和８	1771	７月	矢作川満水、樹木御殿へ立退
明和９	1772	８月	挙母大風雨、潰家15、出水破堤はなし
安永２	1773	６月	挙母大雨、矢作川洪水破堤、城内浸水
安永３	1774	８月	挙母矢作川通洪水、城中浸水
安永８	1779	７月	挙母辺大風雨、所々破損
		８月	矢作川満水、堤押切、城内浸水、田畑水腐
天明２	1782	６月	挙母矢作川洪水、堤防押切、田畑砂入
		８月	挙母矢作川通洪水、堤切所より水入、潰家あり
天明６	1786	９月	挙母大風雨、城内所々破損、村々潰家多し

（豊田市教委 1981 の表を引用改変）

（２）『鴛鴨区有文書』から見た西鴛鴨村（表１）

『鴛鴨区有文書』から近世の西鴛鴨村の様子、とくに生産力を示す石高と領主の変遷と検地の実施時期、検見方法の変化などを見てみたい。

① 岡崎領時代（1646 ～ 1762）

『長谷川レポート』によると、その年の納入すべき年貢額を記載した「年貢割附状」のうち最古のものは正保３(1646)年までさかのぼるという。この正保３年以降明治維新までほぼ完全に「年貢割附状」などの年貢関係文書が現存している。なぜこの年から現存するかは不明だが、この前年の正保２(1645)年7月に鴛鴨村の領主になる水野忠善が三河国吉田から岡崎に入封しており、これとの関係が想定できる。ちなみに水野忠善は俗に「鬼監物」と呼ばれた。これは武者としての武辺ぶりと領内への苛政から領民が忠善を憎悪したものからきたものである※2。相当に厳しい年貢徴収が行われたものと思われる。

慶安２(1649)年岡崎藩によって一円検地が実施された。鴛鴨村も対象であり、576石１斗１升５合を打ち出し、1202石余の石高とされた。

このように比較的規模が大きくなった鴛鴨村は、寛文３(1663)年に東・西鴛鴨村と他領の者をいれた枝村の西田新郷の３つに分けられた。ここで西鴛鴨村は460石前後という平均的な村に生まれ変わった。以後中小譜代大名または天領であったためか、一円検地は実施されていないが、宝暦５(1755)年に「新切畑検地水帳」が見られることから新しく開発された畑には検地を行ったようである。なおこの検地によって打出された石高は、岡崎藩の「年貢割附状」には別高として記載された。

② 御料所時代（1763 ～ 1769）

宝暦12年９月水野氏が肥前国唐津への転封にともない、西鴛鴨村は天領となった。宝暦13年の年貢割付状には御料所と記されている。三河国の天領は遠江国中泉（現静岡県磐田市）代官所の出張所である赤坂（現宝飯郡音羽町）役所の支配をうけたので、赤坂領とも称された。このときに宝暦５年の検地の打出しを村高に参入したので55石余が増加している。

この御料所時代にこの地域一帯に大きな被害を与えた明和４年亥年の水害がおきた。西鴛鴨村も重大な被害をこうむっている。この被災により東西鴛鴨村は寛永年間までの間に碧海台地上に移転し、現在のような集落を形成した。

③御料所・岡崎領相給時代（1770 ～ 1781）

世評によると明和４年亥年の水害にこりて、当時老中職にあった岡崎藩主松平康福は幕府に所替を内申したといわれる※3。そのためか明和６(1769)年11月石見国浜田から本多忠粛が入封した。ちなみにこの後この子孫が岡崎藩主を伝え明治維新に至る。

西鴛鴨村では60石余を岡崎領として分かち、２人の領主を持つこととなった。また、年号が不明のものもあるが、安永元(1772)年または安永５(1776)年と記載された東西鴛鴨村の新田検地帳が現存することから安永年間に新田の検地が実施され、打出された46石余の林畑が安永６(1777)年に村高に参入された。これ以降検地は実施されず、総村高の増加は見られない。

③ 小牧領など三給時代（1782 ～）

西三河各地に分散した所領を持つ上総国大多喜藩主松平正升が、幡豆郡の所領を移され東西鴛鴨村の大部分を領することとなった。西鴛鴨村では御料所の大半を分けられ443石余を領した。小牧村（現西尾市）の陣屋が大多喜藩飛地と同族旗本知行地を支配したので小牧領と称される。ここで御料所・岡崎と三領に分かれることになった。

また文政４(1821)年11月に沼津藩主水野忠成が貨幣改鋳の成功により加増を受け、御料所分が沼津藩領とされた。三河国の沼津藩飛地は大浜村（現碧南市）の陣屋の支配を受けたので、大浜領と称された。

なお江戸時代中期以降いくつもの小領地に細分化されるようになり、村民も細かく分断され領主ごとに村役人を置くのが普通であるが、西鴛鴨村では名主は兼務していたようである※4。

※２　神崎彰利1983・Ｐ188
※３　新編岡崎市史編集委1992・Ｐ904
※４　豊田市教委1980・Ｐ572

（３）西三河を襲った災害（表２）

江戸時代後期は火山噴火や冷害による飢饉など天災が相次いだ時代である。西三河にても例外ではなく、矢作川水系の水害に苦しめられつづけた。宝暦６(1756)年から続いた水害※5以降、矢作川の川底は約４尺（132cm）余も土砂で高くなり、雪解、夕立などでさえも出水し、霖雨が降り続くとすぐに洪水になり、堤防に対して水が８合目まで増水すると出水が生ずる状態になった※6。

特に明和４(1767)年亥年の水害は尾張・三河・美濃に大きな被害を与えた。７月11日から13日にかけて連日のごとく大雨となり、猿投山で山崩れが起こった。各地で堤防が決壊し、挙母城では床上５尺７寸（約1.8m）まで浸水した。西鴛鴨村周辺では、隣の渡刈村で堤防決壊、またたくまに東西鴛鴨村にまで至り、住居や農作物などに大きな被害を与えた。この結果渡刈村・東西鴛鴨村では台地上に集落が移転した。ちなみに、文久３年(1863)に模写された岡崎領または大浜領分の田畑の位置を示す村絵図をみると、現在の鴛鴨町のある台地に近い部分の田畑が明和４年以来荒れ地となったという記載が多いことから、当時の東西鴛鴨村が所在した地域を中心に洪水の被害が大きく、復興も難しかったことがわかる。こうして年貢収納の安定した体制は一挙に崩壊し、各地で年貢米が急減した。

明和4年以降も表２のように水害が続いた。東西鴛鴨村近辺でも、安永３(1774）年渡刈村では、村高の半分に近い244石余が年貢賦課対象から除かれ、例年200石を越えた年貢量は73石余に転落した。また安永8(1779)年８月の洪水は、岡崎龍海院の年譜に「十三年目の大水」つまり明和4年に匹敵する規模の水害と記録されている。※7 このような相次ぐ洪水は、耕地や用水施設、労働力に後遺症を残し、凶荒の慢性化をもたらすものとなった。

３．西鴛鴨村における田畑の荒廃と年貢の収奪　－年貢割付状から見た西鴛鴨村－

では、具体的に西鴛鴨村においては、明和４年亥年の水害ではどのような被害があったのだろうか。以下で見ていきたい。

（１）西鴛鴨村の免（年貢率）

まず、明和４年亥年の水害以前の西鴛鴨村はどのような村であったのだろうか。

西田新郷を分立させた最初の年である寛文４年(1664)の年貢割付状を見ると、田方の免（年貢率）六ツ七分・本畑や新田なども含めた平均の免61.7%であった。これを同じ岡崎藩領下にあった他村と比較すると、同じ寛文4年の他村の平均免は67.2%で、田方の免では八ツ二分、七ツ七分といった高免の村があった。これらと比較すると西鴛鴨村の田方免六ツ七分・平均免61.7%は低いといわざるを得ない※8。

これにより西鴛鴨村は、免の上では、高免の岡崎藩の中では低いランクに属する村であると推定される。即断を避けなければならないが、これは西鴛鴨村が高免を負担することができない村であると藩側から判断されたと思われる。

（２）江戸時代後半の傾向（表３・図２）

次に明和４年亥年の水害などによる西鴛鴨村での田畑への被害と影響をおおまかに把握したい。

このため、岡崎領から御料所に所替された宝暦13年から倒幕期の混乱が始まる文久3年(1863)までの101年間の西鴛鴨村の年貢割付状を開き、村高・納合米（本年貢、小物成や弐升出目米などを含めた米納年貢の総量）・諸引高（検見引、川成引や須成引などを含めた年貢を賦課しない田畑の石高）を抜粋した。その上で年貢賦課対象となる田畑すべての実石高※9とその実石高に対しどれだけの年貢が賦課されたかを示す取米率※10を算出した。これらの推移をあらわしたものが、表３と図２である。但し、明和７年(1770)以降の岡崎領と天明２年(1782)以降の御料所、大浜領は小規模領主であるので除外した。

この結果をみると、明和４年以前は諸引高を

※５　宝暦６年から９年にかけての年貢割付状を見ると、諸引高が増加していることから西鴛鴨村も被害を受けた。なお洪水で命を落とした少女をまつる「おしんぼう地蔵」はこの時期に由来すると思われる。

※６　豊田市教委 1981・Ｐ 336　　※７　豊田市教委 1981・Ｐ 340　　※８　新編岡崎市史編集委 1992・Ｐ 310

※９　（実石高）＝（村高）－（諸引高）　※10　（取米率）＝（納合米）÷（実石高）×100

除いた実石高は90%弱、取米率も42%強で安定していた※11。しかし、明和４年の大洪水で80%強の田畑が被害をうけ、18.9%の田畑からしか農作物を収穫することができなかった。翌明和5年で村高のうち10%程度の農地が起返されたが、明和７年(1770)までは同5年の状況が維持されるのみである。明和８年(1771)・９年(1772)と一転急速に起返を遂げ、村高のうち60%弱まで起返することができた。これ以降も徐々に起返が進み、安永６年(1777)でおおよそ復興が済んだと思われる。但し、安永8年（1779）には岡崎龍海院の年譜に明和４年に匹敵する規模の水害と記録された洪水により、3.6%の農地が引高とされたが、翌年には復興したようである。なお安永3年(1774)の渡刈村へ甚大な被害を与えた洪水のときにはこれと関連すると思われる記載はないので、西鴛鴨村ではこの年の被害は軽微であったと思われる。天明3年(1783)より定免制が採用されたようで、数値の変化が稀になり、寛政８年(1796)以降は数値の変化がない。最終的に宝暦13年と比較して、村高のうち11.8%にあたる120石余の田畑が復興することなく放棄されたことになる。

一方、取米率を見ると、明和4年の洪水により、取米率は31.5%に下がり、安永７年(1778)まで下降し、翌８年やや上昇するが、安永９年(1780)には最低の15.7%を記録する。これは起返分の田畑への免を低く設定したため、起返分の増加とともに取米率が相対的に低下したものである。翌年からは緩やかに上昇し、結局寛政８年の19.9%という極めて低いレベルで固定している。おおよその復興を遂げた西鴛鴨村にも年貢の増徴が行われたが、復興後も領主側は低免を許さざるを得ない状況であったと推測される。この結果、天領では五公五民といわれる年貢率と比べると異常に低い年貢率になった。

これらから明和４年亥年の水害が西鴛鴨村に与えたものは、以下のように推定される。

① 宝暦12年以前の年貢割付状を実見しても諸引高が　長期間大量に継続することはなかった。これらからも明和4年亥年の水害は、江戸時代随一の大災害であり、かつその被害は後世まで続いた。

② 明和４年亥年の水害による被害は、おおよその復興に安永６年までの10年の月日を要した。但し、復興をあきらめざるを得ない農地も少なからず存在した。さらにその後に安永8年の洪水でも農作物の被害を受けている。

③ 明和４年亥年の水害は、もともとあまり高免を負担できない西鴛鴨村の免を半分程度に低下させた。

（３）宝暦13～天明３年の傾向（表４・図３）

さらに明和４年亥年の水害などによる西鴛鴨村の本田畑・新田畑それぞれの荒廃状況を細かく把握する。

このため、宝暦13年から大多喜藩が定免を導入する天明3年までの本田・新田・本畑・新畑[12]それぞれの年貢賦課可能分及びそしてそれぞれの高におけるその割合、またその年の引高とされた田畑への被害を表したものが、表４・図３である。但し、明和７ (1770) 年以降の岡崎領と天明２ (1782) 年以降の御料所は小規模領主であるので除外した。

明和４年以前は、本田80%強、新田49%、本畑100%弱と安定した収穫を田畑ともに得ていた。しかしグラフには明瞭に表われないが、明和2年から「風水損」（おそらくは台風による被害）による引高があり、これらのときに流入した土砂が矢作川に残り明和４年亥年の水害を引き起こした原因の一つとも思われる。

そして明和4年の亥年の水害では、新畑すべてと本畑20%強を残し、すべての田畑が収穫を得ることができなかった。さらに年貢割付状の本田・新田の諸引高を詳しく見ると、農作物への被害を示すと考えられる「水損皆無引」は本田で11.5%、新田27.1%しかなく、農作物だけではなく農地自体への被害を示すと思われる「須入引」と「川成引」は、諸引高のうち本田で71.5%、新田で19.0%に及ぶ。（ちなみに残りは過去の水害などによる引高である）「須入引」の内、農地として復興できたのは明和５年の３石余分しか記載がなく、一方では「川成引」で復興できた農地は天明元年まで記載がある。また本畑の「須入

※11　宝暦10年から12年にかけても546俵（＝219石余）の定俵納（定免）が導入されていた。
※12　安永6(1777)年より46石余高入分を含む。

図２　実石高と取米率の推移

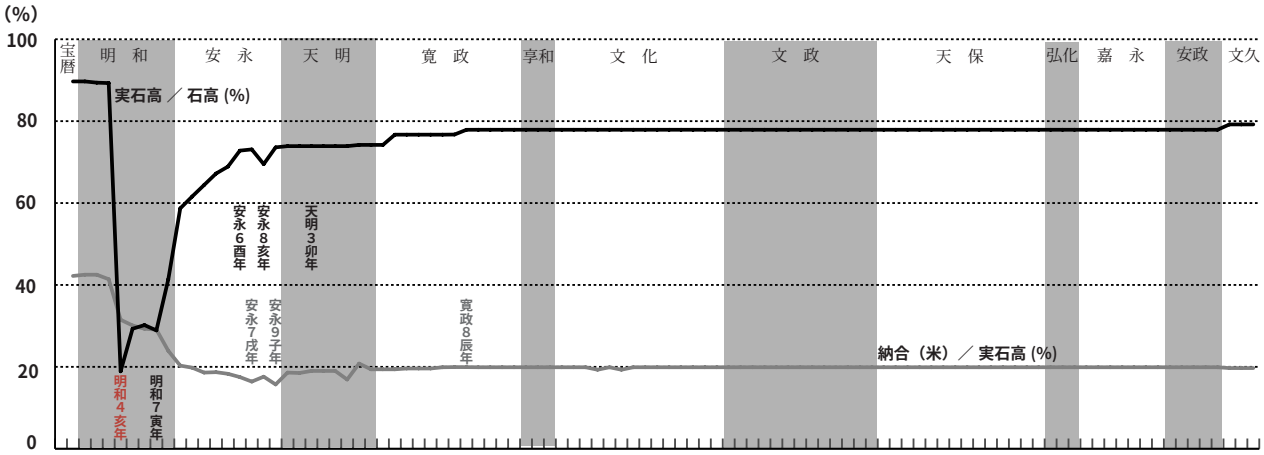


表３　総石高に対する実石高率と実石高に対する取米率

※1763～1781年は天領（御料所）、1782～1863年は大多喜（小牧）

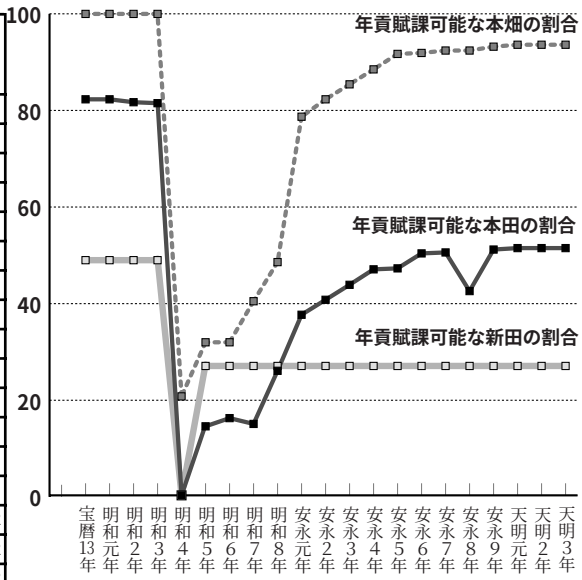
西暦	元号	実石高／石高%	納合（米）／実石高%	西暦	元号	実石高／石高%	納合（米）／実石高%	西暦	元号	実石高／石高%	納合（米）/実石高%	西暦	元号	実石高／石高%	納合（米）/実石高%
1763	宝暦13未	89.7	42.2	1788	天明８申	74.2	19.4	1813	文化10酉	77.9	19.9	1838	天保９戌	77.9	19.9
1764	明和元申	89.7	42.5	1789	寛政元酉	74.2	19.4	1814	文化11戌	77.9	19.9	1839	天保10亥	77.9	19.9
1765	明和２酉	89.4	42.5	1790	寛政２戌	76.7	19.4	1815	文化12亥	77.9	19.9	1840	天保11子	77.9	19.9
1766	明和３戌	89.3	41.4	1791	寛政３亥	76.7	19.6	1816	文化13子	77.9	19.9	1841	天保12丑	77.9	19.9
1767	明和４亥	18.9	31.5	1792	寛政４子	76.7	19.6	1817	文化14丑	77.9	19.9	1842	天保13寅	77.9	19.9
1768	明和５子	29.3	30.1	1793	寛政５丑	76.7	19.6	1818	文政元寅	77.9	19.9	1843	天保14卯	77.9	19.9
1769	明和６丑	30.2	29.3	1794	寛政６寅	76.7	19.9	1819	文政２卯	77.9	19.9	1844	天保15辰	77.9	19.9
1770	明和７寅	28.9	29.1	1795	寛政７卯	76.7295	19.938	1820	文政３辰	77.9	19.9	1845	弘化２巳	77.9	19.9
1771	明和８卯	41.4	23.9	1796	寛政８辰	77.8911	19.932	1821	文政４巳	77.9	19.9	1846	弘化３午	77.9	19.9
1772	安永元辰	58.7	20.3	1797	寛政９巳	77.9	19.9	1822	文政５午	77.9	19.9	1847	弘化４未	77.9	19.9
1773	安永２巳	61.6	19.8	1798	寛政10午	77.9	19.9	1823	文政６未	77.9	19.9	1848	嘉永元申	77.9	19.9
1774	安永３午	64.4	18.6	1799	寛政11未	77.9	19.9	1824	文政７申	77.9	19.9	1849	嘉永２酉	77.9	19.9
1775	安永４未	67.2	18.7	1800	寛政12申	77.9	19.9	1825	文政８酉	77.9	19.9	1850	嘉永３戌	77.9	19.9
1776	安永５申	68.9	18.3	1801	享和元酉	77.9	19.9	1826	文政９戌	77.9	19.9	1851	嘉永４亥	77.9	19.9
1777	安永６酉	72.8	17.5	1802	享和２戌	77.9	19.9	1827	文政10亥	77.9	19.9	1852	嘉永５子	77.9	19.9
1778	安永７戌	73.1	16.4	1803	享和３亥	77.9	19.9	1828	文政11子	77.9	19.9	1853	嘉永６丑	77.9	19.9
1779	安永８亥	69.5	17.6	1804	文化元子	77.9	19.9	1829	文政12丑	77.9	19.9	1854	嘉永７寅	77.9	19.9
1780	安永９子	73.6	15.7	1805	文化２丑	77.9	19.9	1830	文政13寅	77.9	19.9	1855	安政２卯	77.9	19.9
1781	天明元丑	73.9	18.6	1806	文化３寅	77.9	19.9	1831	天保２卯	77.9	19.9	1856	安政３辰	77.9	19.9
1782	天明２寅	73.9	18.5	1807	文化４卯	77.9	19.3	1832	天保３辰	77.9	19.9	1857	安政４巳	77.9	19.9
1783	天明３卯	73.9	19.0	1808	文化５辰	77.9	19.9	1833	天保４巳	77.9	19.9	1858	安政５午	77.9	19.9
1784	天明４辰	73.9	19.0	1809	文化６巳	77.9	19.3	1834	天保５午	77.9	19.9	1859	安政６未	77.9	19.9
1785	天明５巳	73.9	19.0	1810	文化７午	77.9	19.9	1835	天保６未	77.9	19.9	1861	文久元酉	79.2	19.7
1786	天明６午	73.9	16.9	1811	文化８未	77.9	19.9	1836	天保７申	77.9	19.9	1862	文久２戌	79.2	19.7
1787	天明７未	74.2	20.8	1812	文化９申	77.9	19.9	1837	天保８酉	77.9	19.9	1863	文久３亥	79.2	19.7

表４　本田畑・新田畑の年貢賦課可能分の石高及び割合とその免（単位は石高は石、割合と免は%）

西暦	元号	本畑	年貢賦課可能な本畑	年貢賦課可能な本畑の割合	起返（本畑）	新畑	安永６年以降高入新畑
1763	宝暦13年	199.39	199.347	99.98		46.655	
1764	明和元年	199.39	199.347	99.98		46.655	
1765	明和２年	199.39	199.347	99.98		46.655	
1766	明和３年	199.39	199.347	99.98		46.655	
1767	明和４年	199.39	41.546	20.8		46.655	
1768	明和５年	199.39	63.783	32.0	22.237	46.655	
1769	明和６年	199.39	63.783	32.0		46.655	
1770	明和７年	172.983	70.1356	40.5	14.8	40.4761	
1771	明和８年	172.983	84.1356	48.6	14	40.4761	
1772	安永元年	172.983	136.1956	78.7	52.6	40.4761	
1773	安永２年	172.983	142.3756	82.3	6.18	40.4761	
1774	安永３年	172.983	147.7756	85.4	5.4	40.4761	
1775	安永４年	172.983	153.1756	88.5	5.4	40.4761	
1776	安永５年	172.983	158.6356	91.7	5.46	40.4761	
1777	安永６年	172.983	159.0256	91.9	0.39	40.4761	46.142
1778	安永７年	172.983	159.8056	92.4	0.78	40.4761	46.142
1779	安永８年	172.983	159.8056	92.4		40.4761	46.142
1780	安永９年	172.983	161.2356	93.2	1.43	40.4761	46.142
1781	天明元年	172.983	161.8856	93.6	0.65	40.4761	46.142
1782	天明２年	154.3036	144.4045	93.6		36.1053	41.1594
1783	天明３年	154.3036	144.4045	93.6		36.1053	41.1594

図３　本田畑・新田畑の年貢賦課可能分の割合推移

※新畑はすべて 100%



西暦	元号	新田	年貢賦課可能な新田	年貢賦課可能な新田の割合	本田	年貢賦課可能な本田	年貢賦課可能な本田の割合	起返（本田）	本田免（起返除）	新田免（起返除）	本畑免	新畑	納合（米）／実石高%	特記事項
1763	宝暦13年	16.013	7.843	49.0	257.538	212.029	82.3							
1764	明和元年	16.013	7.843	49.0	257.538	212.029	82.3		46.6	19.1	36.1	19.9	42.5	
1765	明和２年	16.013	7.843	49.0	257.538	210.501	81.7		46.8	19.9	36.1	19.9	42.5	風水損
1766	明和３年	16.013	7.843	49.0	257.538	209.989	81.5		44.8	17.5	36.1	19.9	41.4	
1767	明和４年	16.013	0	0.0	257.538	0	0.0		0	0	36.1	19.9	31.5	大洪水
1768	明和５年	16.013	4.343	27.1	257.538	37.514	14.6	10.261	32.3	24.2	36.1	19.9	30.1	
1769	明和６年	16.013	4.343	27.1	257.538	42.097	16.3	4.583	30.9	24.2	36.1	19.9	29.3	
1770	明和７年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	33.7612	15.1	12	18.3	24.4	36.1	19.9	29.1	旱損
1771	明和８年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	58.3748	26.1	14	19	24.3	36.1	19.9	23.9	旱損
1772	安永元年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	84.1218	37.7	21.6	16.7	24.5	36.1	19.9	20.3	
1773	安永２年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	91.1218	40.8	7	17.3	25.2	36.1	19.9	19.8	
1774	安永３年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	98.1218	43.9	7	14.94	22.82	36.11	19.88	18.6	
1775	安永４年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	105.3218	47.1	7.2	16.13	22.82	36.11	19.88	18.7	
1776	安永５年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	105.5762	47.3	6.96	15.15	22.82	36.11	19.88	18.3	虫付
1777	安永６年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	112.5218	50.4	0.24	20.26	28.85	36.11	19.88	17.5	
1778	安永７年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	113.1218	50.6	0.6	16.3	28.85	36.11	19.88	16.4	
1779	安永８年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	95.1658	42.6		21.7	34.23	36.11	19.88	17.6	水損水□□
1780	安永９年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	114.3218	51.2	1.2	12.85	28.29	36.11	19.88	15.7	
1781	天明元年	13.8922	3.7677	27.1	223.43	115.0418	51.5	0.72	21.13	46.85	36.11	19.88	18.6	
1782	天明２年	12.3921	3.3609	27.1	199.3031	102.6191	51.5		21.13	46.84	36.11	19.92	18.5	
1783	天明３年	12.3921	3.3609	27.1	199.3031	102.6191	51.5		21.96	46.84	36.1	19.88	19.0	

引」では同じく天明元年まで記載があるので、年貢割付状では「須入引」は水田として復興することが困難なほどの、おそらくは大量の土砂をかぶり水田としては利用できない程度の、被害を受けたものと想像される。「川成引」はそれよりもやや軽傷の被害を指していると思われる。ちなみに明和５(1768)年の年貢割付状には過去の分も含めて「須入引」の引高は、諸引高のうち本田で21.0%、新田で51.0%である。

明和４年以降、明和７年ごろまでは復興が思うように進まず、「旱損」「虫付」という被害が続くが、それ以降は順調に復興が行われたようである。しかし安永６年段階で総村高のうち本田51%強、新田27%強までしか復興できず、明和3年と比較しても、本田62%程度、新田55%程度しか復興ができなかった。水田は、大量に土砂をかぶりまたは河川の一部となり、半分程度が放棄されたと推測される。一方、畑地はほとんどが復興され、年貢賦課可能な農地のうち3分の2強を占めるにいたる。これは、低免に設定される畑地が多くを占めるということになり、起返分として低免に設定された農地が多く存在することを加味すると、復興とともに村の取米率が低下することになる。

これらから明和４年亥年の水害による西鴛鴨村の田畑被害状況は、以下のように推定される。

④ 明和４年亥年の水害は、主に水田に甚大な被害を与え、最終的に半分程度は復興されなかった。

⑤ この結果、もともと半分強が畑地であった西鴛鴨村は、3分の２強が畑地となり、取米率を低下させることとなった。

（４）明和元～天明元年の免と

「大草太郎左衛門」（表４・図４）

また、領主側はこの明和4年亥年の水害の甚大な被害に対してとった動向を見てみる。このために免について把握すれば、どのような年貢減免措置などをとったかがわかると思われる。

本田・新田などを区別してそれぞれの免を算出できる明和元年から小牧領へ移行する直前の天明元年(1781)までを対象とする。（小牧領となって定免が導入され、傾向がつかみにくいので除く）起返分を除いた本田・新田の免を示したグラフが図４である。ちなみに本畑と新畑の免は、それぞれ「三ツ六分壱厘壱毛（36.11%）」「壱ツ九分八厘八毛(19.88%)」で、変動はない。

明和４年以前は、本田45%前後・新田20%弱とある程度固定されている。明和４年亥年の水害による米の全滅後は、おおよそ復興したと思われる安永６年を境に傾向が変わる。

明和5年～安永5年段階を見ると、新田25%弱の免であまり変動が見られない。しかし、水田の多くを占める本田では、明和5･6年こそ30%強の免であったが、明和７年以降20%以下となり安永３年には15%を切るにいたる。

安永6年以降では、安永年間に実施された新田検地による村高の増加ばかりでなく、一転して本田･新田ともに増徴が図られている。また年ごとの免の変動が大きい。これは、洪水の被害を受けた安永８年は高免であることと安永８年を除き年貢総量はほぼ一定であることから見ると、豊凶に変動されているというよりも村としての年貢総量を確保するためと考えられる。御料所が中心となる最終年の天明元年には、本田「弐ツ壱分壱厘三毛(21.13%)」新田「四ツ六分八厘五毛(46.85%)」となり、その免が小牧領にも継承される。ただし新田でこの一般的な免が課せられるのは３石強に過ぎず、村全体としては低免であるといえる。

以上のように見てきた西鴛鴨村の免の動向であるが、これは領主が洪水の被害を受けた西鴛鴨村をどのように扱ってきたかということでもある。明和７年以降、復興を助けるために低免を続け、おおおよその復興の後は年貢増徴という幕府全体の路線にしたがった結果と思われる。このときの西鴛鴨村御料所の代官は「大草太郎左衛門」で、大草政薫（まきただ）という人物にあたる。「大草太郎左衛門」一族は駿河・遠江・三河の代官を代々歴任し、大草政薫は宝暦11年(1761)遠江の中泉代官となり、安永４年に三河の赤坂代官を兼任している。※13大草政薫自身は遠江・三河・信濃に支配地を持ち、宝暦13年に西鴛鴨村が天領

※13 新編岡崎市史編集委1992・Ｐ382

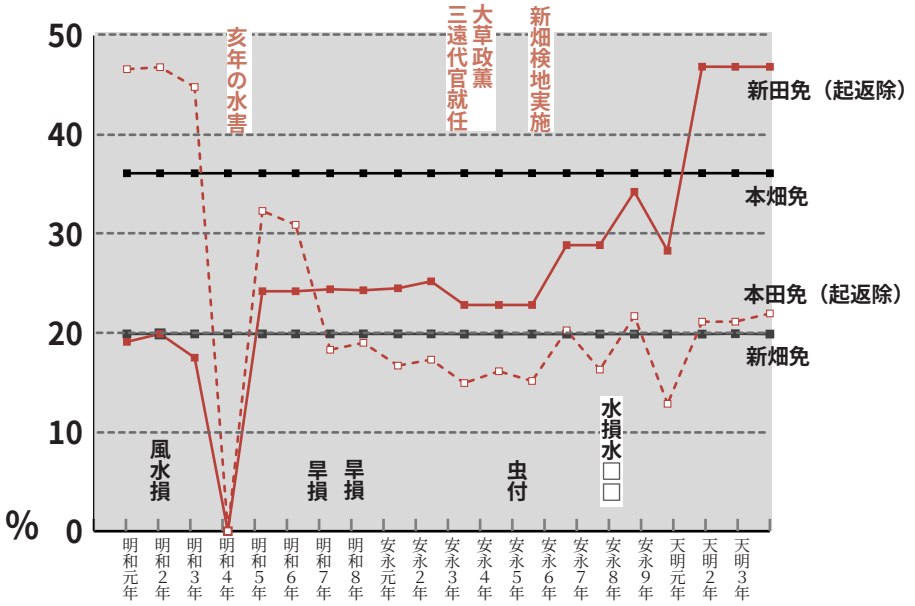


図4　本田畑・新田畑の免の推移

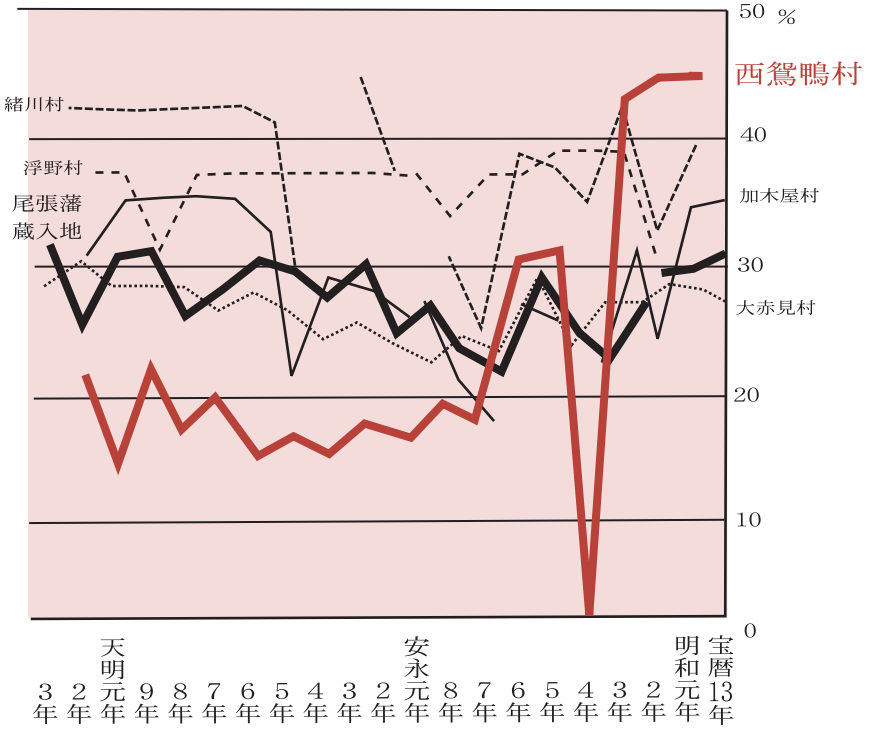


図5　西鴛鴨村と尾張藩諸村との本田免の推移

（伊藤 1996 に一部加筆）

となって以降、常に大草政薫の支配下にあった。ちなみに現在の鴛鴨町の八幡宮に「大草太郎左衛門」をまつっている※14。これは、この大草政薫をまつったものと思われる。しかし、莫大な額に上がった借財を埋めるために御料の村々から金銭を借り入れたがその返済に怪しいところがあり、年貢や公金の取り扱いで不正があるとして、寛政２年２月八丈島に遠島となっている※15。

彼は、明和４年亥年の水害によって流失した伊保村の用水池の大堰に対し翌年復旧工事のために金50両を※16、明和６年にも八草村の堤防切所修復工事や田籾村「用水井堰」工事にも賃米や杭代を負担している※17。代官の職務上このような工費負担は当然であろうから、東西鴛鴨村に対しても同様な工費負担があったであろうことは容易に想像できる。東西鴛鴨村の被害から考えるとおそらくは大規模な工事となり、これを東西鴛鴨村民は恩として八幡宮にまつったものと思われる。

これらから明和４年亥年の水害以降、復旧のために代官からどのような援助があったかが、以下のように想像される。

⑥ 明和４年亥年の水害の被害に対し、明和７年から年貢減免が積極的に行われた。しかしおおよその復興を遂げた安永６年以降は年貢総量の確保が行われており、代官も復興を遂げたと認識したと思われる。

⑦ 堤防・農地・灌漑施設などの復旧に対し、代官からの多額の工費負担があったと想像される。

（５）宝暦末年～天明初年の尾張藩領諸村との比較（図５）

最後に、この地方に明和４年亥年の水害はどのような被害を与えたかを知るために、尾張藩領内の丹羽郡大赤見村・同郡浮野村・知多郡加木屋村・同郡緒川村の本田免※18と西鴛鴨村の本田免とを比較した。これをあらわしたのが、図５である。

なお尾張藩では、寛保元年(1741)以降取米率が上昇し蔵入地の取米率30%前後を確保してきたが、農民層の分解と下層農民の抵抗から明和・安永年間は取米率がが激減し明和７年には最低を記録するにいたる。天明元年からの農政転換を中心とする天明改革により再び取米率が上昇してゆく※19。西鴛鴨村において本田免がわかる明和元年から天明元年までは、尾張藩でも年貢減少を見せていた時期である。また明和２・４・８年に水損、安永２年に凶作、安永３年に飢饉があったとされる。特に明和4年の洪水で死者四千人を出し、30万石が水入りするという被害をうけた※20。

前述の４カ村でも明和２年頃から急激な落ち込みが増え、明和６年から安永２年頃にかけてを底にして再び上昇傾向を見せ安永７年頃には安定する。これは、無論農民の抵抗もあろうが、水損をはじめとした災害で免を下げざるをえなかったことを意味すると考える。

また、この時期がさらに西鴛鴨村に大きな被害を与えた洪水が起きた明和４年は、尾張藩でも明和７年と並んで蔵入地の取米率が下がった時期で、知多郡の２カ村は下降が見られるのに対し、丹羽郡の２カ村では免の下降は見られない。これは、明和４年は知多郡から碧海・加茂郡にかけて何かの原因で収穫が減少したことを意味し、それはやはり洪水か洪水を引き起こした連日の大雨に起因するものと考える。

これから以下のことがいえよう。

⑧ 明和年間から安永７年頃にかけては尾張から西三河にかけて、水損をはじめとした災害が多発した。特に明和４年のものは知多郡から碧海・加茂郡にかけて各地で水害があったと思われる。

（６）西鴛鴨村にとっての明和４年亥年の水害とは？

明和年間から安永７年頃にかけて現在の愛知県下は災害が相続く時代であった。この時矢作川のつくる扇状地上にあり、あまり農業生産性が高いといえない西鴛鴨村にとって、特に明和4年の洪水は江戸時代随一の大災害で、村民の不断の努力や代官による減免や堤防などの復旧工事の工費負担などにより安永６年までの10年でおおよその復興を遂げた。但し、復興をあきらめざるを得ない農地も少なからず存在し、特に水

※14 長谷川義雄氏のご教示による
※15 賀川隆行『日本の歴史⑭崩れゆく鎖国』p159
※16 豊田市教委 1981・Ｐ339
※17 豊田市教委 1981・Ｐ343
※18 伊藤忠士 1996・Ｐ187
※19 伊藤忠士 1996・Ｐ182
※20 新編岡崎市史編集委 1992・Ｐ902

田に甚大な被害を与え、最終的に半分程度は復興されなかった。この結果、3分の２強が畑地となり、取米率を低下させることとなった。以上のこの苦しい洪水体験が、明和４年の洪水を代々語り継いでいくことになったのだろうと思われる。また、この激動の中で農民階層分化が進み、天保７ (1836) 年の加茂騒動へつながっていくことになるのだろう。東西鴛鴨村ではどれだけの農民がこの一揆に参加したかは不明だが、何らかの形で接触があったものと思われる。

４．むすび

以上、近世の東西鴛鴨村の歴史を紹介しながら、『鴛鴨区有文書』の西鴛鴨村に関する部分の「年貢割附状」から明和･安永期の水害、特に明和４年の洪水の被害状況とそれ以降の復興していく様子を見てきた。

「年貢割附状」だけではなく、「年貢皆済状」や村絵図などの他の文書をも対象とすれば、当初我々が意図したこの洪水の被害場所などもわかったことと思われるが、週1回の文書閲覧ではそこまではかなわなかった。また「年貢割附状」という領主側の文書を利用したため、村民の復興努力などはまったく知ることができなかった。

また、ここで問題とした時期は、享保改革から推し進めてきた年貢増徴・新田開発といった政策が破綻し、田沼意次政権が商業資本と結び幕府財源を確保しようとしていた時期である。本論では年貢収奪に対する農民の抵抗といった観点が欠け、今後の研究課題となろう。

『鴛鴨区有文書』は、正保３年以降明治初年までの年貢関係文書・検地帳・大福帳・村絵図などが多数残っており、岡崎藩の村政や人口の変遷なども知ることができる。今後の進展に期待したい。

最後に、小稿をまとめるにあたって、川井氏・鈴木氏・伊藤氏・後藤氏に多大なご指導･ご協力を得た。また、文化財保護委員長の長谷川義雄氏には鴛鴨区民会館の開錠･施錠をはじめ、数々のご教示などをたまわった。他、同僚の調査研究員をはじめ多数の方の協力をたまわった。記して謝意を表します。

[付記]

「年貢割附状」を実見して、藩の違いによる文書形式の違いがあり相互の比較に手間取った。そこで私達が確認した範囲でその文書形式の違いを後学のために参考として載せておきたい。

また、2000年２月現在で、『鴛鴨区有文書』の整理により状況は下記のことが確認できた。多数の村政文書があるので、調査が望まれる。

・「年貢割附状」…鴛鴨村の正保３(1663)年以降の書状は、東西ともに領主をとわず、慶応３(1867)年まで完全に残存している。

・「年貢皆済状」…鴛鴨村の正保３(1663)年の書状が単独で残存。それ以降の岡崎領分の書状は、西村は文久元(1861)年以降、東村は嘉永３(1850)年以降が残存。なお、大多喜藩分は「年貢割附状」の裏書に年貢皆済を証明する様式のため存在しない。その他の領主分は慶応３(1867)年まで完全に残存している。

参考文献

(財)愛知県埋蔵文化財センター	1998.3	『(財)愛知県埋蔵文化財センター平成９年度年報』
新編岡崎市史編集委員会	1992.7	『新編岡崎市史近世３』
豊田市教育委員会	1981.3	『豊田市史二近世』
豊田市教育委員会	1980.3	『豊田市史七近世』
林英夫他	1987.9	『図説愛知県の歴史』河出書房
賀川隆行	1992.7	『日本の歴史⑭崩れゆく鎖国』集英社
青木美智男	1989.2	『大系日本の歴史 11 近代の予兆』小学館
神崎彰利	1983.4	『検地－縄と竿の支配』教育社
木村礎	1980.7	『近世の村』教育社
村上直	1997.1	『江戸幕府の代官群像』深高社
伊藤忠士	1996.12	「尾張藩における年貢の収奪」『近世領主権力と農民』吉川弘文館

寛文四年（一六六四）岡崎藩領分

岡碕領西鴛鴨村辰之免定

一高四百六拾六石九斗五升壱合弐勺
内
三斗九升　庄屋取下
拾三石壱斗七升八合六勺　田方辰ノ検見ニ引
田方八拾七石四斗四升九合弐勺　免六ツ七分
田方八拾三石壱斗九升弐合　荒子　免五ツ六分
田方八拾三石三斗壱升九合六勺　山田　免四ツ七分
畑方百拾壱石八斗七升六合三勺　免六ツ五分
畑方七拾五石七升三升壱合五勺　荒子　免五ツ三分
畑方拾壱石八斗壱升四合　山□田　免五ツ三分
子ノ新切畑　免三ツ取
一高壱石弐斗六升四合　申ノ新切畑
一高弐石六斗四升三勺免三ツ七分　丑ノ新切畑
一高壱斗四升七合免弐ツ取
当辰ゟ七斗五升西田新郷出シ候分引
一米三石六斗六升五合　山年貢
一米壱石四斗三升弐合　藪年貢
一米四斗四升六合　茶年貢
一米七升六合　柳年貢
一米壱斗七升　居林年貢
右之通相定上者極月十日以前ニ
急度皆済可仕者也　都築勘兵衛　印
寛文四年辰十一月廿一日　櫟木茂兵衛　印

右之村庄屋百姓中

宝暦十一年（一七六一）岡崎藩領分

岡碕領西鴛鴨村免定

一高四百五拾六石九斗弐升八合
内
三斗九升　庄屋取下引
壱斗七升三合　田方永引
壱石六斗五升四合　山田永引
四升三合　畑方永引
三石八斗七升九合　山田卯ゟ荒永引
田方七拾七石七斗壱升七合
田方八拾弐国弐斗七升七合　荒子
山田八拾五石弐斗九升八合
山田五石五斗壱升三合　白計
山田壱石弐升七合　起帰
畑方百拾壱石九斗七升壱合
畑方七拾五国壱斗七升弐合　荒子
山畑拾壱石八斗壱升四合
一高四拾石七斗五升弐合　新切田畑
内
九斗弐升　新田永引
五石九斗五升三合　田方高岡無取
壱石弐斗九升七合　田方卯ゟ荒永引
田方三石六升三合
畑方拾六石九升六合　高岡無取之内
田方四石八斗弐升弐合　起返戌起返共
畑方八石六斗壱合　申起山寺屋敷
一高六斗九升　亥子改新田井道共
一高一斗五升六合　戌亥巳卯未改藪起畑
一高三石五升五合　田方高岡新切戌改
一高九升　午戌辰未改新畑戌巳改山新
一高七石壱斗五升五合　畑共
一高拾石七斗七升　亥改新畑
一米三石四斗九升八合　山年貢
一米六斗弐升七合　居林年貢
右弐拾ヶ條高合五百九石四斗壱升弐合
此取米五百四拾六俵（辰年ゟ午年迄願之俵高）
※（　）内は2段書き
右之通極月廿日以前
急度可致皆済者也
宝暦十一年巳十二月七日　剱持嘉兵衛　印
古市四郎右衛門　印

右之村庄屋百姓中

明和四年（一七六七）御料所（赤坂領）分

亥御年貢可納割付之事

三河国碧海郡

西鴛鴨村

一高五百拾九石五斗九升六合

此訳

田高二百五拾七石五斗三升八合　本田

二石三斗六升一合　前々道代引

二拾四石四斗七升七合　同　須入引

内　拾六石九斗七升一合　同　荒地引

三拾二石九斗一升八合　当亥須入引

百五拾一石一斗五升四合　同川成引

弐拾九石六斗五升七合　同水損皆無引

小以二百五拾七石五斗三升八合

残なし

畑高百九拾九石三斗九升　同断

内　四升三合　前々荒地引

百五拾七石八斗一合　当亥須入引

小以百五拾七石八斗四升七合

残四拾一石五斗四升六合

此取米拾五石四合

田高拾六石一升三合　新田

八石一斗七升　前々須入引

内　三石五斗　当亥川成引

四石三斗四升三合　当亥水損皆無引

小以拾六石一升三合

残なし

畑高四拾六石六斗五升五合　同断

此取米九石弐斗七升三合

小以取米二拾四石二斗七升七合

外

一米壱石三斗八升七合　弐升出目米

一米三石六斗九升八合　山年貢

内　弐斗　弐升出目米

一米六斗六升三合　林年貢

内　三升六合　弐升出目米

一米七升　秣場年貢

内　四合　弐升出目米

是者大林村渡苅村私領市場村入会

懸高二百九拾八石弐升四合

外高二百二拾一石五斗七升二合　田方五分以上引高之分除く

一米一斗七升九合　御伝馬宿入用

懸高同　六尺給米

一米六斗三升　内三升四合　弐升出目米

一永七百四拾五文一分　御蔵前入用

米三拾石九斗四合

納合永七百四拾五文一分

右者検見取当亥御成箇書面之通

相極候条村中大小百姓入作之者迄不残寄合

此免状を無高下令割賦極月十日

以前急度可皆済者也

明和四亥十一月　大草太郎左衛門印

右村

名主

組頭

惣百姓

天明三年（一七八三）大多喜藩領（小牧領）分

卯年西鴛鴨村年貢可納割付之事

一高四百四拾三石弐斗六升三合五勺
内
壱石八斗弐升七合壱勺　本田前々井道代引
四拾壱石八斗七升七勺　本田前々須入引
三拾九石八斗五升弐合七勺　本田前々川成引
拾三石壱斗三升三合五勺　本田前々荒地引
六石三斗弐升弐合六勺　新田前々須入引
弐石七斗八合六勺　新田前々川成引
三升三合三勺　本畑前々荒地引
九石八斗六升五合八勺　本畑前々須入引
小以高百拾五石六斗壱升四合三夕
高百壱石九斗七升六合九夕　本田
此取米弐拾弐石三斗九升五合壱夕
高六斗四升弐合弐夕　同断
此取米四升四合六夕
高三石三斗六升九夕　新田
此取米壱石五斗七升四合四夕
高三拾弐石壱斗五升壱合五夕　本畑本免
此取米拾壱石六斗壱升壱合四夕
免三ツ六分壱厘壱毛余
高九拾四石八斗四升九合七夕　同取下
此取米九石弐斗六升四合五夕
免九分七厘七毛内
去午ゟ酉迄年々
高拾四石八斗五升二合壱夕　同起返取下
此取米八斗九升壱合壱夕　免六分
去ル戌
高六斗九升五合八夕　同起返取下
此取米四升壱合九夕　免六分三厘之内
去ル子
高壱石弐斗七升五合六夕　同起返取下
此取米七升五夕　免五分五厘弐毛
去ル巳
高五斗七升九合八夕　同起返取下
此取米三升四合八夕　免六分
高三拾六石壱斗五合三夕　新畑
此取米七石壱斗七升六合弐夕
去ル酉高入
高拾四石三升三合弐夕　新畑本免
此取米壱石四斗三合弐夕　免壱ツ内
右同断
高弐拾七石壱斗弐升六合弐夕　同林畑
此取米八斗壱升三合五夕　免三分内
取米合五拾五石三斗弐升壱合弐夕
米四石七斗四升壱合　右差口
ニ口合六拾石六升弐合弐夕
外
一米四斗八升五合三夕　居林年貢
一米五升八夕　秣場年貢
一米壱石五斗五升六合壱夕　山年貢
一米壱斗七升九合三夕　右差口
一金四両壱分銀拾匁九分六厘　吏金
納合米六拾弐石三斗三升三合七夕
金四両壱分銀拾匁九分六厘
右之通相極上ハ来ル十二月廿日
以前急度可致皆済者也

天明三卯年十一月十五日　兵藤次路治印
坂部弥市　印
高宝八左衛門印

右庄屋小百姓中

（裏書）
表書之通皆済也此外何ニ而も
脇役申掛取候ハゝ何時も可申出者也

卯
十二月廿一日　備前　印